ふりーふらっと

横浜市青少年交流センター 開館５周年記念誌

財団法人 横浜市青少年育成協会

はじめに

交流センターには、決まった形がありません。

そのとき、ここに集う青少年たちによって、センターの顔が作られていきます。

彼らがセンターに合わせるのではなくて、彼らによって常に新しいセンターがここにあります。

一人で、または仲間たちと来て。目的を持って、またはふらっと来て。会議室やスタジオで練習したり、勉強したり、センターの事業に参加したり、スタッフとおしゃべりしたり…。それぞれが好きな方法でセンターを利用しています。

いろんな人たちが行き交って、出会って友だちになったり、何かを一緒に行ったり。交流センターは“施設”というよりも、“ご近所づきあい”に近いなと感じます。

先駆的に青少年の居場所づくりをされてきた方々に教わりながら、またセンターを利用する大人、地域の方々、そして子どもたちと一緒に育ってきた、とても幸せな5年間でした。

今までお世話になった皆様方へ交流センター5 年間のご報告をするとともに、これから青少年の居場所を広げていきたいと願う方々へ、交流センターの想いをお届けできれば幸いです。

横浜市青少年交流センター
センター長　山田亜紀子

交流センター・これまでの軌跡と展望

大槻繁美（横浜市青少年交流センター 前館長）

横浜市青少年交流センターは、勤労青少年センターとして昭和４５年から勤労青少年に特化した施設として設置されていたものを、少子化、核家族化、地域社会の人間関係の希薄化などにより、地域や家庭における子どもの教育力の低下が社会的な課題とされていたなか、青少年の活動や交流を支援し、青少年の自立促進や育成を図ることを目指した青少年の居場所として横浜市が転換整備し、平成１４年１２月１日にリニューアルオープンした施設です。現在は(財)横浜市青少年育成協会が指定管理者として管理運営を行っています。

施設は鉄筋コンクリート５階建てで、会議室のほかレクリエーションホール（体育館）、音楽演奏室、音楽スタジオ、多目的利用室、料理室、和室があり、バンドやダンス、演劇の練習やスポーツなど目的を持った青少年グループが多く利用しています。また、交流スペース（ロビー・読書室）や午後フリータイムとして開放しているレクリエーションホールには、受験生や大学生、小中高生が放課後ふらっと立ち寄り、勉強やお菓子を食べながら談笑したり、友達を見つけてスポーツをしたりと思い思いの時間を過ごしています。開館から５年たった現在、青少年に「目的があってもなくても、一人でも仲間とでも、自由に過ごせる場所」として定着し、毎日１００人を超える青少年に利用されています。

現在は多くの青少年に利用されるようになりましたが、開館当初は近くの図書館の学習室が利用できない受験生がフリースペースに勉強に来るケースがほとんどでした。センターがターゲットとする中高生にどのようにＰＲすれば利用してもらえるのかを考え、東京都杉並区の児童青少年センター（愛称：ゆう杉並）をはじめとする他都市の類似施設を利用する青少年の分析を行い、ＰＲ計画を立てました。

中高生はよほどの目的がない限り、交通費をかけて施設には来ない傾向が強いため、“徒歩または自転車で来られる”“通学定期で途中下車して立ち寄れる”近隣の中学校、高校、専門学校、大学をピックアップし、訪問して施設ＰＲを行ないました。そして、来館した青少年とロビーワークを通じて人間関係を作るとともに、青少年のニーズを反映した事業を実施し、施設が青少年の居場所を目指していることを理解してもらい、来館した青少年の口コミで利用者が増えていくことをねらっていました（開館当初の取組を振り返る資料として文末に交流センター１周年記念式典で配布した「交流センターのあゆみ」を掲載しています)。

交流センターの取り組み

開館以来継承している交流センターの役割の視点は、「青少年が他者との関わりのなかで自分の位置と将来の方向性を、その時々で確認できる場」を提供していくことにあります。

少子化や価値観の多様化が進み、「青少年の集団離れ」が青少年の健全育成活動の分野で問題になっているなか、大人が示す価値やプログラムに魅力を感じてもらい、活動に参加する青少年を増やそうとしても限界があります。青少年を集団として捉え、大人が目標を設定し、それに向けて青少年を「教育」「育成」「指導」するといった手法が、価値観が多様化する社会のなかでは効果的とは言えなくなっている状況下

で青少年を育成していくために、青少年自身が自ら考え、目標を見い出し、大人がそれを側面的に支援していく手法、青少年の「関わり」「参画」を図っていく手法を展開していくことにより、青少年が自己を確認し、他者と関わり、社会に参画していくきっかけを見つけることができる「青少年の育ちの場」としての機能・役割を高めていくことを目指しています。

センターのスタッフは、「青少年とともに歩む施設」をモットーに管理運営に努め、「青少年の声に耳を傾ける」ことを心がけています。できる限りルールを作らず、青少年に「皆が気持ち良く使えるよう利用しよう」と声をかけ、どうすれば自分のやりたいことを他の人に迷惑をかけずにできるようになるか、活動の工夫をスタッフと青少年が一緒に考えたりもします。初めは人に迷惑をかけてしまっても「ルールが無いからできなかった」「ルールを決めてもらえばそうするよ」と言っていた青少年たちに根気良く働きかけ、何かトラブルが起きた時にはスタッフを中心に当事者全員で話し合いをし、どうしていけば良いのかを皆で決めるよう努めています。

開館当初は市内に類似施設がなく、細かく決められたルールのなかで活動をすることに慣れてしまっている青年たち（高校生や大学生）は、ルールが無いことに戸惑いを感じ、「小学生や中学生がうるさいので、大声で話さないようルールがあれば良いのに」とか「危険なのでローラーシューズを履いている子は入館できないルールを作ってほしい」など、子どもたちに注意をしたくてもルールが無いのでできないとの声が多く寄せられました。そのような青年たちには、「ルールが無いから注意しないではなく、その行為に対して自分はどう思っているかを子どもたちに分かりやすく説明してあげてほしい。そして、どうすれば問題が解決するのかを子どもと一緒に話をしてあげてほしい」とお願いをしてスタッフと一緒に声をかけることから始めました。

また開館１年目は、青少年に施設を身近に感じてもらい、無理のない範囲で施設に関わってもらうことを目標に、事業を実施する際はロビーワークを通じて交流スペースの常連の青年やセンターを利用しているグループに協力をお願いして、事業の運営を手伝ってもらうことから始めました。結果、５月５日に開催した「こどもの日まつり」には、中高生を中心に勤労青年まで多くの青少年が横断幕の作成や室内の飾り付け等の準備作業から運営に関わってくれました。遊びに来た中高生たち、学校や地域の仲間が運営スタッフとして事業に関わっている姿を見て、「次回からは自分も運営スタッフとして事業に関わりたい」と申し出る者が多くいました。夏休みには、交流スペースやレクリエーションホールに遊びに来る小中学生に、施設スタッフ以外の多くの人に話し相手や遊びのサポーターとして関わってもらいたいと言う思いと、青年にボランティア活動の場を提供することをねらいに、夏期青年ボランティアを募集しました。活動には夏休み期間中、高校生から勤労青年までの青年８６人が一人５日間の日程で参加しました。活動に参加した青年ボランティアからは、「色々な人と触れ合って、色々な考えを知り、自分の考え方が変わりました」「将来教員を目指しているので、生徒とどのように接するか、今回の経験が活かされると思います」「学校などでも発言をしたり、積極的に行動したりできるようになりました」「これからどんどんチャレンジしていくつもりです」などの声が上がり、全体の約９０％のボランティアが今後何らかの形でセンターに関わっていきたいと答えてくれました。

開館当初からのロビーワークを通した人間関係づくりと事業への関わり、ボランティアの導入を通して、青少年とスタッフの関係が密になるにつれ、最初は与えられた役割をこなすことに一生懸命で、事業が終

わると子どもたちが喜んでくれたこと、皆で協力して事業が無事に終わったことに満足していた青少年たちに変化が現れ、事業を重ねていくなかで自分達も企画に関わって自分が考えている事業を実現させてみたいと要望する者が多くなりました。スタッフも青少年からの意見を大人の手ですり替えることの無いよう、できるだけ青少年の言葉に耳を傾け運営や事業に反映する取り組みを行ない、青少年が主体的にセンターに関わっていける組織として、開館１年をむかえる前に中学生から２４歳以下の青少年で構成する青少年委員会を設置することができました。青少年委員は、青少年の意見や要望をセンターの管理運営に反映させていくこと、また、青少年委員がセンターでの事業の企画や運営の中心となることで、青少年の自主的な活動や交流の促進を図ることを目的に現在も継続的に活動しています。

今後の展望

開館から５年間、非常にゆっくりとした歩みではありますが、青少年が様々な形で施設と関わりを持ち、関わりのレベルを高めることにより、施設への帰属意識が高まり、自分達の課題を達成するための自主的な活動を展開していくことを通して青少年が育ち、それを側面的に支援するセンターのスタッフが育ち、事業が効果的に展開され施設を中心として地域が活性化していく過程を大切に交流センターを運営してきました。

価値観が多様化し、青少年を集団としてとらえることが難しくなり、大人があるべき目標を設定し、それに向けて青少年を「教育」「育成」「指導」するといった手法が通用しなくなった今、青少年を健全育成していくために、青少年自身が自ら考え目標を見いだし大人がそれを側面から支援していく手法、青少年の「関わり」「参画」を図っていく事業手法を交流センターで展開していくことにより、青少年が自己を確認し、他者と関わり、社会に参画していく糸口を見つけることができる心理的な「居場所」としての役割を高めるとともに、センターで育った青年が横浜市全域での青少年育成に関わりを持てるよう、地域で青少年の育成に取組んでいる機関・団体や育成者との連携や情報の発信基地としてノウハウ提供とネットワークを充実させ、青少年の生活圏に「居場所」が作られ継続的に運営していけるよう、人材の育成、場の確保、地域ぐるみで居場所を支える仕組みづくりを横浜市とともに推進していくことが交流センターの重要な役割であると考えています。

交流センターの基本方針

交流センターでは、中高生をはじめとした青少年を教育するとか、管理するのではなく、青少年自身が自由にそれぞれのペースで活動にとけ込んでいけるよう配慮し、学校や家庭では体験できない自主的・主体的な活動や人間関係を通して成長し、社会に一歩を踏み出していけるよう支援しています。また、交流センターは、大学生や勤労青年などの青年活動の拠点でもあります。青年による社会貢献活動が活発になり、様々な社会課題に対して、青年の力が未来の地域社会づくりに役立てられるようにするため、活動や交流の場の提供、情報や人材の支援なども行なっています。

交流センターの運営方針

交流センターは、次に挙げる５つの役割に基づいた運営方針をたてています。

①中高生の居場所としての役割

自分の時間を楽しみたいと思って来館する青少年のために、交流スペースやレクリエーションホールにフリータイムの時間帯を設けることにより、他から干渉されずにくつろげる空間を確保しています。

また、場の提供だけではなく、状況に合わせ臨機応変に声をかけたり要望に応えたり、より居心地の良い時間を過ごせるよう、スタッフによるロビーワークを行なっています。

いじめや引きこもり等の青少年については、教育総合相談センター（市教委）の適応指導教室に活動の場を提供することから始め、市内の若者自立支援に取り組む様々な機関・団体との連携を図っています。

②中高生の自主的な活動の場としての役割

学校の部活動の延長として、また、学校や家庭では活動しにくいバンド活動やスポーツ、趣味等の活動の場として、会議室・多目的室や音楽室、レクホールを貸し出しています。

なお、部屋の利用ルールについては、できるだけ制限を設けずに活動場所を提供するとともに、利用者の声を運営に反映しています。

また、スポーツ系、音楽系、ダンス系、工作系の事業を青少年のニーズを調査・把握したうえで実施し、ルールを守ることの大切さや仲間との活動の楽しさを知るとともに、達成感を味わったり自己表現手段等のスキルアップを図ったりできる機会を提供しています。

③社会性を身に付ける機会と場を提供する役割

挨拶、公共の場のルールを守ること、他人に迷惑をかけないようモラルを意識し、お互いに譲り合いながら施設を利用することで、中高生が社会性を身に付けられるような日常的な働きかけを、窓口やロビーワークを通してスタッフが実践しています。

④地域や保護者等との連携と交流の場としての役割

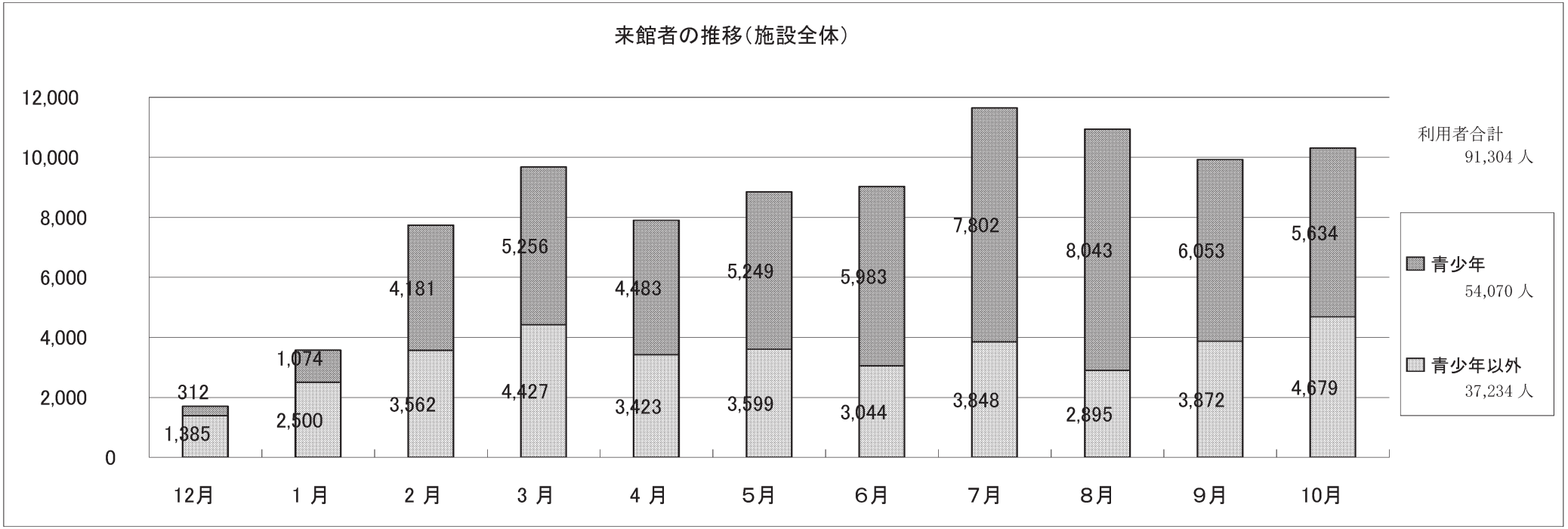
中高生を中心とした青少年の課題や交流センターの取り組みを地域の大人に理解してもらい、青少年の健全育成に協力してもらえるよう、また、青少年自身が多くの大人と交流することを通して成長できる場を提供していくために、利用者が出演するコンサートや親子クラフト教室等、地域の多年齢層を対象とした事業を実施しています。

⑤未来の職業設計をしていけるような支援をする場としての役割

現在は、若者自立支援の一環として、自分の就職について考えていたり、将来の目標を見つけられず悩んでいたりする青少年を対象に、就労体験や技能に触れることができる事業を、青少年のニーズを把握しつつ関係機関・団体と連携し、青少年の手により実施することを目指しています。

横浜市青少年交流センターのあゆみ

2002／11〜12月 開館準備〜開館記念式典〜ニーズ調査	2003／１〜３月 利用促進プロモーション①（ＰＲと設備の充実）	４〜７月 利用促進プロモーション②（事業の試行と充実）	８〜10月 組織の充実	開館１周年記念事業 11月29日（土）
利用促進の第一歩として、中高生の利用を促進することを重点に、東京都杉並区児童青少年センター（愛称：ゆう杉並）をモデル施設として、中高生へのＰＲを進めました。 具体的には、モデル施設の利用者の状況を分析し、徒歩や自転車で２０分で来られる範囲の中高生の利用が中心であったため、交流センターの場合は通学途中駅で下車して２０分で来られる中学校・高校・大学・専門学校等をピックアップして訪問ＰＲを中心に行ないました。 ※ 勤労青少年センターとして設置されていたときに利用対象外だった近隣の中高生に施設を知ってもらうことができ、２月以降、青少年（２４歳以下）の利用者が青少年以外の利用者を上回るようになり現在に至っています。		青少年の興味・関心に合わせた事業を企画・実施することにより、利用拡大を図りました。 具体的には、ロビーワークやアンケートを通じて得た中高生のニーズを基に事業を企画し、施設利用の青年にスタッフとして協力してもらいながら事業を実施しました。 ※ こどもの日まつりは祭日であったため、動物園に来た広い地域からの家族連れの参加がありました。	夏休み期間を中心に青少年対象の事業を実施するとともに、事業を企画運営する青少年スタッフや交流スペースで活動する夏期青年ボランティアを導入しました。 また、青少年の自立促進や育成を図る拠点施設としての役割を十分に果たせるよう、センターの運営機能の促進を図ることを目的とする運営委員会、青少年の声を活かした施設運営を進めるための青少年委員会、青少年スタッフの手による開館１周年事業の実行委員会等を設置しました。	記念式典及び活動発表・地域交流会を青少年による実行委員会を組織し実施しました。 また、式典で施設の愛称を発表しました。
①他都市の類似施設調査・視察 ②利用者の手引き・パンフレット作成 ③開館記念式典（11／30） ④来館者へのニーズ調査 （掲示板の活用等）	①ポスター作成・配布 ②近隣の施設・学校を訪問し施設ＰＲ ③スタジオ・演奏室の機材充実 ④書籍の充実 ⑤ゲームコーナー設置 ⑥コピー機増設 ⑦ロビーワークの推進	①園芸部活動開始 ②こどもの日まつり（５／５） ③第１回@楽祭（アットガクサイ　６／28） ④七夕まつり ⑤ミニコミ紙「ざ・Ｃｏ・りゅう」発行 ⑥夏期青年ボランティア企画・募集 （青少年委員会につなげていくことも考えて） ⑦夏休み行事の企画	①夏期青年ボランティア活動 ②夏休み行事実施 ③運営委員会設置 ④青少年委員会設置 ⑥開館１周年事業企画（実行委員会） ⑦施設愛称募集（愛称選定委員会） ※ 愛称は広報よこはま８月号で周知しました	①記念式典 愛称発表 ②活動発表・交流会



青少年委員会 歴代委員長＆担当職員座談会

青少年委員会という居場所

【出席者】第１,２期委員長（H15～16 年度）：森　正憲さん

第３期委員長（H17 年度）：峰尾　真維さん

第４期委員長（H18 年度）：大石　碧さん

第５期委員長（H19 年度）：金子　晴香さん

【コーディネーター】

七澤　淳子（委員会担当職員）

【青少年委員会とは】

青少年交流センターの設置趣旨である『青少年の居場所づくり・自立支援』の一環として、長期的なかかわり（委員会活動のすべて）から社会性を学ぶ場。学校や会社の関係とは異なる、共通の目標を持つ年齢や環境・価値観の異なる委員たちとの関係性の中から、協調性や思いやりの心を育て、また他者との関係から『自分の良さ』を知り、伸ばし、『自分の課題』を知り克服できるきっかけを、時間をかけながら自身で作り上げる場。

＜委員会の役割＞

① 青少年に対するロビーワーク等に対する助言

② 青少年向けの事業の企画・運営（広報紙発行含む）

③ 交流センター事業への参加、補助

【発足時の思い】

発足は平成１５年９月、開館してから１０ヶ月経ってから。これは、「交流センターで、青少年委員が何ができるのか、何をしてもらいたいのかを職員がきちんと理解できてから」募集したいと思ったからです。１０ヶ月で多数の青少年が来館し、イベントをやり、そして課題も見えてきました。夏休みには初めての「夏期青年ボランティア」が活動し、よりスタッフに近い存在での青少年の活動のあり方も理解し、交流センターが大好き！と言ってくれる青少年たちも増えてきました。

第１期生は、公募で申し込んでくれた委員とともに、利用者、夏期青年ボランティアから多くの参加がありました。

【活動内容】

①定例会（毎月１回、全員が集合し意見交換や交流、活動の方向性の確認や報告を行なう場）

②主催事業（定例事業となっているもの）の実施

③交流センター事業の補助

青年ボランティアのリーダーとして、夏期青年ボランティア活動の補助、イベントの補助などを行ないます

④宿泊研修（夏休み、春休み）

⑤その他

■第１，２期委員長

森　正憲さん･･･２４歳、委員会５年目。

将来の夢→もっと色々な世界の人たちと会って話す

私の居場所→今までは交流センター（委員会）。でも卒業なので新しい居場所を見つけていきたい。

■第３期委員長

峰尾真維さん･･･２１歳。委員会５年目。

将来の夢→大きな幸せばかりを望まず、些細なことで幸せを感じれる人になること。

私の居場所→私の事を思ってくれる人が居場所かな。もちろん交流センターも私の居場所です(笑)

■第４期委員長

大石　碧さん･･･２２歳。委員会５年目。

将来の夢→世界一周。

私の居場所→自分の心の中、かな？

■第５期委員長

金子晴香さん･･･２１歳。委員会１年目。

将来の夢→子どもを中心にした地域教育コミュニティをつくって、一生教育に携わりたい。

私の居場所→大好きな人たちがいるところ。

※委員プロフィール／年齢は平成 19 年 11 月時点のもの。

■委員会をはじめたきっかけは？

森　：僕は交流センターのオープン前から協会でボランティアをしていたので、ココの事業に色々かかわる機会も多くて。委員会発足の時に声をかけてもらったのがきっかけです。

峰尾：高校３年生の夏休みにあった「夏期青年ボランティア（以下：夏ボラ）」に参加して、その事後研修会で七澤さんに「やってみない？」と言われたから。センターが居心地いいな、このまま終わるのイヤだな、と思ったからです。

大石：私も峰尾さんと同じで、高校３年生の時の夏ボラがきっかけです。自分の世界を広げてみたいと思

って夏ボラに応募したんだけど、子どもたちや大学生や社会人のボランティアさん、そして職員さんとかかわってすごく勉強になったから。夏ボラが終わって、ここのつながりがなくなるのがイヤだ！と思って入りました。

金子：大学で子どもについて勉強していて、自分の街に子どもたちの居場所があったら楽しめるだろうと思っていて。その時に居場所づくりをしている施設が身近にあったのを知って、どんなところか知りたい！と思いました。

■続けているのは「人との関係」があるから

七澤：森君、峰ちゃん、碧ちゃんは長いよね。発足以来５年間も続けている理由って？

峰尾：毎年やめようと思っているのだけど（笑）。人との繋がりがきっかけで入ったから「もういいや」というのがなくて。委員のみんなとも、やめたら会えなくなっちゃうような気がして･･･。

森　：僕はゼロからイチにする段階をやったと思っているので、その“イチ”がこの後どうなっていくのか見ていきたいと思っていたら、今まで来ちゃったっていう感じです。

大石：最初はまだ委員の中でも年下の方で、先輩たちの中で楽しく自由にやらせてもらって。でもだんだんと上の立場になってきて、今度は後に残す役割なんだと思って。先輩たちが残してきたものや自分たちが頑張ってきたことを、先につなげたい、残していきたいと思っています。

■苦労があるほど喜びも大きい！？～自分の企画がカタチになること～

七澤：ゼロからのスタートも、継続していくことも難しさとおもしろさがあるね。ところで、青少年委員の大きな事業「広報紙」と「ワイワイおやつタイム」そして「かどもっちぃ～」はずっと続いているね。

森　：「かどもっちぃ～」は当時の副委員長とファミレスで相談して「門松ともちつきだから“かどもっちぃ～”でいいっ！」と決めて。「内容よりイベント名の方に時間かけたでしょ！」と七澤さんに怒られました（笑）。自分たちで企画したものが、大人の力を借りることで想像以上のものができました。

峰尾：森さんが「かどもっちぃ～」を作ったみたいに、自分も委員長になったら何か一つイベントを立ち上げたいと思いました。それで、せっかく毎月定例会で来るんだし、子どもたちと委員がもっとかかわれる継続事業ができたら･･･と思って「ワイワイおやつタイム」を企画しました。委員長じゃな

かったらあんなに一生懸命やらなかった（笑）。

大石：１年目の合宿で、広報紙を作っていきたいねってみんなで話し合って。パソコンの知識も全然ない中で、でも今から考えるとよくあれだけ作れたよなーと思います。泣きそうになりながら「もう出来ない！」とか言って、館長や職員さんに助けてもらいながら作り上げた第１号は、本当に思い出深い。

金子：ないものを作るのは本当に大変だったと思う。私は、みんながちょっとづつ意見を出して、それを組み合わせたイベントができればいいかなって思っています。

七澤：委員会活動の中で印象に残っていることは？

峰尾：やっぱり「おやつタイム」かなあ？人気事業になって、今も続いていることにビックリ。あと、ボランティアとして委員会の事業を手伝ってくれていた子が「峰さんの委員会を見て入りたいと思った」と言って入ってくれて。すごい嬉しかったなぁ。

金子：今年は２０人もいるしなかなか仲良くなれなくて。だから、夏の合宿でみんなで夜、語り合って、分かり合えていくのが感じられて。

森　：僕はやっぱり最初の「かどもっちぃ～」。委員だけでなく、センターの人全員がかかわるイベントができて、子どもたちもたくさん来てくれたことが嬉しかった。

大石：私は１年目の合宿。これから委員会をどうしていこうか？って夜通し熱い議論をしたこと（笑）。あれがあるから続けようと思った。

■人の中ではじめて分かる“自分”

七澤：私は、人の中に入ることで初めて「自分はこういうのが好きなんだ、苦手なんだ」っていうことが分かると思う。その中で、自分のアイデンティティを確立していって欲しいなと日々思っていて。交流センターは、そういう機会を色々な形で提供していて委員会もその一つだと考えています。委員長さんは中学生が社会人までがいる中で、時には我慢したり、前に出なきゃいけない時があったりして、委員の個性とかも、知らず知らずのうちに考えて運営していたと思うのね。そういう風に“他人”のことを見つめる中で、逆にみんなはどんな“自分”を発見した？

大石：私は自分がどんなにダメか、ということが分かりました（笑）。得たものは、やっぱり仲間！峰ちゃんとこんなに仲良くなれるとは思わなかった。学校だけでは出会えない人たちと合えた。ダメだけど、支えてくれる人がいっぱいいた。

峰尾：得た物は責任感ですよ、責任感（笑）。私は学生時代、面倒くさくてあまり行事とかに参加してなくて。だから今委員会で、それをやり直しているというか。こんなに楽しかったのか！自分は意外とこういうことが好きなんだ！ということを発見。

七澤：委員会ってどんな場所になって欲しいと思う？みんなはもうお兄さん、お姉さんなわけで･･･。年下の子とかに対して、自分が何をできるかとか考えたことはあるかな？

峰尾：せっかく入ったんだから、自分たちのやりたい事をしてほしいなというのは常に思っています。なかなかこの年齢や学生っていう立場ではできないことがたくさんあるから。今まで体験したことがないことにチャレンジしてほしいです。

大石：色んな年齢層の中で、自分のやりたい事をやれたり、言えることができる委員会だったらいいと思います。それで、委員会やって良かったってみんなに思ってもらえたら。

森　：僕が委員長だった時は、年上の人がいて年下もいて、ちょうど僕は中間で、上からも経験を伝えてもらえたし、下からも「こうしたい、ああしたい」って提案を･･･自由な考え方を吸収できた。それを、これからも委員同士の中で築いていってほしいと思います。

金子：私は、委員の輪が一つの居場所になればいいのかなと思っています。居心地が良いけど、一緒に考えて何かをするっていう目標を持っている仲間、何か家族というか･･･仕事上の付き合いとも友達関係とも違う、みんなで一緒に頑張れる関係だと思う。学校生活だとそういう経験があまりないので、一緒に目標を達成して、喜べる関係がある居場所であったらいいなと。

七澤：そうだね。委員同士の関係って年齢が違うけれどみんな同じ立場、というのがおもしろい。私は５年間で色々な委員の子を見てきたけど、年下の子たちが年上の委員に憧れて影響を受けていく姿や、先輩たちは頼りにされていくことでどんどんしっかりしていく姿を見ていると、まさに委員会が成長できる居場所、という要素を持っていると思う。

大石：新しい委員の子たちが定例会が終わっても、ずっと居たがったり、委員会を優先してくれていたりするのを見ていると「ああ、ココが居場所になっているのかな」って嬉しい。

金子：きっちりした時間だけじゃなくって、定例会後に、他愛もない話をダラダラしている時間とかが、きっと仲良くなれる大切な時間なんだね。

峰尾：学校を卒業しちゃうと、自分の好きな人としか付き合わなくなるじゃないですか。委員会活動の中で、色んな人と知り合えて、色んな話を聞いて、色んな事を知ったな。付き合い方も知った。

■子どもたちに伝えたいこと

七澤：委員会では、子どもに向けた事業やかかわりを持っているよね。みんな子どもたちに何を伝えたい、何を感じてもらいたいと思ってやっているの？例えば「ワイワイおやつタイム」を始めた時、ただ『お料理習ってお家で作れるようにしようね』という思いではなかったよね。

峰尾：おやつづくりでは、知らない人の中でも積極的に参加できる雰囲気づくりを心がけています。全部に言える事なんですけど、「かどもっちぃ～」も今はなかなかもちつきは家で出来ないし、小さいうちにのこりぎや庖丁を使うこともそうないし･･･。家や学校ではできない経験の場を提供したいですね。

大石：私が子どもの時、交流センターみたいな施設があったら良かったなって思う。今来ている子どもたちはイイナって思うもん。先生のような年代の人たちと学校以外で知り合う場所とか、プライベートの時に話を聞いてくれたりする大人とか、小学校の時にいなかったし。

森　：そうだね。子どもの頃、大人嫌いだったもんね。

大石：子どもって、学校だけでいっぱいいっぱいだと思う。だから、ちょっと違うところに居場所見つけたりとか、友達見つけたりとか、そんな風に世界広げてほしいなって思う。そうしたら色んな物が見つかるんじゃないかな。色んな人を見つけられるし、色んな人も自分の事を見つけられるかなって。

金子：色んな人が自分にかまってくれて、色んな人がいる事を知ってというのが、交流センターでは自然と感じることができる環境だから、自分が誰かに認められている存在だっていうのを感じてもらいたい。自己有用感っていうか、そういうのを感じてもらえれば、いい成長がきっとできる。

峰尾：本当に思うよね。やっぱり息詰まる時だってあるし、そういう時にこういう場所があったら、逃げ場じゃないけど、助かる子がいっぱいいるんだろうなって思う。

大石：職員さんたちは、ダメな事はダメって言ってくれるし、怒ってくれるし。そういうことを言ってくれる存在がいるのはすごいこと。私が中学校の時は両親が仕事が忙しくて、こういう場所があったら、帰りに行っていたと思う。つらい時に頼れたり「元気？」って聞いてくれたり、ずっと来てなくても「久し振り」って来られる場所だったり。

森　：それが居場所だね。交流センターの中で自分の経験を増やして、物事を色んな方向から見ることができる子どもがたくさん育ってほしい。僕たち委員はそのお手伝いができればと思います。

七澤：「ワイワイおやつタイム」を手伝っていて、私は保護者の人と顔が見える関係になった。「今日は小さい子の面倒見てくれました」とか「後片付けしっかり頑張ってくれていました」とか、子どもたちの頑張りを報告できるのね。そうするとお母さんがすごい嬉しそうで･･･。家では見られない子どもの顔を、私たちは保護者の人に伝えていかなきゃいけないんだと思います。だから、青少年委員がおやつタイムを企画してくれて本当に感謝しているんだ。

大石：おやつタイムでは、迎えにきたお母さんから「いつもありがとうございます」とか「帰ってからこういう話し聞いたんですよ」とか言われるとすごい嬉しい。

峰尾：印象的だったのが、お家で卵を割らせてもらった事がない子がいて、殻が入っちゃうかもって、すごいビクビクしていて。「いいんだよ別に、失敗したら取ればいいじゃん」って言ったらニコって笑

って無事成功。それを見て、もしかしたらこの次から家でも自分でやるって言えて、お母さんもやらせてみてくれるんじゃないかって。何かすごい些細なことだけど出来る事が増えていくことって、すごくいいことだなーと。

■委員会という居場所

七澤：では最後に、これからの委員会に望むことは？

大石：もっともっと、子どもと近い委員会になって欲しい。夏休みにボランティアとして来てた時は悩みとかも聞いて、話もたくさんした。だから、委員会活動以外にもセンターに足を運んで、子どもたちとかかわっていってほしいな。

金子：青少年が自分たちの地域に住む子どもや街のために、一緒に何かやるっていう地域社会のようなもののモデル的存在に、委員会がなれればいいなって思う。受験で悩んでる学生に、経験した人がすぐ相談に乗れるみたいな。今も高３の委員が大学受験するときに相談できる相手がたくさんいるし。それがもっと地域の中に普通に存在したらいいな、と思う。

七澤：交流センターに遊びに来ていた子たちが委員になってくれるのが理想。でも、自分の地域ではないから活動ができるってこともあるのかな、とも感じます。今までの自分から脱したい、新しい世界に飛び込みたい、って思う子もいるだろうし。青少年委員会は、こんなに色々なタイプの人が集まっているのに、みんなが頑張れて、輝いているんだろうってそばで見ていても不思議に思う。秘訣は何だろうね。

峰尾：私も聞きたい（笑）。特に今年は受験生でも模試が終わって疲れているだろうに飛んでくる、仕事が忙しくても顔を出す、とか本当に嬉しくて･･･。自分も５年間ずっとそういう風に調整してきて、委員会が生活の一部みたいになっちゃっているから、なくなったらどうしようかと･･･。

森　：委員長やっている時に「現場の人間が現場の事を一番分かっている。それを上手く動かせないのは上にいる人間じゃなくて、現場にいる人間の力が足りないんだ」って館長から言われたことがあって。委員会ってある意味現場の人間なんで、これからもみんなが企画したり考えたことを、ダメと言われても妥協してみたり工夫してみたりして、ぜひとも実現してほしい。

七澤：この場を借りて、本当にみんなには感謝しています。立ち上げから一緒にやってきてくれた森君、峰ちゃん、碧ちゃんは、定例会をどういう形でやろうか、青少年委員会って何なんだろう？というところから作り上げてきた仲間だからね。私は、嫌なことがあっても、青少年委員とワイワイやっていると、また頑張れたし。私の交流センターの５年間は、青少年委員に支えられてきました（涙）。そう考えると、私にとっても委員会は居場所だったのかも。特に峰ちゃん、碧ちゃんは高校生の時に出会って、もう来年は社会人！大人になる過程をずっとそばで見てきたわけですよ･･･。本当に二人はしっかりしてきたね。

大石：青春をささげましたから（笑）。でも今は、委員会をやってなかったことは考えられないくらい影響を受けました。金子ちゃんもあと４年は続けないと！

金子：定年になっちゃう（笑）

森　：今年最初の定例会の時に、世代交代ってこういうことなんだなーというのを感じた（笑）。

峰尾：新しい委員さんがまた新しい歴史を作っていけばいい。今までやってたからって、全部同じにする必要はないと思う。良いと思えば残していって、形を変えてもいいんだし。これはもう必要ないと思ったら、また新しい事をはじめればいいんだし。

七澤：そうだね。でもね、今いる人たちは「何でこれを始めたんだ」っていう事だけはぜひ引継いでいってほしいと思います。たぶんその時の強い思いや背景があって始めたことだと思うので。だからこれからも、今まで築き上げてきたものを大切にしながら、少しづつ変化してその時の委員さんたちの思いがいっぱい詰まった委員会にしていきたいね。人が変わっても、いつまでも青少年委員会が、みんなにとって成長できるチャンスがたくさんある居場所であってほしいです。

青少年委員会のあゆみ

【H１５年　第１期】委員長：森　正憲　副委員長：中島由晴　　担当職員：七澤

委員数　１９人　　内訳）中学生３人、高校生８人、大学・専門生４人、社会人４人	
トピック	・第１回定例会【１０月】 開館１周年記念事業実行委員と、愛称選定委員を委員から選出 ・部会制度発足【１１月】 大人数が効率的に活動できるように「広報部会」「行事企画部会」「センター部会」に別れて活動 ・レクホール/ワークルームの利用方法変更についてのアンケート実施 青少年委員から意見をもらい、今度の運営方法について考えた ・テレビゲーム設置についてのアンケート【１２月】 予想に反し、委員からは「ゲームは置かない方がよい」との意見が！ ・主催事業「若殿様からの挑戦状」実施【２月】 はじめての委員会主催事業。館内全体を使ったクイズ＆ウォークラリー ・宿泊研修（野島青少年研修センター）【３月】 「話し合いを上手くすすめるためには？」「主催イベントを企画してみる」をテーマに夜通し勉強！

【H１６年度　第２期】委員長：森　正憲　副委員長：中島由晴、大石　碧　　担当職員：七澤

委員数　１０人　　内訳）中学生１人、高校生１人、大学・専門生３人、社会人５人	
トピック	・臨時定例会【４月】 継続委員を中心に、今後の委員会のあり方について議論→部会制度は中止に ・@楽祭の司会に【６月】 大石、峰尾委員が司会にチャレンジ！ ・「夏期青年ボランティア」の交流会を企画【８月】 ボランティア同士の横のつながりを強めたい、ということから委員が企画。 ９月から１人、委員会に入ってくれたボランティアがいました ・夏休み主催イベント「浴衣だ！子どもだ！夏休みも終わりだ！」実施【８月】 ・広報紙第１号発行！【９月】　※この年は計３号発行 委員内で名称を募集し「君にふらっと☆」に決定！ ・ゆう杉並中高生運営委員会と交流【１０月】 意見交換をおこない、おおいに刺激を受けました ・委員ＢＢＳの開設【１０月】 ・主催イベント「かどもっちぃ～」【１２月】 １５５人もの人が参加！門松づくりと年賀状づくり、もちつきをおこないました ・中高生ボランティア講座「はじめの半歩」講師に挑戦【２月】 レクリーダーとして参加しました ・新潟県中越地震義援金街頭募金に参加【２月】 ・委員会を支えてくれていた中島委員、八ツ橋委員が卒業（年齢制限のため）

【H１７年度　第３期】委員長：峰尾真維　副委員長：大石碧、荘司優子　　担当職員：七澤

委員数　８人　　内訳）中学生１人、高校生２人、大学・専門生１人、社会人４人	
トピック	・主催事業「ワイワイおやつタイム」開始！ 第１回目はクッキー。このあと毎月継続する人気事業に発展。 ・夏期青年ボランティア活動事前研修会レク講師に【７月】 ・広報紙「君にふらっと☆」第４号発行【８月】　※この年は計３号発行 ・夏休みイベント「きもだめし」を主催事業に！【８月】 ・宿泊研修【８月】　バーベキュー大会を実施 ・主催事業「かどもっちぃ～」実施【１２月】 門松作り、クリスマスクラフト、もちつきを実施。のべ１２０人が参加 ・ＴＶＫ「Hi！横浜編集局」に出演。中田横浜市長からの取材を受ける【１月】 ・ゆう杉並中高生運営委員会との交流会【１月】 今年は横浜に招いて、委員がみなとみらい・中華街を案内しました。 ・お別れ親睦会＆大石さんお帰りパーティー【３月】 ７月から留学していた大石副委員長の帰国パーティーを開催。

【H１８年度　第４期】委員長：大石碧　副委員長：柏木元樹、山本和音　　担当職員：七澤、福田

委員数　１１人　　内訳）高校生４人、大学・専門生３人、社会人４人	
トピック	・主催事業「ワイワイおやつタイム」大人気事業に！ ・夏休みイベント「きもだめし」史上最長コースに！【８月】 ・広報紙「君にふらっと☆」第７号発行【８月】　※この年は計３号発行 ・宿泊研修【10月】　ハロウィン準備で徹夜･･･ ・ハロウィンパーティー開催【１０月】フェイスペイントに挑戦！のべ７４人が参加。 ・野毛山動物園「ふらっとたんけん隊」引率補助【１２月】 ・主催事業「かどもっちぃ～」実施【12月】 門松づくり、クリスマスリース、もちつきを実施。のべ１３５人が参加。 ・「よこはま・ゆめ・ファーマー」１０周年記念文化祭ボランティアスタッフとして参加【１月】 ・お別れ合宿実施【３月】　ボーリング大会＆寿司パーティーで大盛り上がり。 ・ゆう杉並「ACTIVE FESTA」見学【３月】 ・卒業企画「脳トレ縁日！」開催【３月】小豆つかみなど、頭を使うゲームを多数開催。

【H１９年度　第５期】委員長：金子晴香　副委員長：浜辺隆博、三宅空也　担当職員：阿久津、七澤

委員数　２０人　　内訳）中学生１人、高校生４人、大学・専門生１２人、社会人３人	
トピック	・過去最多！委員が２０人に！！ ・主催事業「きもだめし」テーマは『病院』【８月】 ・夏期青年ボランティアとの親睦会でスポーツイベント実施【８月】 ・広報紙「君にふらっと☆」第１０号発行【８月】※この年は３号発行 ・宿泊研修で、キャンドルファイヤーとレク講習を受ける【９月】 ・ハロウィンパーティー【１０月】　スタンプラリーと仮装大会で大盛り上がり。 ・主催事業「かどもっちぃ～」【１２月】 門松づくり、クリスマスカードとクラフト、もちつきを実施。のべ１５６人が参加。 ・お別れ合宿【３月】　深夜の卓球大会で大盛り上がり！ ・卒業企画「わいわいお弁当タイム」実施【３月】 はじめて外に出る事業に挑戦！

交流センターの四季

平成 14 年（2002 年）

平成 14 年 11 月 30 日、横浜市青少年交流センター 開館記念式典
平成 14 年 12 月 1 日、横浜市青少年交流センター オープン

▲交流センター外観

▲▼式典にのぞむスタッフ

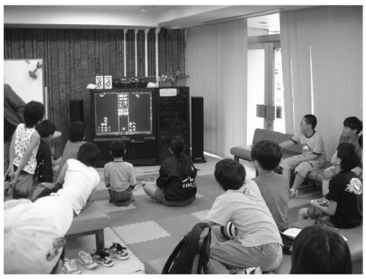
▲東小学校合唱部（５年生）による合唱

▲本町小学校金管バンド演奏

平成 15 年（2003 年）

▼七夕

交流センター夏休みイベント



▲卓球大会

▲@楽祭

横浜市青少年交流センター（ふりーふらっと野毛山）年表

【２００１年～２００３年度】

２００１年 ３月	前身の横浜市勤労青少年センター（Do 館）を、１０月から休館し、今後の施設のあり方を検討することを決定
６月～９月	横浜市勤労青少年センター検討委員会を開き、施設のあり方等について検討する
１０月	横浜市勤労青少年センター休館
２００２年 ６月	横浜市勤労青少年センター転換整備事業補正予算議決、青少年交流センター管理運営費を計上
９月	横浜市青少年施設条例を一部改正 勤労青少年センターを廃止し、青少年交流センターの設置について条例を改正
１０月～１１月	施設改修・補修工事等を実施 横浜市青少年交流センター開設準備担当課設置（１１月） 開設準備スタッフが、居場所の先駆的な施設を視察 （京都市南青少年活動センター、杉並区立児童青少年センター）
１２月	**横浜市青少年交流センター開館** ・「みんなの掲示板」をフリースペースに開設（２００３年３月撤去） ・第１回利用者対抗卓球大会開催
２００３年 ２月	・市内学校（小・中・高・大）、図書館等に出向いて施設ＰＲ活動、徐々に青少年たちが来館するようになる。特に大学受験生たちが多数来館する。 ・ゲーム機をフリースペースに設置（スタッフや利用者が寄付）、小中学生や浪人生に大人気となる。
３月	・スタッフロビーワークレポート発表会 「青少年からの評価や要望」「ルールを見直す（作る）必要があると思ったこと」「青少年への指導が必要と思うこと」
５月	・「こどもの日まつり」実施。交流センター初めての事業に、利用者を中心としたボランティアが多数活動。 ・「園芸部」活動実施。センターの花壇に青少年とともに植栽。
６月	第１回「@楽祭」実施。利用者からの提案により実現。
７月	第１回七夕まつり実施。
７月	夏期青年ボランティア（夏休み期間中に子どもたちの遊びや学びのサポート）を募集。８６人が決定。
８月	・夏期青年ボランティア活動。 ・コーディネーター主催事業「トライ・トライ・トライ」を実施（３回）。 ・夏休み「アトリエ交流（紙すき、染物等）」を実施（３回）。

８月	・「夏休みドッジボール大会」実施。 ・「きもだめし大会」を夏期青年ボランティアの手で実施。 ・「夏休み宿題大作戦！」実施。 ・「サマーフェスティバル」を夏期青年ボランティアの手で実施。 ・ミニコミ紙「ザ・Co.りゅう」発行（コーディネーターが編集）。
９月	・県立青少年センターで活動していた『青少年指導者クラブ』の協力で、 「クラフト教室」を毎月第２日曜に実施。（～現在） ・青少年による「開館１周年記念事業実行委員」を設置（委員２０人）。
１０月	・「卓球大会」実施。 ・第１期青少年委員会設置。委員１９人。 ・運営委員会設置。学識経験者、地域住民、利用者、青少年など８人で設置。 ・交流センター「愛称選定委員会」設置。委員８人。 ・レクホール（体育館）の利用方法を見直すため（施設や用具の破壊行為がエスカレート）に一時閉鎖する。 ※３週間の閉鎖期間中に、青少年へのアンケート実施やスタッフのレポート活動、青少年委員会での話し合いをおこない、現在の「種目別」の利用になる
１１月	・　開館１周年記念式典、記念フェスティバル（ライブ、利用者展示、模擬店、よさこい体験、しゃべり場、料理体験等）を実施。 来場者４９３人。フェスティバル運営ボランティア（すべて青少年）３８人。 **愛称が「ふりーふらっと野毛山」に決定。** ・コーディネーターによるミニコミ紙「ザ・Co.りゅう」発行
１２月	・「星のフェスティバル」（子どもたちによるステンドグラス作成と展示）実施。 ・冬休み事業「クリスマスケーキ」づくり実施。 ・冬休み「バスケットボール大会」実施。 ・冬休みクラフト「ミニ門松づくり」実施。 ・もちつき大会実施。
２００４年 ２月	・節分豆まき大会。 ・「バレンタインチョコレート大作戦」実施。 ・青少年委員会初めての自主事業「若殿様からの挑戦状」実施。
３月	・青少年委員会宿泊研修（野島青少年研修センター）。 ・老松中学校卒業生企画「フットサル大会」実施。

平成 16 年（2004 年）

▲こどもの日まつり

▲青少年ライブ

▲ふらっとライブ 101

▲▼クワガタ・カブトムシ研究会

▲クラフト教室

▲昔遊び体験（竹馬）

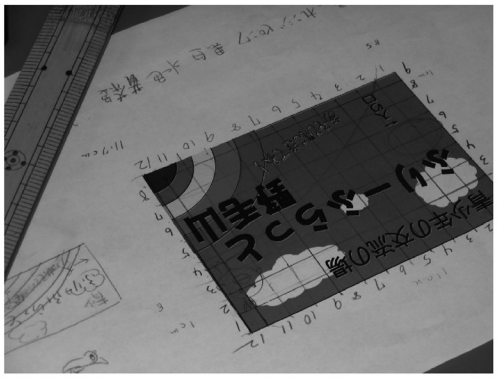
横浜市青少年交流センター（ふりーふらっと野毛山）年表

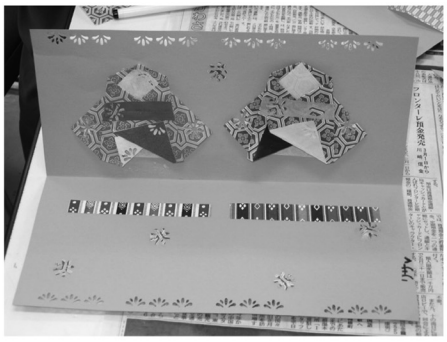
【２００４年度】

５月	・第２回「こどもの日まつり」実施。この年から主役である小学生もボランティアスタッフとして参加。来場者２４２人。 ・スタッフ全体研修会実施。テーマは「慣れてきた子どもたちに対するロビーワーク」について。
６月	・第２回「@楽祭」実施。青少年委員が司会を務める。
７月	・初の青少年ライブ開催！ロビーワークから青少年の声を吸い上げ実現。チラシづくりから看板づくりまで出演者の高校生により実施。１０組のバンドが出演。
８月	・夏期青年ボランティア、６６人が活動。 ・クワガタ、カブトムシ研究会発足。研究員４３人。 ・夏休み事業「ランチパーティー」「デザートづくり」「竹馬づくり」「竹をつかった水鉄砲づくり」コーディネーターが講師を務め大好評。 ・青少年委員会主催「きもだめし」は今年も大好評。
９月	・青少年の声に応え、フリースペースで「囲碁・将棋・トランプ・ウノ」貸し出し開始。
１０月	・青少年委員会と「ゆう杉並」中高生運営委員の交流会実施（ゆう杉並で）。
１１月	・スタッフ全員で「川崎市子ども夢パーク」「フリースペースえん」見学。
１２月	・青少年委員イベント　第１回「かどもっちぃ～」開催 年賀状教室、ミニ門松づくり、もちつき実施　約２００人参加。 ・「交流センターキレイにし隊」実施。いつも遊びに来ているセンターを自分たちの手でキレイにしたい、と子どもたちや青年ボランティアがセンターを大掃除。手書きの屋外看板も作成。
２月	・　管理運営団体（社）横浜ボランティア協会と（財）横浜市青少年科学普及協会が統合し、新団体（財）横浜市青少年育成協会誕生。 ・　青少年委員がボランティア入門講座「はじめの半歩」講師に挑戦。
３月	・　春休み卓球大会開催 ・　青少年委員会卒業イベント「春一番！ふりふら祭り」開催 ・　青少年ライブ「ＳＡＹ！少年！ライブ」実施。観覧者１２５人。

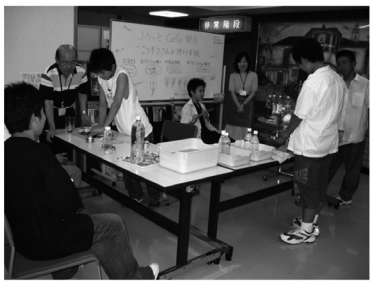
平成 17 年（2005 年）

▲▼きれいにし隊（駐車場の区画、センター看板の作製）





▲クラフト作品



▲ふらっとカフェ

横浜市青少年交流センター（ふりーふらっと野毛山）年表

【２００５年度】

４月	・コーディネーターによるロビーワーク事業「ふらっと CAFE」実施。フリースペースにてそれぞれ趣向を凝らしながら、毎月実施。
５月	・第３回「こどもの日まつり」開催。来場者数３９３人。模擬店で初めてやきそばを販売。発売開始４０分で９０食が売り切れ。
６月	・１Ｆ自習室（１０１）を使っての「青少年パフォーマンス」開催。のちに「ふらっとライブ」として定番化。初回の参加はたった２組（！） ・「@楽祭」開催。８組参加。青少年委員が司会進行。 ・コーディネーターによるロビーワーク事業「ふらっと CAFE」実施。フリースペースにてそれぞれ趣向を凝らしながら、毎月実施。 （６月は、「トランプで遊びながら恋愛と人生について考える」「こうぞうさんの理科実験教室」を実施）
７月	・「ふらっと CAFE」７月は「おしゃべりとプラ版でキーホルダーつくり」「南京玉すだれとカキ氷で下町体験」を実施。どちらも大人気。 ・チャレンジ親子体験塾「クワガタ・カブトムシ研究会」開催。
８月	・夏期青年ボランティア５４人活動 ・夏休み事業大連発 「テニポン大会」「チャレンジ親子体験塾『採集編』」「クラフトうちわ作り」「茶道体験教室」「サマーランチづくり」「きもだめし大会」「ボランティア交流会」、青少年委員と夏期青年ボラの協力で大好評。 ・青少年委員会合宿（野島青少年研修センター）
９月	・「ふらっと CAFE」９月は「ボンボンクラフト」実施。
１０月	・「ふらっと CAFE」１０月は「飛べ！紙ヒコーキ」「パターゴルフ」実施。
１１月	・利用料金制度スタート。青少年の部屋利用が一部無料に。 ・チャレンジ親子体験塾「そば打ち体験」実施。　・秋の@楽祭開催。
１２月	・青少年委員会主催「かどもっちぃ～」。松ぼっくりで作るクリスマスツリー、門松づくり、もちつき実施。参加者１２３人。 ・ふらっとライブ「クリスマスコンサート」実施。 ・冬休み青年ボランティア活動。「キレイにし隊」実施。
１月	・「ふらっとＣＡＦＥ」番外編「受験生応援企画“学間のススメ”」実施。 数多く利用している受験生たちの情報交換と休息の時間を提供 ・本町小キッズクラブとの連携事業「もちつき＆クラフト」 ・青少年委員とゆう杉並中高生委員会交流会。青委がMM地区～中華街を案内。

２月	・「居場所フォーラム２００５」開催。全国から“青少年の居場所づくり”に携わる人たちが集まる。交流センター職員がシンポジウムパネリストとして日頃の取り組みを発表。
３月	・春休み青年ボランティア活動 ・青少年ライブ「郷」開催。ふらっとライブの成果が表れ演奏技術も向上。 （名称の「郷」は、このライブを最後に進学のため故郷を離れるバンドメンバーが多く参加していたから） ・春休み事業「卓球大会」利用団体「わかば卓球クラブ」さんの全面協力にて開催。

▲ロビーワークの風景

平成 18 年（2006 年）

▼夏休み茶道体験

▲ふりーふらっと音楽コンサート

▲夏休みクラフト教室

▲クワガタ・カブトムシ研究会（番外編）

▲秋のスポーツ体験（パターゴルフ）

▲夏休み料理教室

▼布ぞうりづくり

▼夏休み理科実験

▼朗読会

▼ワークルーム机づくり

▼スリーオンスリー大会

▼ハロウィン

▼夏休みスポーツ大会（ｿﾌﾄﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ）

横浜市青少年交流センター（ふりーふらっと野毛山）年表

【２００６年度】

４月	・体制が変わり、センターの職員が３人→６人へ増員。 ロビーワークの充実のため、コーディネーター勤務に「中番（13 時～18 時）」が登場。 ・交流センター内に、ボランティア・体験活動情報の発信、コーディネートをおこなう「青少年体験活動推進センター（2007 年度からコーナーへ名称変更）」が本格オープン。
５月	・こどもの日まつり。２４６人が来場。
６月	・@楽祭開催。過去最高１２団体参加。 ・利用団体「おもちゃの箱」さんの協力により、乳幼児の親子が気軽に楽しめるクラシック「ふりふら音楽コンサート」を実施。
７月	・６月から閉鎖していた（一部青少年の目に余る行為により）ワークルームが再開。スタッフと青少年が一緒に作ったテーブルやイスが並ぶ。 ・「クワガタ・カブトムシ研究会」「野外観察会」実施。 ・西区子ども会との連携事業「クラフト教室」実施。
８月	・夏期青年ボランティアが活動。４３人が活動。 ・夏休み事業もりだくさん。「ふらっと朗読会」「木工教室」「理科実験教室」「ドッジボール大会」「ピザ作り教室」「茶道体験教室」「クラフト教室」「きもだめし大会」。スタッフの特技を生かし、青少年委員や夏ボラの協力を得て大好評。 ・ふらっとライブ「CRASH！常夏ライブ」実施。観覧１２２人！ ・夏期青年ボランティア活動のノウハウを活かし、鶴見区主催の「地区センボラ活動」を支援。
１０月	・ふらっとライブ「デリシャスモンブランライブ」実施。 ・保護者を対象とした「食育講座」を実施。テーマ別に全４回。 ・コーディネーターの特技を生かした「布ぞうりづくり」実施。約３時間かけてぞうりを編む。 ・青少年委員会主催イベント「ハロウィーンパーティー」。フェイスペイントや仮装コーナーなど、交流センターが華やかに。
１１月	・秋のスポーツ体験「パターゴルフ大会」実施。 ・秋の「@楽祭」実施。参加６団体。 ・青少年持ち込み企画事業「３on３大会」実施。高校生以上の年上世代が参加。
１２月	・野毛山動物園連携事業「ふらっとたんけん隊」実施。交流センターと動物園を会場に、園長がレクチャー＆ガイド。４回実施。参加者のべ７３人。 ・青少年委員会主催「かどもっちぃ～」。わらのクリスマスリースづくり、門松づ

	くり、もちつき実施。 ・ふらっとクリスマスライブ、ふらっとクリスマス音楽コンサートなど、クリスマス音楽イベントが盛り上がる。 ・体験活動推進コーナー「高校生ボランティアアクト」(野島青少年研修センター)実施。 ・「キレイにし隊」実施
１月	・本町小キッズクラブ連携事業「もちつき」実施。 ・横浜市女性農業家「よこはま・ゆめファーマー」制度１０周年記念事業、「ゆめ・ファーマー文化祭」開催。横浜市環境創造局と共催。
２月	・「ボーカルレッスン講座」実施。３月のライブに向けて青少年たちが参加。 ・「居場所フォーラム２００６」開催。３日間。交流センタースタッフが実行委員として携わる。日本都市青年会議と共催。 ・利用団体「みのり会」さん主催「ふらっと庵茶道体験」実施。
３月	・青少年委員卒業イベント「ふりふらフレンドパーク」実施。参加者２７５人。 ・青少年ライブ「満開！さくライブ」実施。１１バンド、観客２０６人。 ・利用団体「わかば卓球クラブ」共催「春の卓球大会」実施。

▲けいじゅ先生のボーカルレッスン

平成 19 年（2007 年）

▲こどもの日まつり 記念撮影

▲▼@楽祭

▲ふりふら劇場

▲夏休み企画・絵を描こう

▲ものづくり教室・飛行機づくり

▲夏休みスポーツ大会（ドッジボール）

▲ＨＩＶ研修会

▼横浜ＦＣのチャレンジサッカー教室

▼かどもっちぃ～（クリスマス、お正月クラフトと餅つきイベント）

▼ものづくり教室・籐かごづくり

横浜市青少年交流センター（ふりーふらっと野毛山）年表

【２００７年度】

４月	・大道芸開催に合わせ、野毛山にある公共施設連携事業「さかのはるまつり」に参加。交流センターは青少年委員の協力による「脳トレ縁日！」実施。２日間のべ１３７人参加。
５月	・「こどもの日まつり」開催。参加者過去最高５５６人。 ・未就学児親子対象の音楽コンサート「ふらっと♭キッズ」開催（毎月開催）。 ・第５期青少年委員会発足。過去最高２０人が活動。
６月	・春の＠楽祭。９団体参加。
７月	・青少年利用者による公演「ふりふら劇場」実施。 ・第１回ものづくり講座「ヒコーキづくり」。 ・「クワガタ・カブトムシ研究会」実施。 ・西区子ども会連携事業「夏休みクラフト教室」。 ・ふりふらアートイベント「おもしろお面づくり」。
８月	・「高校生水源林ボランティア」（推進コーナー）で、高校生とともに道志村へ。交流センター利用者も多数参加。 ・夏期青年ボランティア、４７人活動。 ・夏休み事業もりだくさん。「木工教室（図面ひきから挑戦）」「理科実験～いろんな音をつくってみよう」「料理体験“お花寿司”」「写生大会（夏の果物と野菜）」「クラフト教室（海のメリーゴーラウンド）」「ドッジボール大会」「きもだめし大会～恐怖の交流病院～」。
９月	・社会教育実習生受け入れ〈９月中〉 ・青少年委員会宿泊研修（野島青少年研修センター）
１０月	・ふらっとライブ ・第２回ものづくり講座「藤かごづくり」 ・青委主催「ふりふらｄｅハロウィン」開催。お化けかぼちゃのくりぬきに挑戦。
１１月	・体験活動推進コーナー事業「青少年のためのＨＩＶエイズ予防のための勉強会」実施。 ・体験活動推進コーナー事業「ボリビアの高校生とＨＩＶエイズ予防について衛星テレビ会議＠ＪＩＣＡ横浜」実施。 ・秋の＠楽祭。８団体出演。 ・横浜国立大学学生と受験生が語り合う「キャリアカフェ」実施。
１２月	・青少年指導者講座「クリスマスツリーづくり」。 ・Ｊリーグ横浜ＦＣ協力による「サッカーチャレンジ教室」実施。 ・野毛山動物園ふらっとたんけん隊 Part２実施。

	・第５回「かどもっちぃ～」実施。飛び出すクリスマスカードとツリー、ミニ門松、もちつき実施。のべ１５８人参加。 ・「クリスマスライブ」実施。１０バンド出演。観覧１０７人。 ・よこはま若者サポートステーションと共催と学齢期児童に対する職業観の醸成「ＴＨＥ☆お仕事ゲーム」実施。
１月	・本町小キッズクラブ連携事業「もちつき＆クラフト」実施。
２月	・ものづくり教室「布ぞうりづくり」 ・「不登校、ひきこもりフォーラム」（東京：津田ホール）にて、職員がパネリストとして事例を発表。 ・西区子ども会連合会連携「西区子ども大会」実施。 ・「青少年の居場所づくりフォーラム」（日本都市青年会議と共催）開催。全国から青少年施策にかかわる人１０５人が参加。
３月	・食幾講座パート３「食育ふりふらタイム」実施。 ・青少年委員会宿泊研修（野島青少年研修センター）実施。 ・利用団体「わかば卓球クラブ」協力「春の卓球大会」実施。２１人参加。 ・青少年ライブ「エイプリルフールじゃないよ」実施。１２バンド参加。 ・第５期青少年委員会卒業企画「お弁当づくりにチャレンジしよう！」

▲横浜国立大学キャリアカフェ

わたしたちの居場所　～利用者寄稿～

伊藤 貴弘（ホヤホヤバンド）／スタジオ利用者・高校生

僕とふりーふらっとの出会いは中学３年生の時でした。体育の授業でダンスの練習場所を探している時に友達から紹介されて訪れました。その時に思ったのが、ここのセンターの方たちは中学生、高校生の目線で物事を見ようとしてくれているということです。それがきっと今の過ごしやすくて自然と学生が集まってくる憩いの場になっていったのだと思います。

そして僕は今、ふりーふらっとでバンド活動を精力的に行なっていますが、このセンターは、音楽に取り組む高校生をすごく後押ししてくれます。バンドとしてもう２年半近くここを使わせてもらっていますが、僕たちがバンドとして成長してきた過程でここのセンターとスタッフの方の協力は必要不可欠なのです。だから僕はいつも協力的なスタッフの方々に感謝の気持ちを持ち活動しています。

僕はもっともっとたくさんの青少年のみんなにここを有効に利用してもらいたいと思います。でも、いつもセンターの人たち、自分を支えてくれている人への感謝の気持ちを忘れないでほしいです。その気持ちは行動に表れてきます。センターの人たちはどんな風に利用してもらいたいのか、なぜここまで親切に接してくれるのか、利用する側のマナーももっと良くして、より良い場をつくっていってほしいと思います。

このセンターがもっともっと繁栄していくことを心より願っています。

青少年ライブ「ふらっとライブ 101」にて

汐崎 裕美　／フリースペース利用者・大学生

私がこの交流センターを知ったのが５年前の１２月。友達から静かで受験勉強をするのにすごくいい場所があるけど行かない？と誘われたのがきっかけでした。初めてセンターを利用した時は、館内がすごく静かで、受付のコーディネーターさんや職員の方が声をかけていただき、親切にしていただきました。センターを利用していくうちに仲良くなり、私が受験生ということもあり、部屋寒くない？大丈夫？と声を掛けてもらいました。私は、人の優しさや温もりを感じました。そして、応援をしていただいたのですが大学に受からずもう１年勉強をする事になりました。毎日の様に朝からセンターに行き、友達と勉強をしていました。ある日、職員の方が勉強の息抜きに一緒にバスケをしない？と声をかけられました。最初は、

ビックリしました。そして、一緒にバスケをするようになりセンターに来ていた利用者の人や職員の方と仲良くなりました。ここで、知り合った人とはそんなに仲良くならないだろう、たぶん受験が終わったら連絡も取らなくなるだろうと思っていました。しかし、たまたま同じ受験生ということもあり、毎日センターで勉強を頑張る仲間になっていました。いつの間にか、バスケは受験生の息抜きの場所になっていました。みんなで勉強を頑張っていた仲間とは、分からないところがあったら教えあったり話をしたりして、お互いを高めあっていました。センター試験が近づくに連れて、部屋を借りてみんなでセンター試験対策をしていました。１年間頑張り、みんな大学に合格しました。一人一人進む道は違いますが、５年経ったいまでもセンターで一緒に頑張った友達とは連絡を取っています。センターで出逢った仲間は、すごく大切な仲間です。私にとってセンターは、元気の出る場所でもありパワーをもらう場所です。これからもセンターがみんなの居場所であったらいいなと思っています。そして今でも、センターを利用しています。

石川 泰三（吹毛会）／レクホール利用者・社会人

横浜市青少年交流センター（以下ふりーふらっと）五周年おめでとうございます。

ほぼ毎週、居合の稽古に使用させていただいており、センターの皆様には大変お世話になっております。

私ども吹毛会としましては、平成 17 年からお世話になっております。現在、私は吹毛会桜木町稽古場所長として、会員のみなさんに居合の指導をさせていただいておりますが、当時は、一会員として教えていただく立場にありました。

その後、ふりーふらっとで稽古を続け、昇段審査後、前場所長に代わり、稽古場所長を務めさせていただいております。

ふりーふらっとは、この昇段審査までの稽古の思い出の場所でもあります。

吹毛会桜木町稽古場所は、どちらかといいますとご年配の方が多く所属しており、ふりーふらっとの青少年の居場所づくりという方針からは異なるかもしれません。若い者は年配の者を見て育つものだと思います。ご年配の方々が凛としてがんばっている姿を青少年の皆さんが見ることで、少しでも青少年健全育成の糧になればと思います（会員募集は常に行なっておりますので、入会は大歓迎です）。

今後ともお世話になります。よろしくお願いいたします。

利用者発表会「@楽祭」にて

小西 裕治（こにしゆうじ）／ レクホール利用者・社会人

現在、私は「ふりーふらっと」でジャグリングとダンスの練習をさせてもらっています。

私がここの存在を知ったのは、知人の練習に誘われたのがきっかけでした。横浜に住んでいながら、こんな場所があるとは知りませんでした。もっといろいろな人に「ふりーふらっと」の存在を知ってもらいたいと思います。

平日は仕事に追われて忙しい毎日をおくっているため、休日に「ふりーふらっと」でおもいっきり練習して気分転換してます。今では、私の生活の大事な一部になっています。また、ここではいろいろな世代の人達と出会う事が出来ます。その中でジャグリングやダンスに興味を持ってくれたりする人達がいると嬉しく思います。

利用者の為の発表会である「@楽祭」ですが、日頃の自分の練習の成果を発表出来るので、とてもありがたく思ってます。せっかくなので、若い人達もどんどん参加してもらえたらと思っています。

森永 なつき（社会教育主事課程 実習生）／大学生

この度は青少年センター開館５周年おめでとうございます。

私自身、センターにお世話になって５年になります。高校３年時の夏期ボラに始まり、様々なイベントへの参加や青少年委員をやらせていただきました。そして、センターで活動を共にし、出会った仲間に再びセンターで出会うこと。それが私にとって嬉しい瞬間でした。

大学入試後はセンターに行く機会が減ってしまい、今まで言っていたのにも関わらず、入りづらくなることもありました。しかし、自分を見かけた職員・スタッフの方々が自分の思っていた以上に明るく出迎えてくださり、５年経った今もセンターがいつでも、気軽にふらっと立ち寄れる場所であることに変わりはありません。

そうした地域の青少年の居場所である交流センターに、再び大学から社会教育実習生という立場で出向くことができ、そのとき改めて人と人とのつながりの大切さを肌で感じました。青少年はもちろん、様々な目的をもって利用する団体の方、子どもから年配の方まで幅広い年齢層の方々と話をすることで自分の知らない世界を知り、活動の幅を広げることにつながりました。私にとって交流センターは自分の可能性を広げ、自分らしく輝かせてくれる場所です。そして今後も私達にとって身近な存在であってほしいと思います。

贈る言葉、残す言葉

※交流センター瓦版「CO・りゅう」第３号の寄稿原稿から４編を選んで掲載してみました。

ここで勉強していた受験生や中学生が交流センターでの一年間を振り返って感想を書いてくれています。

知っている方も多いかもしれませんが、私はこの一年間、交流センターで受験勉強をしていました。今は大学生になって、横浜から遠くの方にいます。このセンターにいたことで、志を同じくする多くの友人に会うことができました。この一年間の経験は、これからも貴重な財産になると思っています。職員やコーディネーターの方々には本当に感謝しています。夏休みや冬休みにはひょっこり顔を出すと思いますが、その時は気軽に声をかけてください！

神谷行宣

約一年間お世話になりました。僕ら老松中学生はここへ来るたび迷惑をかけてしまいすみませんでした。しかし、悪いことばかりではありませんでしたよね？例えばフットサル大会の企画運営等をやりました。まぁ桜井さんはまったく手伝ってくれない中、僕らががんばったフットサル大会は成功に終わりました。しかも企画運営した僕らのチームが見事優勝したときはとてもうれしかったです。多分、多分交流の人のおかげ･･･だと思いました。

なんてゆー俺じゃないけど、これからもたまに遊びに来ると思うけど、その時はヨロシクっす。

交流のサラブレッド川島

開館直後にふらっと現れて以来どっぷりとここに入り浸らせていただきました。この一年は自分にとって変化の年となり、正直つらい年でした。しかし、ここでできた友人のおかげでとても楽しい年でもありました。ボランティアや委員等、これまでは考えられないことも経験できました。今年度からはなかなか顔が出せなくなってしまいますが、今後も交流センターの明るくやわらかい空気がそのままであることを切に願います。

下湯祐基

僕たち三年三組は文化祭のために６月頃から活動を始めました。最初はテーマを決め、韓国と日本の平和について何かできないものかと考えました。調べていくうちに「音」で平和を訴えようと思いました。そして「チャンゴ」と「和太鼓」の２個で演奏劇をしようと決めました。11月の文化祭に向けて練習が始まりました。毎日のように練習をし、この交流センターもお借りしました。本番は練習のかいあって大成功しました。その後、この交流センターに「演奏してくれないか？」と依頼されたので一部ですが演奏させていただきました。交流センターには本当にお世話になりました。これからもよろしく。

菅野　涼

小島 辰也

居場所づくりに取り組む仲間から

「ファンインでの居場所づくり」　渋谷ファンイン　岩間 文孝

ファンインでの活動も８年目になった。とても変化が早い子どもたちの小さな声を大切にしながら居場所づくりをしてきた。

渋谷ファンインは、「子どもたちが自由に集まり、楽しむことができるたまり場を地域につくりたい」、そういう想いで地域の有志で設立された。ファンインは、児童館のような施設はないが、区内の社会教育施設、学校、スポーツ施設、企業のオフィスのスペースを利用しながら、子どもたちの居場所づくり活動を展開している。

活動は、子どもたちが自由に集まり自由に活動することを基本とした「たまり場活動」、子どもたちの希望にあわせて継続的に行う「クラブ活動」、団体として地域のイベントに参加する、自然体験、職場体験等の活動を行う「体験活動」である。

この夏に、ユースパートナーが、中学生に向かって「次のサポーターはみんなだよ。お願いね。」と言った。中学生は、突然のことにきょとんとしていたが、しばらくたって「まだ無理だよ。」と言いながらうれしそうな表情をしていた。

「これからの居場所での活動は、中学生、高校生と一緒につくっていきたいね。」と居場所のユースパートナーと話し合っている。

子どもたちの感性はとても豊かである。その子どもたちの育ちに寄り添い、共に進んでいくためにも 5 周年を迎えたにふりーふらっと野毛山との連携を深め地域に「学びの場」を創造していきたい。

「居場所の可能性」　奥州市水沢青少年育成市民会議　大村 千恵

数日前の祝日、自宅でくつろいでいたら携帯電話が鳴る。休日の電話はロクなことはない。案の定、「俺、もうだめになるかもしんない....。」電話の向こうで差し迫った青年の声。子どもの居場所「パステルハウス」に５年間入り浸った常連だ。家庭環境は複雑で、恒常的に虐待を受け、おまけに軽度の障害を抱えている。喧嘩、喫煙、盗難騒ぎ、プチ家出、夜間進入等々、居場所でのトラブルを一手に引き受けている（？）時期もあった。「キレそうだ～！」と本人からの電話でパステルハウスに一目散に駆けつけたり、親に勘当されたと青白い顔で市役所にやって来たことも。今回は特にも深刻なようだ。会ってみて驚いた。首の周り全体がどす黒くうっ血している。「親父に首を絞められた。」と興奮気味に語る彼。三度目の父親は「お前の親になったつもりはない！」と殴りかかってきたという。

一方、「ホワイトキャンバス」でのある日の夕暮れ。閉所時間になっても帰りたがらない小学一年男児にスタッフが声をかけると、「家に帰っても一人ぼっちなので、近くの公園でいつも親を待ってるんだ。」との返事。深夜１１時頃までがたびたび続いているという。

また、今気になっている女子小学生は喫煙、万引きの常習の嫌疑がかけられている。

水沢の居場所“ホワキャン”や“パステル”では、多くの子どもたちが集い、切磋琢磨しあいながらと

もに望ましい『育ちあい』をしている。他方では、前述のように問題を抱えた青少年も少なくない。

なんでも、中央では社会教育不要論が噴出していると聞いた。教育の究極の目的は人間を作ること、そして、必要なところにこそ教育は施されなければならないと考えている。

このことを思うとき、社会教育こそが今の人間社会の危機を救うカギを握っているのではないか。

先の首を絞められた青年は、怒りの矛先を義父に溺愛される異父兄弟に向けてしまう。２歳の義妹の首に刃をつきつけたのだ。（もうどうなってもいい...）と、一時頭を掠めたが、その刃は振り落とされることはなかった。筆者も含め居場所のスタッフは苦しみながらもこの５年間、ひたすら彼の幸せを願い真剣に向き合ってきた。このことが青年の心にブレーキをかけたと信じたい。

「職員と一瞬の日常化を求め」　生麦地区センター館長　中村 喜久栄

「ふりーふらっと野毛山」の魅力的なみなさん５周年記念おめでとう御座います。支えて頂きました「夏休みだ！地区センボラ」も今年で２回目になりました。開館より２６年経った今も青少年問題は繰り返し継続され我が「地区センターの顔」になっております。

「そうだ！沈静化ではなく日常化だ！」が着任時の密やかな私の覚悟でした。青少年の居場所づくりを目指す区役所の提案に「ここで！流石だ！遅いよ！この時を現場で課題を抱え待っていたのです」と、主催は鶴見区役所と生麦地区センターで、８月の２週間、高校生が中心でのボランティア経験が始まりました。小学生はお姉さんお兄さんとドッチボールや鬼ごっこで遊び離れない、また就職を目指しパソコンの資格を取った子は図書登録を、プレイルームであかちゃんを抱っこしお母さんともお話など、戸惑いと笑顔で接し爽やかでした。また接する職員も高校生とお仕事で関わった新鮮な初体験でもありました。

青少年問題は大人の対応が問題なのではないでしょうか。現場での実感の日々です。懸命に関わると「普通の子が利用できない。どうしてこんなマナーの悪い子供たちに馬鹿にされながら尚も注意していかなくてはいけないのか、警察・学校・親に通報し、現状を打開しなくては、館長が甘い」になります。そうだと思うのですが「現状を抱えてみましょうよ」と心が叫ぶのです。会議にでると青少年の溜まり場になっているだけで「荒れてるんだって」と聞かれます。来れば食べちらかしなど多々ありますが行き場のない子がいるだけです。決して好い風景ではありませんが、良く観ておりますと大人の視点とは違いますが、注意すると無反応で「うるせェー」と滅入る言葉がかえってきます！でも、即ではないが注意された事に気を使って辞める様が垣間見えます。「この一瞬があれば」とか、「これが成果だ」とか、小さな小さな変化に触れることで職員と明日に向かっております。

「『居場所づくり』とは･･･」　財団法人京都市ユースサービス協会　松山　廉

横浜市青少年交流センターに職員の皆さんが、研修ということで南青少年活動センター（以下南）に来てから、もう５年なんですね。あの頃は南のロビーも少し落ち着いていた時期でした。

「“居場所づくり”はつくってあげるものではなく、一緒に作っていくプロセスのこと」、研修のときにそんなことをいった気がします。

あの後、南のロビーは再び激動の時期を迎えました。

今まで関係を作ってきた人とは違う地域の、やんちゃな青年がたくさんやってきました。その為に、関係つくりは困難を極めました。タバコを吸ったり、利用者に対する失礼な行為は当たり前。改造バイクや万引きも当たり前。そんな彼らと，“居場所づくり”を始めたのです。とても大変な時間でした。利用者かクレームがきたり、地域の人からお叱りを受けたり。そして、彼らから何度も裏切られたり。

ふと自分たちは、なぜこんなことしているのかな？なぜ彼らと関わろうとしているのかな。そんなことも思いました。

彼らが来てから２年ほど経つと、ロビーもすこし落ち着いてきました。彼らがわれわれの思いを理解し、そしてわれわれも彼らの思いを少し理解しはじめました。お互いが安心して語り合い、思いをぶつけあえる場所ができたように感じました。利用者や地域の方に彼らとの関わりや取り組みの説明をおこない、理解を得られるようになってきました。

不思議なもので、後から考えると、彼らとまさに格闘した約２年間はとても有意義な時間でした。決して彼らは南に来て更生したわけではありません。でも一緒に居場所をつくっているこのプロセスは不思議と宝物のように感じます。たぶんこの感覚は彼らも持っているものではないでしょうか。時々、彼らとあの激動の時期のことを振り返っては、「俺むちゃくちゃだったよなー、あん時どんなこと思ってた？」「俺、ちょっとお前らにびびってたよ、怖かったもん」「ほんとー！」なんていいながら、笑いあっています。

居場所づくりを事業のテーマに挙げるというのは、どんな青少年ともちゃんと関わろうという意思表示なのかもしれません。青少年施設での事業というのは、どちらかというと来る青少年を限定してしまいます。その事業に興味をもった人しか、申し込みしません。

しかし、居場所づくりをテーマにすると、いろいろな青少年と関わらざるを得なくなります。いろいろな思いをもっている彼らを、センター側の理由では関わりを拒否できません。来る人を選べません。ゆえに私たちも大変です。

そんな大変な思いをしてまで、一緒に居場所を作りあうそのことで何の意味があるのか。

私にとっては、先ほどいったような、“居場所を一緒に作りあう”というこの長いプロセスが、とても愛おしく大切なもの。そしてそれを彼らと一緒に感じたいということかもしれません。

今、私は山科青少年活動センターにいます。ここでも同じように中学生がいっぱいきています。そして、今も彼らと一緒に愛おしく思えるような何かをつくりだしています。

“居場所づくり”とは私にとって長い付き合いのテーマになりそうです。

「ふりーふらっとの立ち上げにかかわって」　東京学芸大学講師　倉持 伸江

５周年、おめでとうございます。横浜市青少年交流センター「ふりーふらっと野毛山」には、開館前の準備期間から開館してしばらくの間、研究生として会議に出させていただいたり、職員からお話を聞かせていただいたりしてお世話になりました。

開館準備期間中から、また開館してからも、職員やスタッフがここをどのような施設にしたいのか、そのために自分たちがどのような役割を担うのか、ということについて何度も話し合いを重ね、共に試行錯誤しながらつくりあげていったプロセスに立ち会うことができたのは、とても貴重な体験でした。青少年がだんだんと施設を訪れるようになると、問題やトラブルもよく生じていましたが、施設の都合や職員の視点で青少年たちにルールを押しつける、ということはありませんでした。しかし、利用者である多様な青少年と向き合い、受け入れ、理解し、働きかけるという活動にマニュアルがあったわけではありません。青少年の主体性を尊重し、成長を見守りたいという共通の思いをどう実現していくかということが職員やスタッフのみなさんが悩まれ、苦労されていた点だったと思います。

その中で、職員やスタッフたちは、いろいろなことを試し、試してうまくいったことやうまくいかなかったことを日報やミーティング、研修を通してふりかえり、共有するということに取り組んでいました。職員やスタッフ個人の力量や熱意もさることながら、職員同士が実践と省察を通して力量を高めあうことに組織として取り組もうとする姿が印象的でした。

青少年と共に、そこに関わる職員、スタッフ、ボランティアも学び、成長する「ふりーふらっと野毛山」の取り組みがこれからどう展開していくのか、とても楽しみです。

子どもが育つお手伝い　～コーディネーター寄稿～

「受　付」　村上 龍爾

受付ではフリースペース、レクリエーションホール利用者に記名をしてもらう事になっている。記名表に子どもたちが名前を書く時、きれいに丁寧に書く子とむちゃくちゃに書く子がいる。「きれいな字だな～君はきっと勉強もできるだろ」と話しかけてみる。反対に「なんだこりゃ、読めねえぞ、君が大人になって有名になってサインをする時、こんな書き方するの？」でも無視されてしまう。受付表をぐちゃぐちゃにして、ペンを放り出して行ってしまう子もいる。４～５人で先を争って記入する子、とぼけて書かない子、それがかっこ良いと思っている子、他人の分まで書く子、「書いとけよ～」とか言って他人に書かせる子、いろいろいるなー。

いつも、きちんと足を止め、手を前にそろえて挨拶してくれる年配の奥さん、明るく声をかけながら、にっこり微笑んで通り過ぎるご婦人、あ～良い家庭をお持ちなんだな、良い環境で人生を送ってきたんだなと思う。こちらも負けずに明るく挨拶をお返ししたいと思っているが出来ているだろうか。

お声をかけても黙って通り過ぎて行く方もいる。いつも同じだと寂しい。世間では「無言症候群」なんて言われ、エレベーターなどでボタンを押してもらっても、何も言わずに出て行ってしまう人たちと同じだ。「ありがとう」と言えばお互いに気持ちが良いのに。

左手で字を書く若い女性に声をかけた。「サウスポーの反対はなんて言うか知ってる？」、女性は「私 17 歳の時、脳梗塞で半身麻痺になったので左で書くようになったんです」、大失敗！！でも辛うじて「ウースポーって言うんだよ」とフォローをしたらにっこり笑ってくれた。それからお会いしてもいつもにっこり笑ってくれる。あ～良かった。

センター発足５周年を迎え、多くの子どもたちを見てきた。最初に来ていた高校生はもう社会人だ。時折ひょっこり訪ねて来てくれるとものすごく嬉しいし、小学生だった子が「オレ誰だかわかる」なんて話しかけてくれるのもいいな。もちろんずーっと来ている子どもたちも成長する過程が見えて素晴らしいことだ。

センターの受付は 12 時間、毎日 100 人余の人がここを通る。つくづくここが原点なんだ。

「青少年が輝く居場所“ふりーふらっと野毛山”」　中居 正威

遊び場の提供・仲間の提供

本来人間である以上、自分を必要とされる、自分が何かに関われる場所を探し、作ろうとする。そこに喜びを感じ、自分の存在感を体感する。それは特に子供には必要とする。お互いが切磋琢磨し、体を思い切り動かしたいという衝動にかられ、大きい子も小さい子も入り乱れ、遊び興じる。そして汗をかき、水やジュースを飲む。この過程に人間力が培われ、大人になっていく。近くにいる大人はそうした雰囲気を共有し、見守り、アドバイスするときはアドバイスし、誘導する必要のある時は誘導する。そこで「遊び」が子供をどう成長させるかの例を示そう。

遊び場の提供という面からみると、小学校の男の子 A 君が始めて来館してきた。始めは卓球やバドミン

トン、ドッジボールをやっている子供たちを見ていた。そのうち、コーディネーターに誘われて、卓球をやるようになる。最初のうちはポンポン程度であったが、ある時、顔見知りの子がきて、コーディネーターが変わろうとしたが、嫌がった。そこで、コーディネーターが顔見知りの子とやることになった。しかし、その男の子A君は卓球台の上に横になり、止めさせようと必死に抵抗した。A君は友達をつれてくることはなかったから、友達はいないか、友達関係を作るのができなかったのではないか。しばらくの間、コーディネーターとしか卓球をやろうとしなかった。今も必ずといっていいほどまず、コーディネーターをつかまえて、卓球をやる。しかし、一つの転機が訪れた。それはセンターで卓球大会をやることになり、ボランティアと組み、優勝した。それが自信となり、A 君の友達関係も作ることができるようになった。その証拠に、A君はセンターに友達を連れて来るようになったことである。

この例にみるように、それまでは家庭以外や学校で友達と親しく話すこともなかったのではないか。従って、卓球をみていて、やりたくなっていた時に、コーディネーターに背中を押され、やりたいと思っていた卓球ができた。日々センターにきていて、コーディネーター以外の友達とも卓球ができるようになった。毎日やっているから、当然卓球が上手になるし、自信もついてくる。また序々に明るくなっていった。この間、１年近くかかった。丁度、遊びたい時期、育ち盛りに、こうした空間と時間と仲間を提供できたから、A君のようになることができたのではないか。

そーれ、遊びが楽しいぞ

「ふりーふらっと野毛山」は２００２年１１月にオープンした。当初は近くの横浜市立中央図書館に通っていた受験生がぽろぽろと来るようになり、スタートした。まず、１階の勉強室での受験勉強であった。彼ら（一期生としておく）は勉強に疲れると、体育館（レクホール）を見つけ、バスケットに興じていた。その後、バスケットに一人一人興じていた者同士で、相手を必要とする卓球やバドミントンを始める。とそこで友人となり、勉強も教え合うようになる。

一方、周辺の小中学校に広報をしておいたから、小学生、中学生または小学生以下の子供がレクホールに遊びに来る。小学生は小学生で、中学生は中学生で、最初は同じ学年の子同士でバスケット、卓球、バドミントンを始める。ところが、そんなに広くないから、バスケットをやりたい、卓球やバドミントンをやりたい、と思って、レクホールに遊びに来ても、先客がいて、出来ない。あきらめて帰る子、１階の溜まり場（フリースペース）でだべったり、ジュースやラーメンを食べたり、テレビを見たりしている子もいる。または、小学生同学年の子同士で遊んでいるところへ、異なる学年の子たちが兄弟で知っていたりすると、「一緒にやらせて」とか、既に遊んでいる子が「入ったら」と言ってくれたりするようになる。または、第一期生同志でバスケットや卓球、バドミントンをやっていたところへ、小学生、中学生も「一緒にやろう」と言われて、第一期生の輪の中に入っていったり、「僕らも入れて」といってその輪に入っていく。または、何時間もドッジボールに遊び興じている小学生の集団２０人前後いる。そこへ中学生や高校生がバスケットボールをしたくてやってくる。強引にバスケットをやり始める。ドッジボールをしていた集団は止める場合もあるが、ドッジボールが面白くてしょうがないから、継続してやる。中学生は真ん中のゴール周辺でバスケットをやる。お互いに気を使いながら、お互いにやる。そこには相手への気遣いが小学生の側にも中学生の側にもあり、いいことではないか、どちらかを止めさせることはしないで、観察していることにしている。

こうした風景が日常茶飯事となっていく。彼らははじめは一つの集団にはいっていくことをためらったり、諦めたりしているが、回を重ねるにつれ、その集団が楽しく遊んでいると、「遊びたい、みんなと遊びたい」という衝動に駆られ、その輪の中に自然と溶け込んでいく。

第一期生は体も大きく、動きも早い。しかし、小学生は体も小さく、動きも遅い。この取り合わせでどうするか。第一期生が手加減することとなる。彼らもそれでも楽しいし、小学生も「お兄ちゃん」と遊ぶことが出来るから、楽しい。みんな顔が赤らみ、汗びっしょりになって遊ぶ。疲れると、レクホールの端に座り込み、話し込む彼ら。「名前は」とか聞いたりしている。

「喉が渇いた」と言って、１階のフリースペースまでジュースを買いに行く子もいる。

もうこうなれば、何の仕掛けも要らない。自然と輪ができ、遊びに興じる。毎日毎日、目を輝かせて、遊びにくる。「群れ遊び」はとどまるところを知らない。

毎日、センターにはいってくると、「おはよう」「こんにちは」と挨拶を交わす。自分の名前、何区、年齢、遊び場所（フリースペース、レクホール、ワークルーム）のいずれかを丸で囲む。フリースペースでゲームに興じる子、だべっている子、テレビを見る子、ジュースやラーメンを買う子、レクホールが開ければ、レクホールに流れ込む（レクホールは午後１時３０分から５時３０分まで、自由に使っていいようにしている（フリータイム)。レクホールを半分に仕切り、毎日ボールは片面、あとの片面は月曜日卓球、火曜日卓球、水曜日ボール、木曜日バドミントン、金曜日バドミントン、土曜日卓球、日曜日バドミントンと決めている。ただ興味も時とともに変わるから、卓球をへらしたり、バドミントンを増やしたり、ボールばかりの日をふやしたりしている。

みんなが上手くなるーーさあ、試合をやろう。

毎日毎日、レクホールに来て、バスケットをやる、ドッジボールを、卓球を、バドミントンをやる。第一期生も小学生も中学生もやる。たまに、人数が少ないときには、コーデイネーターとやる。そうなると、みんな上手になっていく。やっているだけではつまらないから、点数板をもってきて、１点、２点と繰っていく。

バドミントンであれば、スマッシュのしかた、バックでのヒット、フェイントなど、卓球であれば、ラケットの持ち方、カットの仕方、スマッシュの仕方、サーブの仕方、などみんな工夫し始める。上手な人の技術を盗む、友達同士で教えあう。まさに交流をやっている。

そうすると、こちらが提案する。「卓球大会をしようじゃないか、だれか中心になってやってくれる友達いないかなあー」と、話を持ちかける。すると、第一期生とよく卓球をやっていた中学生のグループが「卒業記念にやりたい」と言ってくる。１カ月後の土曜日にやることにする。賞品は何にするか考えてくる、と言う。一週間後、「賞品は一等ヒレカツ、二等ロースカツ、三等コロッケ２個、その他参加者はコロッケ一個で、カレーライスにしたい」、と提案してきたので、彼らの言う通りにする。こうした賞品は大人ではなかなか思いつかない。卓球大会参加者の募集のチラシを作らせ、募集用紙を受付に置く。３０名近くの参加者があり、小学生から、中学生、第一期生などである。

当日は賞品がカレーであるから、午後１時から始める。まず、くじで順番を決める。白板に番号が書いてあり、番号順に名前を書き出していく。こうして、試合相手がきまり、試合を開始する。審判は彼らが中心になり、第一期生やコーディネーターが担当する。二面に分かれて試合を行う。父兄もふくめて、大

勢の応援団が自然と出来上がる。レクホールは大賑わい。最後が中学生同士、小学生でもかなり上手な子（小学校５年生）が勝ち進み、一等、二等は中学生、三位決定戦で小学校５年生の子となった。終了後、表彰式で、彼ら中学生が表彰状を渡す。そして、卓球台がテーブルクロスをひいて即食卓台となる。楽しい宴が始まる。楽しい、交流のひとときであった。

第一期生と中学生とのフットサルの試合

レクホールはボールを蹴ることは禁止しているが、空いているときに、フットサルをやりたい、と言ってくるから、ゴールとフットサルのボールを用意する。フットサルは体力がいるから、第一期生や中学生が中心にやっている。３０分もやっていると、汗をかく。しかし、フリータイムで空いているときは短時間であるため、物足りない。そこで、夜間の６時から１０時まで、お金を出し合って５００円払い、思いっきり試合をやる。汗びっしょりになり、上のシャツを脱いでやる。彼らはくたくたになる。目を輝かせ、青春が爆発するときである。こうした爆発があるからこそ、変な遊びに走ることもない。ところが、彼らだけでの試合では物足りなくなってくる。そこで、第一期生に話しかけ、試合をやることにする。試合だから、仲間同士でやっていたのとは違い、力を出し合う。試合は中学３年生の勝ちとなる。フットサルのあの激しい試合は体力の消耗を伴うが、中学、高校生ともなると、体力の消耗も激しいが、回復も早い。ホンのわずかな年齢さがだ、フットサルはその差をみせつける。交流もでき、かれら中学生は大満足であった。

ドッジボール大会開催

ドッジボールは大勢の子供達がボールをつかむか、はじくか、あてられるか、の試合であり、多くの子供達の交流の場となる。始めは同じ小学校の同学年同士でやっている、それを見ていた異なる学年の子も入っていく。そこへ中学生や高校生、第一期生も加わる。ドッジボールはみんなで集まってやることも５－６人でやることもできるから、毎日のようにやっている。それだけで楽しい。長い間、隅の方で見ていた子供が序々に仲間にはいるようになる。

そこでまたまた、ドッジボール大会となる。今度は小学生が主催するから、賞品は記念品の残りとする。試合は仲の良い者同士が一つのグループを作る。一等、二等、三等をきめる。これも外野席には父兄も見に来るように、土曜日か日曜日にあてる。

バドミントン大会――淡い初恋の芽

卓球の場合は、ピンポン玉をラケットにあてて、打ち返せばよい。打ち返す球がポンポンとはねることができればよい。しかし、バドミントンは卓球に比べてかなり難しく、試合をするまでには、かなりの時間の経過を要する。上手い高校生がやっているのを見てみる。高校生に教えてもらう。羽根を上手くサーブできない、上手く打ち返せない、スマッシュをどうするか、フェイントのタイミングもむずかしい。フェイントを打たれると、なかなか取れない。それこそ、ゼロからの出発である。しかし、１－２年何とかやっていると、うまくできる子供もでてくる。さて、誰に声をかけて、リードしてくれるかと考える。近くの高校生に頼むしかない。募集をかける。卓球ほどの人数は期待できない。しかし、１５人ほどの子供達が応募する。今度は出場者よりも応援する人の方が多い。最終的には小学校５年生の男女での優勝決定戦となる。男子の優勝となり、賞品はバドミントンのラケットと羽根であった。その後、その子は中学生になり、バドミントン部にはいり、部の強力なメンバーとして活躍している。また、後日譚になるが、そ

のバドミントンの試合をみていた、別の小学校の女の子から優勝した子が好きだからと相談にきた。バドミントンをやる日にきてみればと言っておいたが、なかなか会うことができず、そのままになってしまった。その子はどうしているだろうか。

「か　お」　川島 耕三

今度成人式だよっ、とカウンターで話しかけてくる日曜の夕方、ソファーに陣取った彼らから時折聞こえる大爆笑にあの雰囲気が甦る。センター中を駆け回り、大声で喚き、静かになったと思ったらゴミを散らかし放題散らかして誰も居なくなっていた。外で騒ぐのを注意するとウッセーと近所迷惑な大声、などなどなど。いろんな事がありました。

明日からテストと勉強室に向かう彼、昨日はソファーに寝転がってズ～と携帯していた。彼の仲間が彼女を連れてきた。３年で卒業したかったけど４年掛かりそうと言う。仕事を終えてからの授業では、ついウトウトがいつものことらしい。理数の判らないところ一緒に考えようと誘っているのだが、まだ一度も声が掛からない。

カバンを放り投げてソファーに折り重なって寝そべって携帯している。テレビの前でスナック菓子を食べていた一団、ゴミは一応は片付けた形跡はある。バーカウンターで歓声を上げながらトランプに夢中、声を掛けるとハイと返事だけは優等生かア～と気の抜けた声。彼らもオオサワギ隊・ゴミチラカシ隊になってしまうのか？

後片付け中にたまたま顔を覗かせた学年の割には小柄な彼、一緒になってピアノを押してくれた。アリガトにウンと頷く顔が俺でも役に立つんだぜと得意気だ。いつもは我々の言うことは殆ど無視し、レクホールでゲームに没頭し、ドッジボールで喊声を張り上げ、鬼ごっこで館内を所狭しと走り回る。二つの“かお”がホワッと重なる瞬間です。

この子たちは先輩の歩んだ道をそっくり其のまま辿っているかのように見える。そこには三つの節目、小学校を終える時、中学を終えるとき、高校を終えるようなとき、があるようだ。節目を越えた途端に梯子を登るが如く“かお”が変ってゆく。判で押したように毎年繰り広げられるこの不思議に立会えるのも面白い。

来春節目を迎えるあの子たちはどんな“かお”になるのかな？

「ボランティア活動に就いて５年間を回顧する」　鈴木 忠義

５年前の平成１４年５月末をもって３９年間のサラリーマン生活に終止符を打ち、会社組織の歯車の一輪から解放された時、今後の一年間は好きなことをやろうと思い描いて見たものの一月二月が過ぎて何も手につかず、自身を憂い孤独感が増した８月の夏、保土ヶ谷区の広報チラシで「リタイヤ男子・今後役立つ男の料理教室」３日間講習に参加、同年代もあって作ることもさる事ながら楽しさを感じ、その後同好

会である「男厨会」の会員となり今も継続中である。

同時に、この年の９月に常々人生進路の相談に乗っていただいている学生時代の良き先輩Ｍ氏より今後の身の振り方に忠告を受け、「ボランティア活動」を紹介されて桜木町のＶ協会に出向いて応募、採用されて１１月から前身のボランティア協会傘下である「横浜市市民活動支援センター市ヶ尾プラザ」に配属勤務する。しかし平成１７年３月に閉鎖し、引き続き「横浜市青少年交流センター」に願って継続採用となった。

平成17年４月「レクホールデビュー」。胸に名札を下げてホール入る、この日は両面ボールの日、右面には低学年生10人ほどドッジボールで遊び、左面では中学生５、６人がテニスボールでキャッチボール（後で判るがＯ中学の知能犯イタズラ５人組）その中の一人が身体は投球相手方向に向いても何故か目だけは此方を向いているのに気づく、何球か投げた時ボールがこっちに向って一直線、腰に当たる“アーすまんすまん曲がっちゃったよ”

もろに洗礼を受ける。駆け寄ってきたので謝りに来たのかと思いきや“おじさん名前なんて言うの”下げ札を見て“アー鈴木か平凡な名前だなァ”そうだよと答えると追打ちして“交流の男の中でＴさん以外は誰も恐くないよ”どうしてと答えると“だって怒っても迫力がないよ”私は違うよ、館には色々ルールがあるから間違った事をしたら怒るよ“へーそうかいじゃ怒ってみな”と言ってその場を立ち去った。その後この５人組の行動は非常に大するも決して私たちの前では悪さを見せなかった。反抗期の通過点での一人の行動は非常に大人しいが何人かの群集になると連鎖反応で悪の行動をする。見られていない所で壁紙をむしる、ガラスを割る、床に穴をあける、ドアを破壊する、終いには窓から半身を出して奇声を発する、危険極まりないが、そんな彼らも３年生になった１８年春の６月「ワークルーム改造計画」一環の木造机、椅子の塗装作業に参加その折に名入れ明記をしたがその後態度が変りいまだに保全されている。卒業後の来館も過っての悪さは見られない。

「ありがとうございました」　石井 まさ子

女子高生　　「印刷機、使いたいのですが・・・」

受付嬢（？）　「ごめんなさいネ。印刷機故障して使えないんですよ。」

———シュンとした諦めの空気が流れる———

ヒョッコリ登場した館長

「何枚、必要なの？」

———協会の他の施設へ原稿を抱え、自転車（名前は小太郎）を走らせる———

５年前、開館当初、冬のまったりした日の出来事です。女子高生たちは大喜びで、印刷物と一緒に**大きな優しさ**も、受け取りました。私も暖かい心地よさを感じながら、彼女達が、将来、どこかで誰かにこの時受け取った**優しさ（思いやり）**を、どんな形でもいいから渡していってもらえたら嬉しいなあと思いました。

交流センターは、間違いなく青少年の居場所に成長してきたと思います。センターで多くの青少年と出

会うことができました。人間関係が希薄になっている世の中で、青少年と関わってこれたことは、私にとって宝物です。青少年と話すときは子どもの気持ちに寄り添い、踏み込まず、子どもたちに備わっている力を信じて背中を押してあげるように心がけてきました。これからも“人と人との関わりを大切に、それは素敵なことなんだ”という思いを持ち続けていきたいです。

青少年には自分を認めてもらえる本当の居場所を、家庭に学校に職場に見つけて欲しいと思います。そして、その居場所が先日、新聞紙面で目にとまった言葉“まほろば”（古事記の中に出てくる言葉で優れた美しいところという意味）であって欲しいと思います。

「明日も笑顔になあれ！」　松田　利恵

某月某日　今日は１６時からの遅番勤務です。

16：00　放課後の子ども達がぞろぞろとやってきます。受付はこれからお部屋を利用するお客様とお帰りになるお客様とでごった返しています。子ども達に「受付で名前を書いてね」と声を掛けます。僕はいつも来てるから名前知ってるでしょ、書いといてよと言う子、個人情報だから書きたくないといってる子、すまして偽名を書く子、友達の分まで書いてあげる子、さまざまです。

16：30　常連の受験生が来ました。今日は寒いね、勉強進んでる？風邪ひかないでね、とおしゃべり。（来年は志望校に合格するように祈ってますよ）

17：00　去年まで高校生バンドで頑張っていた子が大学生になり、久しぶりに顔を見せてくれた。急に大人っぽくきれいになってびっくり。大学の勉強やサークルやバイトのことをとても楽しそうに報告してくれた。青春真っ只中の笑顔は輝いていてまぶしい。

そうしている間にも、トランプ貸して、ティッシュください、自販機からジュース出ないよ、パソコン動きません、と次から次と受付に来る子ども達への対応をします。

18：00　近くの中学生が来ました。来週試験というので今日は英語の特訓。「英語うざい、英語死ね！」というわりには、楽しそうに２時間も受付で勉強。理解できた時の笑顔がとてもいい。誰かと一緒の方ができる、と言う。（私で良かったらいつでも付き合うね）

20:00　高校生が数人やってきた。彼らは昼働いて夜学校に行っている。疲れ過ぎて眠れない時もある、と聞き心配する。それぞれカップ麺を食べたりメールをしたりして、まったりしていった。

今日はこんな一日でした。子どもにはいつでも笑顔でいて欲しいと思います。私のできる事、それは子どもの気持ちに寄り添い、背中をそっと押してあげる事。そのためいつでも笑顔で迎えてあげたいと思っています。明日も笑顔になあれ！

「みんな･･･ありがとね･･･。」　桜井　久美子

少し前の夜、野毛の街を歩いていたら、遠くから若者の雄たけびが聞こえた。明らかにまわりに迷惑だ。（も、もしかして…交流に来る子たちでは…）予感は的中。そこには久しぶりの顔があった。顔を覗き込んで、軽く手を挙げると「おおおおぉ…さ・く・ら・い！！」私よりずっと大きくなった図体でおもいっきり飛びついてきた。Ｓ君だ。まわりにいる子たちは、軽く遠巻きにしている。騒いでいるのをたしなめ

たいのをぐっと抑えて道の隅に連れていき声をかける「元気にやってる？でもなんだかずいぶん痩せたんじゃない？」その声かけをきっかけに彼の口から言葉が溢れ出てくる。「おいおい聞いてくれよ！今日さ、バイトを急にやめさせられたんだよ！まったく店長のヤツひどいんだよ。かわいい女の子が応募してきたら俺のこともう来なくていいとかゆうんだぜ！……」（そうか、そうか、これがさっきの雄たけびに繋がっている訳だ…。確かに大人の理不尽さには頭に来ることもあるだろう…。でもそう興奮気味に粋がって報告するときのあなたの顔は５年前の小学生のままだよぉぉ…（にゃ笑）。「おい！おぃ！さくらい！笑い事じゃないんだよ！！」…。

早いものでもう５年がたった…。こんな事を言ってはなんだが、実は当初、次の仕事までのほんの数カ月だけ置かせてもらうつもりでいた…。そんな自分がこんなに長いことお世話になっているんだから本当に交流センターには計り知れないほどの魅力があるということだ。この５年間、正直、交流センターの事を考えない日はなかった。勤務のない日でも交流にくる子供たちのことが頭から離れなかった。子供の教育に携わった経験があるわけでもない、もちろんそんな資格もない、それに実は若い頃は子供が苦手だったというナイナイづくしの私にとって、交流は楽しくもあり、またこれが最良という方法のない子供らへの対応に悩んで悩んでの場でもあった。

フリースペースで長い棒を持って振り回す子、何を思ったか自動販売機の上に登って降りようとしない子、大きな声を出してまわりを威嚇をする子、ソファを切り裂いたり、ゴミをちらかす子…本当にメチャメチャな時もあった。そんな夜の勤務が怖くなるほどの状態の時、もうどうしていいかわからずに、子供たちに怒りながら「どうしてやめてくれないの……」と泣き出してしまっていて、当の本人からは「どうしておまえ泣いてんの？」とキョトンとした顔をされたこともあった。

また、いわゆる世間で言われるいい子もまた、いろいろな悩みがある。親の期待と自分の気持ちとのギャップ、兄弟への配慮から自分の気持ちをぐっと抑えていい子を演じている子、そして言いたいことがあっても言い合わない友人関係…そんな悩みを聞きながら自分ながらにアドバイスする。でもこの対応で本当によかったのか、こういう風に言ってあげた方がよかったのではないか、いやああ言ってあげた方がよかったのでは…と自答自問することしきりだった。

つまりは、この５年間たくさんの子が私を喜ばし、怒らし、悩まし、哀しませ、楽しませてくれ、またたくさんの子が、つたない私の対応の犠牲になって私を成長させてくれた。

ここのスタッフになってときどき思い出す人がいる。彼らは学校を経営していたが、その事務所も教室もなにもかもボロボロだった。すぐに学校はやめてしまったが、でも私はよくそこへ出かけて行った。なぜなら、ふっと出かけたくなったからだ。その時はどうしてそこに行きたくなったのか考えることさえもしなかったけれど、今、自分がこういう立場になるととてもよくその理由が分かる。私はいつもそこでカラカラになった自分の心に栄養をもらっていたのだ。彼らはいつも私の訪問を両手を広げ、満面の笑みを湛えて「よく来た、よく来た」と言ってくれた。そして、自分がなんとも思っていない小さいことでも思いっきり褒めてくれた。それがどんなに私に元気を与えてくれたことか･･･。〔ふりふら〕の老朽化とその思い出がオーバーラップする時、私は、彼らのようにはできないけれど、少しでもここに来る子らにそれを返さなければという気持ちになる。

「それでＳ君。あなたは店長に対して悪いところはないの？」「やぁちょっとさぁ･･･。ありがとうござ

いましたって言わなかったけれど･･･さぁ」「それってお客さんに？？それはまずいんじゃないの？」「うん。悪かったと思ってる。あのさぁ～。明日さぁ。またちがうところのバイトの面接を受けることになってるからさぁ。今度はガンバルよ！」「うん！そうしてよ！」

私たちはお互いのガッツポーズをクロスして夜道を別れた。

「あの日(とき)から」　石上美津子

それはふと目にした一枚のチラシから始まりました。

「ボランティア協会施設職員（時給スタッフ）募集」

多くの人々に感動と沢山の思い出を残してくれたサッカーワールドカップでのボランティア活動も終わり、何となく気のぬけた毎日を過ごしていた夏の終わりでした。

受付〆切は目の前、桜木町まで要項をもらいに行っている時間の余裕もない。どうしよう・・・。幸い近くの支援センターで手にすることができました。あわてて書類を送ったものの「返信用封筒がない。」「まだ届いてない。」等々、何度も電話をいただきました。何て親切なんでしょう。初めからこんな迷惑ばかりでは、無理かな！と思いながら臨んだ面接。会場の支援センターはシーンと静まりかえり、職員も黙々と仕事！とても耐えられない！

それでもラッキーなことに縁あってお世話になれることになりました。研修中もやっぱり張りつめた空気。実習はそれ以上に緊張の連続でした。

不安な気持ちで迎えた交流センターオープン。「交流センターってどんな所、何をするの？」物珍しさもあって、皆が足を運んでくれました。今までの心配をよそに、交流での日々は賑やかで、騒々しく、ゴミゴミしている子供達の活気でいっぱいでした。

朝からファミコンの前には人だかり、レクホールもドッジボール、バスケ、走り回る子と入り乱れながらも何となく住み分けて楽しんでいました。夕方小学生が帰り、少し落ち着くと中、高校生、受験生ともゆっくり話せるようになりました。そんな子供達が今でもフラッと、成長した姿を見せてくれます。これも館長の大らかな人柄、職員一同の暖かい気持ち故の事でしょう。

様々な思いを胸に、今を必死で生きている子供達と日々触れ合える喜びを感じ、感謝の気持ちの毎日です。

「青少年交流センターって　どんな場所！あのセンターの人間模様も面白い」　齋藤太美雄

その場所は、横浜でも有数な景色の良い野毛山の絶景な場所にあった。

京浜急行「日ノ出町駅」を下車しダラダラ坂を１０分も歩くと着くのだが、坂を上って間もない大きなカーブの場所に「横浜市中央図書館」があり、もう少し行くと「野毛山動物園」があるが、交流センターはこの中ほどに位置する。近くの一帯は野毛山公園で、その昔、巨商・茂木惣兵衛、原富太郎の二人の別荘の場所を公園にしたとの事であり、その時代には足を踏みいれる事がきなかった場所である。交流セン

ターの奥には横浜迎賓館などもあり、このような位置から考えても交流センターは正に野毛山の中核にあるといっていい。

この場所に私が行きだしたのは平成１５年からで、かれこれ今年で４年目を迎える。建物は昭和４０年代初期の建築物で、一言で言えば頑丈に作られている。当時、全国の若者が都会に出て来て、週末故郷に帰ることなく、ここを交流の場所にして過ごされた若者も多いと聞く。昭和の時代から交流の場所はあったのだと言ってよく、交流の場所が若者同士の情報交換の発信地であったのではないだろうか・・・。

この交流センターは１階を青少年の交流スペースにし、奥の部屋では受験生などの勉強にも配慮した部屋を設けている。常時、若者が勉強している姿を見ることが出来る。受験のシーズンともなると、職員などが親代わりになった気持ちで神経を使っているのがなんとも言えなくいい。２階は若者に人気の音楽スタジオがあり、ドラムなどが叩け、演奏者はプロ感覚に浸れる。グランドピアノ設置の演奏室、鏡張りの多目的室などは年代に関係なく人気のある部屋だ。他にも会議室、和室、料理室があり、腕自慢の方が活躍されている。４階にはレクリエーションホールがあり、バスケット、バドミントン、卓球などを楽しむ事が出来る。定期的に日頃の成果披露の場としても使われている。５階は大勢での研修、行事、ダンス練習などで盛況だ。

これらを運営するスタッフは個性の豊かな集団である。

運営責任者は学生の頃からこの種の活動を活発にされ、この活動の理解者である。豪快であり、話し好きであり、エンジニアでもある。館内のパソコンなどは自前で修理、お陰でいたずら好きな子供達が壊してくれるパソコンも使えているのだ。

この責任者をフォローするメンバーも逸材揃いだ。企画立案に優れ、若者の相談に常時乗れるスタッフが５人もいる。その一人は女性であるが、仲間の間では女性館長と言われていて人望があり、子供達から慕われている。また、その一人は食菜のユニークな研究もしている。写真でＰＲする事にも的を得ていて実際の料理より此方がはるかに腕が良くいつも美味しそうだ。また突拍子もないアイデアで子供達を驚かせてくれるだろう。

これだけではない。職員と一緒に仕事を進めるコーディネーターがまたユニーク揃いである。よくもこんなに個性のある方を集めた者だ。責任者の思惑かどうかは解らないが、こうはなかなか集まらないのではないだろうか・・・。子供達は、このコーディネーターと館内で話をしている中だけでコミュニケーションに関する教育ができるというものではなかろうか・・・。

大半の人が認める、ライブ企画に面倒見の良い人、実験と大工道具で子供を育成する人、あちらこちらに気を配りアイデア豊富なスポーツマンな人、ケーキ作り、お茶、お花、手芸などに力を発揮する人等などだ・・・。

最近は、青少年委員スタッフも充実してきている。独自の若者パワーで若者を引きつけてくれる。春の日の子供の日イベント、夏休みイベント、冬休みイベント、ライブ、@楽祭と行事も豊富。気楽に野毛山の青少年交流センターに来て、是非、いろいろな人達との交流を楽しんでみては如何出そうか。

さあ一今日は何をしようか・・・。

交流センターに関わって

富岡克之（横浜市青少年交流センター元職員）

私は交流センターの立ち上げから2006年３月までの３年４ヶ月間職員として勤めました。

居場所作りに関わるのは初めてのことで、子どもたちとどのような関係を築いていくのか試行錯誤する毎日でした。交流センターには、バンド命の高校生や難関大学を目指す浪人生、部活帰りの中学生に近隣の小学生などいろいろなタイプの青少年が来館していました。その中でもヤンチャな中学生との関わりは今でもよく覚えています。

開館して１年くらいの頃からヤンチャな中学生グループがセンターに顔を出すようになりました。毎日のように来館してはロビーのソファーを占領し、食い散らかし、タバコを吸ったり、時には４階の窓から近所にロケット花火を打ち込むこともありました。そんなこともあり交流センターは「行ってはいけない施設」なんて言われていた時もありました。だからといって、彼らを排除したり、ルールで縛りつけることはありませんでした。交流センターに来ている時くらいは大人がかまってあげることが必要だと思っていましたし、少しでもスタッフの考えや気持ちを伝えたいと考えていたからです。だから、私は彼らがタバコを吸っている行為も彼らとのコミュニケーションを図れる絶好の機会と捉えていました。彼らとの関わりだけに限らず、子どもと関わるきっかけを常に探し、時にはしつこいくらい声掛けをしていました。そして、彼らには「ルールだからやめろ」とか「未成年だから…」なんて言い方はせず、「その行為を見てどう思ったのか」「自分はどう思っているのか」というように彼ら自身で気づくように来館する度に伝え続けました。我々の関わりがどのように彼らに伝わっているのか、交流センターをどのような場所と捉えてくれていたのかは分かりませんが、スタッフからうるさいことを言われ続けても毎日のようにセンターに来ていたことや、中学を卒業してすぐに塗装業に勤めたリーダー格の子が、落書きされた駐車場の壁を「俺が塗ってやる」と申し出てくれて丁寧に塗ってくれた事もありました。そんな行為をみると交流センターに何かしら特別な思いを持ってくれていたのかなと感じとてもうれしく思います。今年で成人式を迎える彼らは未だに交流センターに顔を出しカウンター越しでスタッフと会話をしている姿を見かけます。

交流センターでは、私なりに「つながり」というものを一つテーマにして子どもたちや来館者と接するように心がけていました。交流センターに来館した時、なんとなく人とのつながりを感じられる場であってほしいと今でも願っています。

３年４ヶ月という短い期間でしたが、交流センターでの関わりは私にとって大きな財産となりました。交流センターで学んだ「子どもとの接し方」や「子どもを見る目線」など、現在取り組む青少年の育成事業を進める上でも基本の考えとなっています。また、子どもとの関わりやヤンチャ対策などについてスタッフ間で日々議論したことや、開館当初のマーケティングリサーチやプロモーション計画を立て地域に営業へ出かけた日々が懐かしく思えます。これからも、交流センターは環境の変化に柔軟に対応し続け、常に青少年が社会とのつながりを持つきっかけを得られる場であり続けてほしいと思います。

居場所タイプの青少年施設のひろがり

久田 邦明（財団法人横浜市青少年育成協会事業評価委員、神奈川大学講師）

はじめに

1990年代後半から居場所タイプの青少年施設が全国各地に誕生するようになった。その特徴は、一人あるいは数人で自由に利用できるスペースを施設運営の基本とすることである。利用目的の明確な予約制の団体を想定した従来の青少年施設と比べると、この点で大きなちがいがある。

2002年12月にオープンした横浜市青少年交流センター（ふりーふらっと野毛山）もこのタイプの青少年施設である。そこで以下では、このようなタイプの青少年施設が誕生した背景について整理すると共に、その現状と課題を考えてみたい。

1　青少年施設の変遷

青少年施設ということばは関係者のあいだでは当たり前のように使われているが、広く一般に知られたことばではない。そこでまず青少年施設とは何かを確認しておく。

青少年の利用する施設は、学校、社会教育施設、児童福祉施設、勤労青少年ホームなどの施設にかぎられない。このことを承知しておくべきだろう。ゲームセンター、カラオケ、クラブ、マンガ喫茶・ネットカフェなどに数多くの青少年が集まっている。駄菓子屋のようなところもここに加えてよいだろう。これら多様な施設のなかで青少年施設と呼ばれるのは、行政などがかかわりをもつ、子どもや若者を主な利用者とする住民施設のことである。わざわざこのようなことをいうのは、居場所タイプの青少年施設の誕生によって、これまで疑われなかった青少年施設ということばの捉え直しが意識されるようになった、と考えるからである。

次に青少年施設の歴史的変遷について確認しておきたい。

それをたどれば、前近代社会においては、若者宿などの生活共同体の施設であり、近代社会においては、戦前の日本青年館に代表される施設や、戦後の青年の家などの施設である。

若者宿は、若者仲間によって運営される、一定の自治的機能をもった施設である。近代学校の誕生以前には主要な教育施設の一つだったといえるもので、戦後の高度経済成長期まで存続したので、50代60代の世代のなかには経験した人もいる。

これに続く近代化の時代の青年館や青年の家は、若者宿を支えた生活共同体の役割を行政が引き継いだものといえるだろう。このような連続性については明確に自覚されなかったが、近代化の時代が一段落した現在からみれば、その連続性にこそ着目すべきだろう。若い世代は、ある年齢に達すると、大人から一定の距離を置いたところで同世代の集団を経験し、大人になる準備をしてきたということである。なお、戦前には、若者や青年はもっぱら男性を意味することばだった。この問題については、ここでは指摘するに止める。

青年の家などの青少年施設は、1960年代の高度経済成長期以降、国や都道府県、市区町村によって数多く建設されてきた。しかし、その後、1990年代には再編成されたり廃止されたりした。その理由は財政問題と利用者の減少だといわれるが、神奈川県や東京都の場合も例外ではないだろう。

青少年施設にかかわる、このような政策的判断についてはさて置くとしても、そこで問題となるのは、青少年施設の再編成や廃止がすすむなかにあって、それに代わる新しい青少年施設の構想が示されなかったことである。その結果として、大袈裟な言い方になるが、これまで何百年も続いてきた青少年施設の歴史的系譜が途絶えかねないという事態を迎えることになったのである。

そして、青少年施設のこのような空白期に、居場所タイプの青少年施設が全国各地に分散的に誕生した。居場所タイプの青少年施設がひろがる動きに、行政の青少年施策は正面から対応できなかったが、それは、行政が近代のシステムとしての歴史的な限界をもっていたからだ、といえるかもしれない。

２　青少年施設の現在

居場所タイプの青少年施設は、杉並区立児童青少年センター（ゆう杉並）をはじめとして、さまざまなものが誕生している。

広く知られたものをあげれば、勤労青少年センターを改組した、京都市南青少年活動センター、消防署の建物を改装した奥州市（旧水沢市）の子どもの居場所ホワイトキャンバス、民間スポーツセンターの撤退したあとのビルのワンフロアにオープンした調布市の青少年ステーションＣＡＰＳなど、多彩な事例がある。

また、青少年施設の従来の枠組みを超えたような事例もある。渋谷ファンインのように社会教育館（公民館）などの住民施設の一部を利用する活動、商店街の空き店舗や空き倉庫などを利用する活動、個人宅を利用する活動などである。

同じ時期に、住民の手によって“地域の居場所”と呼べるような、住民の集うところがひろがったことも付け加えておきたい。居場所タイプの青少年施設の場合と共通する社会的背景を想像することができる。

ここで、この間の神奈川県や横浜市の青少年施設の変遷をみると、どうだろうか。

神奈川県の場合、県立の青少年施設は宿泊型の施設を除いて市町村へ移管するという方針で再編成されたが、その後、神奈川県立青少年センターにおいて、県内のＮＰＯと協力して、ひきこもりなどの“生きにくさ”を抱える若者のために、青少年サポートプラザが誕生した。これは、居場所タイプの青少年施設といえるだろう。また、県内各地で居場所づくりと呼べるような活動が行われている。

横浜市においては、横浜市青少年交流センターが、旧横浜市勤労青少年ホームの建物を引き継いでオープンした。これは、居場所タイプの青少年施設が誕生した全国的動向を視野に収めて計画された施設であり、その点でとりわけ注目される。また、市内の地区センターやコミュニティ・スポットにおいて青少年の利用をすすめる活動が続いているし、横浜市の青少年施策において、空き店舗などを利用する中・高校生のための施設づくりが始まっている。このような事例に居場所タイプの青少年施設のひろがりをみることができるだろう。

ところで、住民施設一般の動向をみても、大型施設から地元のＮＰＯなどが運営するネットワーク型の施設へと転換している。今日なお大規模な住民施設は誕生しているが、もはや、そこに、この時代の先端的な状況をみることはできないのではないだろうか。このように考えると、居場所タイプの青少年施設の検討をとおして、青少年施設だけでなく住民施設一般の可能性を明らかにすることができるのかもしれない。

３　横浜市青少年交流センターに期待されるもの

以上のような検討を前提として、続いて、横浜市青少年交流センターについて考えることにしたい。

その誕生のときから、横浜市青少年交流センターには、二つの期待があった。

第一に、この施設が、一階の青少年交流スペースを基本とした、居場所タイプの青少年施設になることである。スタッフにも、特定の利用目的をもたない利用者が気楽に立ち寄り、居心地良く過ごすことができるように対応することが求められた。

この点については、今日にいたるまで、当初の期待に応える成果を着実に積み重ねてきたといえるだろう。今後の課題として考えられるのは、これまで蓄積されてきた成果を整理して問題を明らかにすると共に、これまで蓄積した成果を広く行政や住民のあいだで共有されるようにすることである。

第二に、この施設が横浜市内の新しいタイプの施設や活動のネットワークの結び目になることである。これには二つの役割が考えられる。一つは、既存の施設や活動を結びつけることである。もう一つは、行政や住民と協力して市内各所に居場所タイプの施設や活動をつくりだすことである。

このような期待があったことは、一周年に当たって愛称を募集し選定した経過にも示されている。原案の「フリーフラット横浜」を、カタカナをひらがなにすると共に横浜を野毛山へと変えた。居場所タイプの施設が一か所だけでなく、市内各所に誕生することを予想したからである。

この二つ目の期待については試行錯誤の途上にあるといえるだろう。地区センターやＮＰＯとの協力関係は個別にすすんでいるが、そうはいっても、全国的な知名度に比べて、足元の横浜市内においては、この施設の存在さえ広く知られているとはいえないのではないだろうか。わたしは、この五周年記念誌によって広く知られるようになることを願っている。

４　これからの青少年施設

最後に、青少年施設の今後の方向について、わたしの考えを述べておきたい。

一言でいえば、市区町村に、タイプの異なる複数の青少年施設を配置して、それらのネットワーク化をすすめるという方向である。青少年には、身近なところにある、利用しやすい施設が必要である。とすれば、単独の青少年施設で対応していくことには、明らかに無理がある。そこで、わたしが考えるのは、以下のような三つのタイプの青少年施設を配置するというアイデアである。

その一つは、青少年の日常の生活圏に配置される小規模の施設である（Ａタイプ）。二つ目は、これをバックアップする、一つあるいは複数の中規模の施設である（Ｂタイプ）。この二つのタイプの施設を基本として、これに加えて、もう一つ、市区町村の全域をカバーする、宿泊などの可能な大規模な施設が考えられる（Ｃタイプ）。

青少年の身近な日常生活の範囲に小規模の施設を配置し、それをバックアップする中規模の施設を配置する、そしてこれに加えて、宿泊も可能な大規模施設を位置づけるという構成である。

このなかでもっとも重要な役割を担うのはＢタイプの施設である。それは、このタイプの施設に期待される役割が、地域に点在するＡタイプの施設を把握し、新しく意味づけることを通して、青少年施設のネットワーク化をすすめていくことだからである。また、青少年の就労支援施設、障害をもつ青少年のため

の施設、外国につながりのある青少年のための施設などとの関係づくりも、このタイプの施設の役割である。

ネットワーク化というこのようなアイデアは、とくに目新しいものでもないだろう。これまでも児童館や公民館の配置で考えられてきた。しかし、それとはちがって、これらの施設を新設するわけではないというところがポイントである。行政の財政状況をみれば、新しい施設が建設される可能性は小さい。そのために無理な労力を費やすよりも、既存の資源を生かす工夫をするほうが実現可能性は大きい。それだけではない。既存の資源を前提としない行政施策は、一方的に上からかぶせる行政施策としての限界を免れないだろう。

このアイデアを横浜市の場合に即して考えると、次のようにまとめることができる。

Ａタイプの施設には、地区センターやコミュニティ・スポットなどの行政の施設、ＮＰＯの施設、企業の施設、個人の施設などが想定される。Ｂタイプの施設には、行政やＮＰＯなどの多様な運営主体の施設、横浜市が計画するユースプラザなどが想定される。今後、横浜市青少年交流センターも、青少年施設のネットワーク化がある程度すすんだ段階で、ここに分類される施設に落ち着くだろう。Ｃタイプの施設には、横浜市野島青少年研修センター、市の内外に位置する野外活動センターや少年自然の家などが想定される。

先に紹介した、横浜市青少年交流センターに期待される二つ目の役割とは、市内の全域にわたって、このようなネットワーク化を推しすすめることである。この点で、その存在は決定的に重要な意味をもつといわなければならない。

おわりに

高度経済成長に本格化した青少年育成の施策と活動は、大きな転機を迎えているといえるだろう。近代化の時代の次の時代の青少年育成とは、どのようなものなのか、これを明らかにするのが、わたしの関心である。居場所タイプの青少年施設のひろがりは、これを考えるために実に刺激的なテーマである。

このような意味においても、横浜市青少年交流センターの今後に期待されるものは大きい。計画の段階から、いささかのかかわりをもってきた者として、この施設に多くの人々の関心が集まり、今後の発展のための知恵が生み出されることを願っている。

◆参考資料

（１）山本一郎「青少年交流センターの可能性　―横浜市の青少年施設の歴史と協会の青少年育成事業の方向性―」（横浜ボランティア協会職員研究発表資料）
（２）久田邦明「青少年施設の現状と可能性」『湘南短期大学紀要　第８号』
（３）久田邦明編著『子どもと若者の居場所』萌文社
（４）久田邦明「はじめよう　子どもの居場所づくり」『かながわ☆子どもの居場所づくりノート　はじめよう　子どもの居場所づくり』社団法人神奈川県青少年協会

利用者アンケート**「もっと聞きたい！みなさんの声」**より（一部抜粋）

Ｑ１．ふりーふらっと野毛山との出会いは？

Ｑ２．あなたにとっての居場所はどこですか？また、ふりーふらっとってどんなところですか？

Ｑ３．ふりーふらっと野毛山にひとこと.

・友達が使っていた／家、大好き♡／居心地が良いです（保土ヶ谷区・10代・女）

・近いから／気持ち良く貸してもらえるので／申し分ないです、少しキレイだと尚良いです

（西、中区・60代以上・男女）

・中央図書館の自習室が空いていなくて来ました／いつも演奏室を利用しています。グランドピアノのある公共施設はとても少ないので貴重な場です／これからも気軽に来れるアットホームな「ふりーふらっと」でいて下さい（神奈川区・10代・男）

・運命／第三の家／いつもありがとうございます！（磯子区・10代・女）

・『フラダンス』の練習を通じて出会いました／ここに集い仲間と色々な話し合いができ心の憩いを得る場所です／緑が多い環境に恵まれ従業員の方々の気配りも良く安心して通えます／１階ロビーで時折目に余る行為の若い人を見かけます。夏休みにこういう人たちの溜り場所にならないよう願います（60代以上・女）

・5年前／自分がここにいたいと思うところが居場所です、いろいろな人たちがたくさん集う場だと思います／いつもありがとうございます。これからも子どもたちの良き集合場所であって下さい（20代・女）

・高校白書2000の練習／友達・家、温かいところだと思います、いつも親切にしてくださってありがとうございます／お世話になっています、いつもありがとうございます、今後ともどうぞよろしくお願いします（都筑区・10代・女）

・インターネットで検索して知りました／とてもアットホームな施設で、顔が見えているというところがとても良いと思います。安心ですしね。高校生が一生懸命勉強していたり、スタッフの人と楽しそうに話す小学生の姿を見ると少しほっとします／25歳未満は無料というのは驚きと共に大変ありがたく思っています。なかなか探すのが難しい格安（というかここは無料ですが）稽古場がこのように身近にあることに感謝しつつ、このような環境をこれからも維持できると嬉しいです（西区・20代・女）

・「Do館」と呼ばれていた頃から10年以上のつきあいです／市民に活動場所を提供してくれる場所、他の施設に比べて利用しやすい施設（利用申込方法が良い、活動内容について寛容なので音を出す活動がしやすい／利用者に対して寛容なのはありがたい部分もありますがもう少し目を配って厳しくして欲しいと思う面もあります。例えばゴミの放置、利用した部屋の掃除をちゃんとしていないドアを開けたまま利用しているなどの部分が目に余ると思います。時々巡回し利用後の部屋のチェックなどが必要では　（瀬谷区・30代・女）

・スタジオがあると聞いてやってきた／居場所はわかりませんがふりふらは第2の我が家／これからもよろしくお願いします（南区・10代・男）

・友達と来たこと／家、友達がたくさんいる／これからもがんばってください、よろしくお願いします

（西区・10代・女）

・2 年ほど前から植物画愛好会の場として使用しています／時々子どもの声が聞こえて楽しみを広げてくれる場です、ここに来ると皆に逢えて楽しい居場所になり会話も弾みます／パーキングがもっと欲しい（南区・60代以上）

・坂を上っていて見つけた／稽古場、元気が湧く／もっと活力、もっとアピール、もっとでっかく（栄区・女）

・5、6 年前に初めて来ました。調理か何かで一度来た覚えがあります／音楽スタジオや和室をこれからも使っていきたいです。緑の多い所で子どもが多いと感じます。野毛山動物園が近いと思います／これからも使わせていただきますのでよろしくお願いします（西区・30 代・男）

・友達が教えてくれた／心地良いところだと思います／いつもありがとうございます（磯子区・20 代・男）

・自宅が近い／利用しやすい公共の場／いつもありがとうございます、これからもお世話になります

（西区・20 代・女）

・サークルで以前からお世話になっていた／駅からは遠いですが通いなれた良い場所です、大変来やすい（気やすい）ところです／これからも明るいふりーふらっとを目指してください（戸塚区・60 代以上・男）

・中央図書館で知りました／なくてはならない場所／ありがとうございました（西区・30 代・男）

・なんとなく／なごむところ／いいですね（戸塚区・30 代・男）

・中学校が近くてよく来てた／ふりーふらっとは良いところだぁ／これからもよろしく（西区・10 代・女）

・仕事で／5 周年おめでとうございます（港南区・20 代・男）

・友人の紹介／上達のための練習の場、静かで良いと思う　（中区・60 代以上・男）

・ピアニストの友人より／自由・安い・文化／マイクが演奏室でも使いやすいといいナー（旭区・30 代・女）

・演劇で練習場として／活動の拠点／特になし　（青葉区・20 代・男）

・前身の横浜 Do 館の時から利用して 10 年以上のお付き合いになります／格安で練習させてもらえる練習場、とても良い感じだと思っています、気軽に利用できて中身も必要最低限のサービスを利用できる貴重な場所だと思います、スタッフの皆様も良い感じです／音楽スタジオを利用していますが 1 コマ 2 時間という利用の仕方をもう少し融通のきく形にしてもらえたらなあと思っています、理想なのは 30 分単位での予約ができることです（Do 館の時代にはそれができていた時がありました）、それが無理なら 1 コマ 1 時間または 1 時間半になれば良いと思っています、個人練習で 2 時間というのは少々多い感じもあるからです、またその分多くの方が利用できることにもなると思います、将来的にはネットで予約状況確認・申し込みができたら最高だと思います（港南区・30 代・女）

・インターネット／職員の対応も良く楽しく利用させていただいています／いつもありがとうございます、今後もよろしくお願いします　（川崎市・20 代・男）

・歌の練習ために安心して声を出して勉強できる場所を探している時に知人に紹介されました／私の居場所は本のある所・音楽できる所・友人知人のいる所・時には一人になれる所・うちの台所･･･実は場所は決まっていません、ふりーふらっとは安心して勉強できる所です、心からありがたいと思っています／他の市に住む人などに聞いてもこんなに設備の揃っている所で安くお借りできる所はありません、大切にしていきたいと思っていますので利用者にも使用後のお掃除などもっとしっかりとやってもらえるようにチェックしてくださっても良いと思います、予算が許せば掃除機をもっと使い易いものにしてくださるとみんなやるんじゃないかな･･･、スタッフの方々が明るく皆さんとても感じが良いのでいつ伺っても良い気分です、これからもよろしくお願いいたします　（西区・50 代）

・勤労青少年センター時代に和室を利用、そのまま同じ場所を利用／居場所は我が家、ふりーふらっとはサークル活動に利用／使いやすく助かっています　（神奈川区・50 代・男）

・ＹＨＭＦ／スタジオ及びＹＨ打合せ場所及び自習室♡大好きな場所です／これからもお世話になります

（東京都・10 代・女）

・図書館でチラシを見ました／家、ふらっと来れるところ！／これからもよろしくお願いします（戸塚区・10 代・女）

・秘密♡／ふりふら／大好きです　（川崎市・10 代・女）

・ＹＨＭＦ／ふりーふらっと、あい／これからもよろしくお願いします（金沢区・10 代・女）

・10 年以上前・Do 館の頃から／僕の行くところはその都度僕の居場所になるのです、僕の居場所を提供してくれる所です／地区センターが次第に使いづらい施設になっていていますのでふりーふらっとはより利用しやすい施設を目指してがんばってください（瀬谷区・30 代・男）

・ダンスの例会で使用させていただきます　（50 代）

・近くに知り合いが住んでいたので／出会いの場／フレンドリーで良いです（茅ヶ崎市・20 代）

・子育てサークルの場として使用していた／子どもとママが楽しく過ごせる安全なところ、いろいろな人が出会うところ／いつまでも憩いの場所として続けて欲しいです（神奈川区・30 代・女）

・名前は違っていますが子どもの頃から知ってますし他の方もエルパイネにお稽古をしに来ていましたのでその時から知った／気楽に楽しめる所です／料金が高いのが難（旭区・50 代・女）

・友人の紹介／スタッフのみんながとても明るく良い人たちです、これからもよろしくお願いします

（旭区・10 代・男）

・お世話になっている息子から聞きました／集中して稽古できる場所、職員さんも皆さん親切です／とても良いところです（中区・50 代・女）

・お稽古場所を探していてその存在を知り利用させていただくようになりました／居場所は家、ふりーふらっとは「お稽古の場」かな／駐車場をもう少し充実いただけるとうれしいなと思います（西区・40 代・女）

・ＹＨＭＦ／地球、ふりふらはぞうさんミルクティー売っている所、ラーメン 150 円／建物（鎌倉市・10 代・女）

・ＹＨＭＦ／友達のいるところ、みんなに会えるところ／これからもＹＨＭＦスタッフ一同をよろしくお願いします、いつもうるさくてゴメンなさい（鶴見区）

・去年のＹＨＭＦ／和室、すばらしいところ／これからも運営がんばってください（鶴見区・10 代・男）

・ＹＨＭＦ、ふりふらライブ／ライブハウス、生き生きしているところ／これからもフレンドリーなところでお願いします（金沢区・10 代・男）

・わいえいちＳＴＡＦＦになってから／野毛山動物園、ふりふらは憩いの場／これからも使いまくります、よろしくお願いします（金沢区・10 代・男）

・ＹＨＭＦというステキな音楽イベント♡／居場所はＹＨの友だち。ふりふらはＹＨの友だち･･･ん？／えっと･･･えーっと･･･ＳＵＫＩ♡　（港南区・10 代・女）

・ライブ／野毛山動物園／高校時代の青春をありがとう（相模原市・10 代・女）

・ＹＨＭＦ／バイト先、ふりふらは出会いの場だと思います／大好きです、いつもありがとうございます

（泉区・10 代・女）

・芝居の稽古で利用／仲間の中／お世話になってます　（中区・20 代）

・フラダンスの練習場としても利用させていただいています、場所は以前から知っていました／　好きなところをしている所、皆で集うところ／一般にも門戸を開いていただいてありがとうございます、これからもよろしくお願いします（戸塚区・50 代・女）

・コーラス練習でお世話になっています／練習には場所も良いし私たちにとってはなくてはならないところです／鍵の開け方閉め方が難しいです、椅子を運ぶのはもっとしんどかった！（西区・60 代・女）

・友達の紹介です／ピアノの前です、のどかでいい所だと思います／これからもよろしくお願いいたします

（中区・30 代・男）

・中学が近かったので／家や学校ですかね、アットホームでもう一つの家庭みたいです／これからも青少年のためにがんばってください、いつもお疲れさまです（西区・10 代・男）

・ＨＰで無料でお借りできる施設を探していて／とても使いやすく居心地の良い場所です／本当に使用方法がきちんと守れず申し訳ありませんでした、今後はしっかりと利用させて頂きたいと思いますのでよろしくお願いします

（金沢区・20 代）

・レクホールをお借りすることで知りました／レクホール、憩いの場／毎週練習の場を提供して下さるとっても大切な場所（東京都・10 代・女）

・子どものバトントワリングの練習のためにうかがいました／居場所・自分のままでいられる場所、ふりふら・子どもの成長を見られる場所／いつも利用させていただいてありがとうございます、いつか色々なイベントに参加してみたいと思っています（港南区・30 代・女）

・Do 館時代から知っています、会社勤めをしていた頃バドミントンの講座か何かを申し込んではずれた記憶があります、地元老松中卒の夫と西中卒の私です／ゲームセンターなどに集まらないでふりーふらっとに若者が集まっているところがいいなぁと思います、うちの娘は小学生ですが学校のお友達に会うこともあって皆利用しているんだなぁと思います／七夕やクリスマスなど行事にちなんだ催しが多く楽しいです（神奈川区・30 代・女）

・町でティッシュをもらって／いやされる／お世話になっています（多摩区・10 代・男）

・運命の出会い／憩いの場／これからもよろしくお願いします（金沢区・10 代・男）

・初めて見学に来た時にとてもフレンドリーに接していただき好印象でした／共通の趣味を持つ人々と時間を共有する所、まさにふりーふらっと野毛山です（西区・50 代）

・演奏室の利用者のアドバイスによる／居場所・書斎、野毛山・しばしの休息／いつまで誰もが気軽に立ち寄れる場でありますように（中区・60 代以上）

・昨年の夏に出会った／放浪の人なので定まった「居場所」はなし、ふりーふらっとは稽古場／マンガを充実させてください（緑区・10 代・男）

・自宅の近所の掲示板にサークルの会員募集があり参加することとになり知りました／居場所・家の外ですねイベント会場とか、ふりーふらっと野毛山・ここに来るまでの坂道がキツイので真夏や雨の日が大変ですが公園が近く何か調べたいことがでてきたら図書館が近いのも良いと思います／今後もよろしくお願いします！アートのイベントがあったら面白いかなーと思います（戸塚区・40 代・女）

・口コミ／ふりーふらっと全部、とても落ち着く／また利用させてください（青葉区・40 代・男）

・サークル活動／青年が多くて若い感じがします／環境が良いです（鎌倉市・20 代・男）

・卓球で利用させていただいていますが年金生活者が多く介護のお世話にならないよう予防のため運動に励んでいますので利用料減免していただければ助かります／週１回の運動の場で全てを忘れ楽しくエネルギーを発散させる豊かな空間です、住所に近くて親しみ易く交通費も少なくて幸いです／職員の皆さま親切で利用者の立場に添ってサービスに心がけて下さりありがたく幸せに感じています（西区・60 代以上・女）

・友人からの紹介／多岐にわたって人との出会い、縁が生まれ、素晴らしいコミュニケーションの場だと感じます／各部屋の音に対する気密性がもう少し欲しい（60 代以上・男）

・知人から教えられて／練習の場／助かります（中区・50 代・男）

・バンド／スタジオ／いいね♡　（海老名市・10 代・男）

・県立図書館で教えてもらいました／仲間と夢を実現する場所／いつもありがとうございます（鶴見区）

・人の紹介／卓球場、レクホール／楽しませてもらっております、健康増進、人の和（西区・60 代以上）

・職場が近くて案内をいただいたりしたことと友人が会場を借りていたこと／音楽の練習をしたりする場所としてとてもありがたいです／いつもありがとうございます（港南区・50 代・男）

・友達と来た／楽しい、落ち着く／ななちゃん！これ載せないで下さいね！！（西区・10 代・女）

・数年前、書道教室で初めて来させてもらいました／かたぐるしくなく居心地良し、安く使えて眺望の良いことも魅力（60 代以上・男）

・近所だから知っていた／ここです、いい人がいっぱいいます（南区・10 代・男）

・いつも便利に利用させていただいています。各部屋にホウキやモップ等の掃除用具を置いていただくとありがたいです。みんなできれいに使えると思います。また TEL 対応の悪い方が中に数名いらっしゃいます。顔が見えないだけに気分が悪いです（中区・30 代）

・運命でした☆／居場所・スタジオが好きです、ふりふら・憩いの場／これからも私たちのアイドルでいてください（港南区・10 代・女）

・友人の紹介／いやし／いつもありがとうございます　（磯子区・20 代）

・サルサのサークルに入っています、その時に利用していました／ふりーふらっと・使用しやすい、働いている方が親切／ありがとうございました、これからもよろしくお願いします（中区・20 代・女）

・便乗で／ここも私にとって第 2 のホームです／いつも Thanks　（青葉区・10 代・女）

・友人から聞きました／坂道！景色がとても良い所／毎月会場をお借りできてとても助かっています、ありがとうございます（港北区・30 代）

・友人に誘われました／人と心から話し合える空間です、職員の方がとても温かくてありがたいです／とても助かっています、ありがとうございます（30 代）

・友達／いいところ／がんばって　（中区・10 代・女）

・友人に教えてもらった／実家、使いやすい練習場所／いつも使わせていただけてとても感謝しています（鶴見区・20 代・女）

・練習するため／居合の練習場／子どもの時から徒歩 10 分の所に住んでいるけど子どもの時から何の建物だか分からなかった、もっとＣＭをしてはいかが（西区・30 代）

・姉の紹介／家／シンバルとハットがきれいでした、いっぱいライブして下さい、見に行きます（南区・10 代・男）

・生徒さんが紹介してくださいました／落ち着いて緑も多く環境に恵まれた良い所です／2 ヶ月に 1 回位でもいいですから良い映画（古くても良い）とかレコードコンサートなどもあったら嬉しいんですが（横須賀市・60 代以上・女）

・ＨＰ／気軽に利用できるふれあいの場所／これからもよろしくお願いします（港北区・30 代・女）

・夏期ボラ／大好きな所、友達がいる　（港南区・20 代）

・ダンス／安心して利用できる、有料スタジオよりも感じが良い／いつもありがとうございます（西区・10 代）

・ホームページ／居場所・学校、ふりーふらっと・使いやすくって便利な所／演奏室にもドラムセットを置いてほしいです！（大和市・10 代・女）

・動物園に行く際に見かけました（知人に利用方法をききました）／家、職場／地域に根ざしている感じがして良いと思います、子どもが暴れていましたがそれも良いかも、現代は騒ぐとすぐ怒られてしまうので（30代）

・社交ダンスの練習をするのに会場がなく困っていたらふりーふらっとができて以来ずっと会場を借りて楽しくやらせてもらっています／事務所の皆さん、受付のお姉さま、お兄様方、お掃除の皆さま、みんな親切にしていただいております、いつもうれしいです、みんな笑顔で声をかけていただき気持ち良く活動ができます／土日祝日以外、普段の午前のレクホールがほとんど空いているようなので我々一般の人にも使用料を少し安くして貸していただけたらと思います、いつも空いているのはもったいないなーといつも思っています（神奈川区・60代以上・女）

・紹介／良い場所です／良い場所だと思います　（神奈川区・20代・男）

・知人の紹介／お酒、悪くない場所／今後も続けてください　（千葉市・20代・男）

・よその劇団の稽古で来てから／いつでも借りることのできそうな助かる場所／これからもよろしくお願いします（横須賀市・60代以上・男）

・ホームページ／各種スペースがあり自宅でできないことができる所　（南区・30代・男）

・友人から／家、ともに／有意義な時間が過ごせました、ありがとうございました（戸塚区・10代・女）

・福女こら合唱団でお世話になっています／いつもありがとうございます　（緑区・50代）

・友人から聞いた／これからも利用させていただきたいです　（10代・女）

※メッセージ中に出てくるＹＨＭＦとは、「ＹＯＫＯＨＡＭＡ　ＨＩＧＨＳＣＨＯＯＬ　ＭＵＳＩＣ　ＦＥＳＴＩＶＡＬ」の略で、予選を勝ち抜いてきた全国の高校生バンドが８月の横浜アリーナで行なわれる決勝大会のため結集し、その頂点を競い合う音楽イベント。大会までの準備、そして当日の運営は高校生スタッフが携わり、広報活動、審査、司会、音響なども務める高校生バンドの祭典。交流センターは、このＹＨＭＦに事務所スペースを提供しており、準備期間を含め、日々高校生スタッフが多数来館していました。

【資料２－１】

交流センター開館時学校訪問調査結果　　２００３年２月七澤・富岡

■学校訪問結果

① ●中→校長先生
- 夏休み生徒会リーダートレセン（西区小・中合同）
- 部活は８割以上が参加　ただし全校生徒１６０名程度で部活動が１０あるので、活動場所がないのが現状である。
- 朝会で生徒に紹介してくれる
- 青少年モニターのお願い→4月以降訪問する

② ●中→校長、副校長先生
- 合唱コンクールの練習で土日に利用できないか
- 地区センターなどでたまっている生徒が迷惑をかけないかどうか心配。
  →まず職員が注意してほしい、それでもやめないようなら学校へ連絡してほしい。
  →生徒が不信感を募らせてしまう。
- アンケートの協力、いつでもＯＫ
- 学校で登録し、教職員も見学に来る

→すぐに効果が表れ、15時から18時くらいは老中の生徒であふれるようになった。
家が近く、少し遅くなってもすぐに帰宅できるため安心しているようである。
主に、ジュースとおやつを片手に漫画とPCに夢中。男子は大人数でバスケを楽しんでる。女子の方が元気がよい。

③ ●高／■高→校長先生
- 定時制があるので、放課後教室が使えない。→部活動や生徒同士で集まる場所がない
- 吹奏楽部→市内全域にいえることだが、音漏れの関係で苦情が多い。特に住宅街ではパート練習（教室のため防音設備が整ってない）ができない
- 県内高校文化部の総元締め（高文連）＝事務局長　★高校先生
  →演劇・吹奏楽・軽音など文化部の顧問が集まるのでそこにＰＲすると良い。
- 部活に入ってなく、気の向くまま、自由に活動したい子にいいのではないか？
- 教員に知ってもらう（研究会や分科会）

④ ○高／□業高

⑤ ▲小学校→校長先生
- 小学校ということなので、主にフリースペースの説明をした。
  また、ポスターの「中高生」の部分は「みんな」に変更した。
- 学区が広い（伊勢佐木町や県庁のほうからも来ている）
- 国籍も様々。

【資料１】

平成１５年2月１２日

様

市民局　青少年部　青少年企画課長
横浜市青少年交流センター館長

横浜市青少年交流センターパンフレットおよびポスターの送付について

時下　ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

昨年12月、西区老松町に「横浜市青少年交流センター」が開館いたしました。

このセンターは、青少年が自由に過ごすことのできる「居場所」としての機能を備えたフリースペースのほか、スポーツが楽しめる体育館（12時半から17時半は青少年に無料開放）、部活動の打ち合わせ等に使える会議室などが備わっております。他にも、バンド練習や、合唱・吹奏楽ができる音楽スタジオ、演劇やダンスができる多目的利用室などがあり、生徒の皆さんの「やってみたいこと」を応援する施設です。

つきましては、同封のポスターにより、貴校の生徒の皆さんに広く周知していただきますよう、お願い申し上げます。

なお、利用方法などについてお問い合わせ等がありましたら、お気軽に下記担当までご連絡ください。

・ 送付部数　パンフレット　２　部
　　ポスター　　４　部

（連絡先）
〒220-0032　横浜市西区老松町25
横浜市青少年交流センター
（管理・運営　社団法人横浜ボランティア協会）
tel：241-0673／fax：242-0959
担当：七澤・富岡

第１回交流Cコーディネーター研修（2003/02/06）

【ねらい】

今後の研修をより良いものにするために、方向性を確認し合う。
事例を元に、ロビーワークについての考えを発表し、各自の手法についてもう一度確認し、ふり返る。

【形式】

事例を元にしたディベート方式によるグループワーク

【プログラム】

導入（レク）【富岡】※硬くなってる頭をほぐしましょう！

・～10:40　今後の研修について　・日程の確認　・概要について
・10:40～　グループワーク
・11:30～　最近のロビーワークから（事例発表）
・11:55　まとめ・次回の確認

◆グループ　A：石井、大澤、松田、中居、（富岡）　B：石上、桜井、村上、森澤、（七沢）
C：大槻

① 今後の研修について（10分）

・開催日　原則2月に1回（　　）月
第（　）（　）曜日　時間（　　）

・内容　①ロビーワークをより良い手法で行なうための必要知識等の習得
②最近の事例についての意見交換
③その他必要と思われる事項についての研修　など

・進行について
コーディネーター役（議事進行）は、毎回Co.（と職員）が持ち回りで行なうこととします。

・議題について
- 研修内容は職員と担当Co. が決定します。
- ロビーワークの事例で、議題として取り上げたいことがありましたら、事前に職員までお知らせください。（HOTな議題お待ちしています）

・その他　研修は業務扱いとなります。勤務時間中にあたる場合は、時間中の参加となります。

- 親が働いている人が多いので休日に参加できるイベントは大歓迎
- 町内の人も見る掲示板にポスターをはってくださる。

⑥ △小学校→校長先生
- 空教室が多いので、部活動等には使う必要はないと思う
- 子どもの数は少ないが、みな天真爛漫なのが東小の特徴
- ほとんどの生徒が通り道

② グループワーク（50分）

目標　『ロビーワークの事例を元に自分の考えを聞いてもらう、仲間の考え方を知る』

【確認しておきたいこと】

- ***“解決法”を求めるものではありません。色々な意見を聞き、各自が立ち止まって考えることにより、今後のロビーワークに活かすことが目的です。***

★ロビーワークとは（参考）

フリースペース（ロビー）において、青少年たちとコミュニケーションを取りながらニーズを探ったり、仲間づくりのサポートや社会性を身につけるなどの自立支援、様々な相談に乗ったりするなど、広い意味での“青少年のサポート業務”を指します。

⇒「ただ世間話しているだけで、周りからは遊んでいるって思われないかしら…？」

いいえ。ロビーワークは立派な『仕事』です！青少年との何気ない世間話から、パーソナリティが見えてきます。また、彼らのおかれている状況や環境が見えてくることもありますし、話すことでこちら（自分）も理解してもらうことができます。

★グループワーク（30分）

下の事例を読み、どんな対応が適切なのか？（自分だったらどうするか）についてグループで考えてみてください。（思いついたことを紙に書き出す、などどんな方法でも構いません）

◎事例

１）　中学生の男女グループが団体登録を申請。「色々な遊びを楽しむ…」といった登録内容。以前喫煙の疑いが何度かあったグループで、Ｃｏ.間でもよく話題に上る子どもたち。何となく心配だな…と感じています。登録を受理する際、どのように対応しますか？

２）　受験シーズン真っ最中。利用者の大半が勉強目的の来館者だ。１０１号室の空気も心なしかピリピリしている様子。そこへ、友人同士で勉強に来たグループが騒いでいる、と苦情があった。事情を聞いてみると、「勉強の質問をしていただけ。しかも小声で周りに気をつかったくらいだ。だいたい、１０１号室は私語厳禁なの？」と逆に聞かれてしまいました。どのように対応しますか？

★まとめ、発表、意見交換（２０分）

③　最近の事例から（２５分）

★A 中、B 中3年生の件

以前からＡ中、Ｂ中3年生の生徒による喫煙行為（の疑い）が繰り返されてきました。ある程度特定はできていたものの、現場を見ることがなく、きちんと注意することもなく時間が過ぎてしまっていました。

受験を控え彼らの心も不安定になってきたようで、今年に入ってからは Ｂ 中生も交え、集団になって騒いだりする行為が目立ってきた。また、Ｂ 中生が飲酒してから来館する、Ａ 中生が後輩を威圧する、など、他の利用者からも「居づらい」等の声が聞こえるようになり、中には「どうなっているのか」と保護者から問合せもありました。さいさんの注意も全く聞き入れない状態であったので、「これ以上エスカレートしてしたら、手遅れになってしまうかもしれない」と判断し、2月3日朝、両校に電話。「交流で今、こんなことが行なわれている」との事実だけ伝えました。すぐに両校の生徒指導教諭が来館し、館長から「このことで、彼らに“センターに行くな”ということだけは絶対言わないでほしい。マナーを守りながら遊ぶ分には何ら制限はない。また来て欲しい」との旨を申し添えました。両校からも「今は生徒にとっても非常に大事な時期なので、慎重に見守りたい。今後も何かあったら学校に連絡をしてほしい。その時はセンターから通報があったから来たというのではなく、センターにも校外パトロールの一環で寄ったということにして対応する」とのお話しがありました。その後、Ｂ 中生徒3人が「これからはマナーを守って利用する」と謝罪に来た。また、Ａ 中の1年生からは「3年生から“この間は、色々あってムシャクシャしていた。怒鳴ったりしてごめんなさい」と謝罪があった、という話しがありました。

その後、色々とあったが、男子生徒は比較的落ち着いている様子を見せています。しかし、今後も受験、卒業と控えているので、慎重に見守っていきたいと思います。

★A 中女子3年 C さんの件

ほぼ毎日閉館時間までいる3年生女子。「家にいてもつまらない」とほとんどの時間を交流で過ごしている。センターで他校の男子生徒と出会い、交友関係を続けるようになった。また、最近では団体登録し、男女で部屋を利用することになった。喫煙や飲酒の疑いがある男子生徒だったので、スタッフもかなり心配し、時々見に行くなどの措置を取ったり、暗に「気を付けて」などの声をかけていた。それを「うざったい。疑っているのか」という風に捉えたらしく、最近はわがまま放題、常にイライラしているように感じられた。また、非常に流されやすいように感じられたので、このまま悪い方向に引きずられてしまうのではないかと危惧していたところ、上の件でもその現場にいたので学校にも「センターに毎晩遅くまでいる、最近他校の男子と部屋を借りて遊んでいることがある」ということを伝えた。次の日、先生に呼ばれ動揺したようで、「私たちを追い出そうとしている、迷惑なのか」と荒れていた。

次の日母親がセンターに来館し、「今は高校の推薦も決まり、大事な時期。かなり生活も荒れているようなので、落ち着くまではセンターには来館させないので、スタッフも彼女を入れないでほしい。」との話しがあった。その後、館長が学校へ相談した結果「家庭の方針なで協力する。彼女が来たら、まずお母さんから来てもいい、と言われているのかを確認し、話しがありそうなら聞く。ただし、来てもいいといわれていなければ、事情を話して、まず母と話し合うように説得する。そして帰す。ただし、彼女の状況を見ても、今、疎外感を感じさせてしまうようなことはさせないよう気を付ける。」という対応をすることになった。彼女の母親からは、「娘が来たら電話をくれるように」と番号を渡されている。

次の日、彼女から電話があった。「今家にいる。お母さんが来たと思うが、どうしてもセンターには行きたいので、お母さんと約束をした。8時には帰ることと、必ず電話を入れることだ。そしてお父さんに話していいと言えば、明日からまた行きたい。」と言っていたので「それでは、お母さんが心配をしていて、何か電話をくれと言われているので、また来られることが決まったのなら、確認の電話を入れるよ」と返答した。

対応が確定し次第お伝えしますが、彼女が乗り越えなければならない時だと思うので、みんなで協力していきましょう。

④まとめ・次回の確認

※レポート（今年度をふり返って）　〆きり3月2日（火）　提出先：七沢　・今後の Co. 会議・研修で発表することがあります。

交流センターニュース 号外

2003/10/23 Kouryuu-NewsPaper

レクホール・ワークルームの使い方について みんなはどう考えた？ センターはこう考えました

オープンして１年がたち、たくさんの人たちが４階に遊びにきてくれました。

その中で***「道具を大切にあつかわない」***（卓球やバドミントンのラケットをわざと壊す…）***「他人に迷惑をかけるようなキケンな遊び方をする」***（たくさんの人が遊んでいる中で本来蹴ってはいけないボールを蹴って遊ぶなど）***「自分で出したゴミを片付けない」***（フリータイム終了後は空き缶やお菓子の袋があちこちに散乱…）***「レクカードを出さずに遊ぶ」「かくれてタバコを吸う人がいる」***……など、残念なことに最低限のルールやマナーを守れない人がいます。

スタッフは、見かけるとそのつど声をかけて「守ってほしい」ことを伝えてきました。しかし、最近は***「ルールや注意を守れない人」が多くなり「きちんと安全に使っている人」が楽しく遊べない状態***になっています。

そこで、もう一度みんなが「どうしたらいいのか」をじっくりと考えてほしいと思いました。使っている人全員が「自分なりの答え」を考える時間として、レクホール・ワークルームを１週間閉めました。

今回はみんなの意見を聞くために、アンケートを実施しました。他のみんながどんなことを感じ、またそれについて交流センターがどう考えたのかをお知らせします。

みんなはこんなことを考えていました

アンケート（みんなの意見）集計結果

今回のことを受けて、「レクホール・ワークルーム」の使い方を、みんながどう考えているのかを聞くためにアンケートを実施しました。

たくさんの人が協力してくれ、色々な意見が寄せられました。アンケートを書いてくれた人はもちろんのこと、スタッフをはじめセンターを利用するすべての人がこれを機会にもう一度、みんなが「どうすれば楽しく使えるか」を考えるきっかけになれば良いと思います。

アンケートに協力してくれた人たち、どうもありがとうございました。

※ アンケートは、みなさんが書いてくれたままのせています。また、ロビーにも貼り出してあります。

意見箱と壊れた用具を展示し、これについて考えてもらいました

入り口にアンケート箱を設置しました。

集計は次のページから

NEXT⇒

質問①「壊れた道具を見てどう思いましたか？」

「悲しい…」（３人）　「壊した人の気持ちがわからない」
「どういう使い方をしていたのか？」（2人）　「使いたくなくなる…」
「壊した人に反省してもらいたい」　**「ボロボロ」**
「すごい使い方をしているのが分かりとても残念に思う」
「ヒドイ！残酷」（6人）　「誰がこういうことをしたのだろう？」
「壊していない人がいやな思いをする」
「かわいそう」　**「複雑…」**　「最悪」「悲惨」（３人）
「壊していないのに人のせいにするのはやめて欲しい」
「交流センターの道具はちゃんと大切に使うべき」
「壊したら弁償する」（２人）　「とてもヒドイ壊れ方です…」
「故意にやったとしか思えない」　「壊すのなら来ないでほしい」
「こんなに物が壊れているなら、その人はもうレクホールを使わないようにする」
「このように壊れたものを見せ示すのは良くない」
「わざとじゃない人がいたらかわいそう」　「壊してしまってすみません」
「すごくうれしい」　**「どうしてこうなるのか不思議」**
「大切に扱っていればあんなにならないと思う」
「こんなことして（アンケートや道具の展示）楽しいですか？」
「交流センターのもの（他人のもの）を壊したりして最悪」
「金額のものではないが高価なものでなくて良かったと思う」
「あのような使い方はひどい。自分も注意しよう」

質問②「レクホール・ワークルームが使えなくなったことをどう思いますか」

「つまらなくなった」　「バスケも卓球もできなくなって、ちょっとさみしいです」
「早く開けて欲しい」　「最悪」（３人）　「悲しい…」（４人）
「とても残念です。また使えるようにしたいです」（2人）
「また卓球とかやりたい」　「ふだん何気に使っているホールが使えないとヤダ」
「使えなくする、という方法は良くない」

「お菓子を食べるのを禁止する。ボールをなくす」
「もっとみんなで仲良く使いたい」
「一部のマナーの悪い人たちの為に他のひとが困る」
「大変不便に思います」　**「残念」（3人）**　**「楽しかったのに・・・すごくイヤダ！」**
「自分にとっても“イヤ”だし、他の人も使えなくなって残念だと思う」
「また使いたい」（４人）　「イヤダナー…」
「使えなくなって他の人に迷惑だと思う」
「早く問題を解決して遊びに来たい」
「ゴミを捨てたら罰金５,０００円！」
「利用者に悪いところもあるけれど“すべて利用者が悪い”というのは違うと思う」
「もったいない」　「つらい」　「とてもイヤだ」
「ウザイ」（２人）　**「ムカツク」（3人）**

質問③「どうしたらまた使えるようになると思いますか？」

「乱暴な人は入れないといい！」　「みんなで仲良ルールを守る」
「きちんと注意しあって遊ぶ」　「大人がついていく」
「普通に考えて、みんなが大事に使えばいいじゃん」
「係員の人が部屋で見張る」　**「壊したりしたら、もう来させない」**
「そういうバカな人がいる限り、使うのはムリ！」
「ひとり一人が道具を大切に使ったり、ゴミを捨てたりしないように心がける」
「交流センターの人が早く開ければいい」
「これからは、そういう人は使えないほうがいい」
「みんなでルールを守る」　**「みんなが気をつける」(2人)**
「みんなでルールを守り、物を大事に使ったらまた使えると思う」

「みんなが約束を守る」(3人)　「こわさないようにする」

「心当たりのある人が名乗りでるまで使用禁止にする」
「壊した人に壊したものを修理するところを見て欲しい。壊れたものを修理するのがどんなに大変かわかってもらいたい」
「物を大切にする」(2人)　**「さあー？」**
「ルールを書いてレクホールに貼る」　**「きちんと使ってルールを守る」**
「使い方をよくする」　「直す・買う」　**「壊れたものを直す」(2人)**
「今度から気をつける」　**「みんなで呼びかける」(2人)**
「交流センターでルールを決めて楽しく使えるようにする。また、きちんと注意しあって遊ぶ」　「ゴミとかを片付ければいい」
「みんなで募金して、そのお金でなおす」
「ゴミを置きっぱなしにしないでちゃんとゴミ箱に入れる。後片付けをする」
「しっかり反省して、道具などをきちんと使う」

質問④「センターに言いたいことがあれば書いてください」

「早く卓球をやらせてください」　「ごめんなさい」
「はやくあけろ！」　「ちがう部屋にすればいい」
「なぜその時に注意しなかったのかが疑問に思う」
「ガラスを割った人で思い当たる人がいます」　「やってない人の身になれ！」
「バカ」　**「早く使わせて！」(2人)**　「無駄なことすんな！」(2人)
「何でいちいち遠まわしなことすんの？」　「もう１回チャンスを・・・」
「最悪」　**「意見箱をやめてください」**　「また再開してほしい」
「もっと大切にするので使わせてください。できる限り呼びかけます」
「寒天こんにゃくのりんごかぶどうを出して欲しい」
「センター側が被害を受けるとこういう行動を取るのに、利用者が同じ立場になると軽い思いで応じてくれなかったり…。利用者が全部悪いなんて犯人扱いしないでほしい」
「はや<４階が使いたいです」　「管理しろ!」　「見張りでもつければいい」
「早くワークルームを使わせてください」
「また体育館を使わせて欲しい」(３人)

…アンケートを元に、センターはこう考えました

「今後のレクホール・ワークルームの利用方法」

今回の件にたくさんの感想や意見をよせてくれてどうもありがとう。
センターでは、みんなの思いを考えて、今までのことをふり返り、これから先４階をどうしていけば良いのか考えました。
これからも、みんなが楽しくセンターで活動できるよう考えたのは次のことです。

①部屋の使い方について

今までは、自由に、やりたいことができるように遊ぶ種目を決めていませんでした。みんなは、次から次に遊びを変えていたため、片付けようと思っていた用具やゴミをうっかり片付け忘れてしまっていたと考えました。また、ボールで遊びたい人、バドミントンをしたい人などが同じところで遊んでいてキケンな思いをした人も多くいると思います。

これからは、***日ごとにレクホールで遊ぶ種目を決めることにします。***最初はセンターで案を作りますが、使ってみて「こうした方がいい」と思うことがあったらどんどん意見を言ってください。

また、遊べる種目を決めるので、今まで他の種目とやると危ないので***ワークルームでやっていた卓球をレクホールでやれるようにします。***

◎ ワークルームではスポーツはできません。（今までのとおり印刷等の軽作業ができる部屋）
◎ できる種目は曜日によってちがいます。予定は貼り出しておきますので確認して下さい

②用具の使い方について

今までは、貸出時間に自由に用具を使うことができました。そのため、正しい使い方を知らない人がバドミントンのラケットでボールを打ったり、バレーボールをけとばすなど、壊す気がなくても用具が壊れてしまうことがありました。

これからは、***皆が用具を正しく使えるよう、センターのスタッフが対応することにしました。***

◎卓球台やボールなどは、そのスポーツができる日に、センター側で用意します。

③遊べる時間とレクカードについて

①②のようにする為に４階に受付を作ります。スタッフが必ず一人受付にいるようにしますので、***自由に遊べる時間を午後1時半から5時半までに変更します。***

また、４階に受付ができるので***レクカードを入れる場所は4階に変更します。***

④今回のことでセンターが考えたこと

センターにたくさんの人が来てくれるようになって、色々なことがありました。そのことに対して周りの人がどう思っているのかをあまり聞く機会がなかったことを反省しています。

今回、みんなの意見を聞いて、もっともっとみんなの声を聞いていかなければいけないと思っています。４階の使い方もこれから先ずっとそうするのではなく、もっと良い方法があればどんどん変えていこうと思っています。

これからも、意見箱を置きますのでどんどん意見を書いてください。みんなからの意見は、青少年委員会や運営委員会に知らせていきます。“みんなでセンターを楽しい場所にしていこう！”

【資料５－１】

２００３年度（初年度）Co 業務ふりかえり

０３年度振り返りメモ（まとめ）　※アンケートとヒアリングにより出していただいたものをまとめました。

◎ **今年度の成果・努力した点は何でしょう**

- スポーツを通じて交流ができた。しかし、青少年の方がどんどん上手になり、相手にしてもらえなくなり、嬉しいような淋しいような･･･。また、青少年の心の動き、とくに中学３年生の心をつかむのは難しかった。今後の課題です。小学生以下、特に女子に対しては女性Ｃｏ.のような「やさしさ」を出すのは難しかった。
- 来館者が飛躍的に伸びた。Ｃｏ.同士で言いたいことが言える関係が整ってきた。ロビーワークが自然にできるようになった。今年度は自分の中では、すべての点に努力したつもりである。
- 日々の業務やロビーワーク、イベントなどに、職員とＣｏ.が一丸となって取り組むことができた。
- ロビーワークに関しては、あえて積極的に働きかけずに相手が必要な時、話したい時には話しかけられるように待つ、姿勢で取り組みました。
- 事故が起こらぬよう、全員で気を付けたので大きなケガもなく良かった。また、挨拶などコミュニケーションを取るように努めた。無遅刻・無欠席!元気に勤務することが出来ました。
- 初年度ということで、通常業務の徹底遂行と利用者の名前を覚え、コミュニケーションを図ることに努力しました。子どもたちから気軽に声をかけられたり、甘えの言葉を聞くと、相互理解が多少なりとも功を奏しているようだ。
- なかなか難しかったが、子どもたちにきちんとした社会のルールを守らせること、また、かわらばんが発行できたこと、そしてイベントが実施できたこと。
- ロビーワークに関しては、できるだけ子どもたちの名前と顔を覚え、声をかけるようにしました。いつでも話し掛けてもらえるよう気持ちをオープンにしておくようにしました。受付業務では、利用者さんとコミュニケーションをとりながら、気持ちよく使っていただける、また受付ミスのないよう心がけた。

◎ **今年度の業務の反省点（課題）は何でしょう**※ロビーワーク、通常業務等すべてを含む

- たくさんのイベント、色々な事件、目の前のことをひとつずつクリアしていくのに精一杯だった
- イベントなどに青少年を活かすことが少なかった
- いつも元気で側に来てくれる一部の子ばかりに目が向いてしまう
- 施設利用票やレクカード記入のルール徹底
- 会議室の目的変更
- イベント参加費の徴収
- 一人でも多くの子どもたちの名前を覚えたい。名前を覚えられなかった子に淋しい思いをさせてしまった
- 盗難事件が続き、とても残念に思った
- 事務処理ではミスのないように心がける
- 男子中学生に、今一歩踏み込めなかった。情報共有がなかなかできなかった
- 業務が多岐にわたり、事なかれ的になっていることも多かった
- 青少年委員会の自主性を十分引き出すことができなかった
- スタッフ間の壁がまだまだ厚い

【資料５－２】

- 毎日来てないので、情報が途切れがちであった。

◎ **今後の業務に反省点や課題をどう活かせそうですか？**（心がけること、力をそそぐこと等）

- 自分の子育ての中で、受験をサポートしてきたことを活かそうとしたが、うまく対処できなかった。
- もっと恒常的な講座等を設けて、青少年との接点や青少年同士のつながりを見つけていくことから始めたい。
- 利用者同士が、ここでもっと知り合えるような投げかけをしたい。
- 職員とＣｏ.の分掌を明確に
- 利用者へのかかわりでは、個々のケースの取り組みの情報交換を。
- 無理せず自分の出来ることから少しずつ働きかけること。
- 利用者が安心できる安全な居場所を提供できるよう、盗難がなくなるよう努めたい
- 窓口業務に関しては、忙しい時ほど一呼吸おいて仕事を進めたい
- イベント重視の運営をしていきたい。
- 魅力あるスタッフとなるよう、子どもたちの気持ちを理解し、自由に言葉を交わす雰囲気づくり。
- 利用者間のコーディネートと、彼らに発表の場を作ること。
- １年の流れがわかったので、目先のことばかりにとらわれず、長期的な見方・考え方をしたい。
- 青少年委員会や青年ボラが中心として活躍するイベントを盛り上げたい。
- 一人でポツンとしている子やコミュニケーションが苦手な子に目を向けていきたい。
- 利用者とスタッフの年齢差があるのが魅力でもあるので、それを活かした活動がしたい。

◎ **自由記入欄**（意見・希望・自己ＰＲなどなんでもどうぞ）

- 子どもたちの言葉の乱れが気になる。
- ふりーでふらっと立ち寄れる居場所となるよう、仕事に励みます！
- 大人から子どもたちへの押し付けは長続きしないので、青少年委員会の活躍を期待し、青少年の青少年による青少年のためのセンターをバックアップしていきたい。
- 運営委員会や青少年委員会とのコミュニケーション。
- みんなの掲示板をつくる
- Ｃｏ.の意見を取り入れてくれる職員に感謝！
- 来年度のモットーは“めげない”。利用者の塾の先生が何度もスッポかされたのに、「これくらいでめがていたら、あの子たちにつきあえませんよ」と言っていた。感動した。私は何度めげたり落ち込んだりしたことか。来年度は、何があってもめげずに頑張りたい。
- 職員やスタッフのチームワークが大変良い。互いに理解し、協力しあえる環境は最高です。新しい方とも一緒に仲良く、この意義ある仕事を頑張っていきたいです。
- 皆さんにカバーしてもらい、協力しあって楽しい雰囲気で業務にかかわることができた。
- 開館当初にあった大きな夢をひとつずつ実現していきたい。
- フリースペースにカフェをオープンし、店員になりたい！

【資料７】

パソコンの使いかたについて（重要）【再】

近ごろ、パソコンの利用の仕方が悪くなったと感じています。

【理由】

①チャット、メールなどで長時間独占してしまい、本当に使いたい人が使えなくなっている状態。

②交替をしてほしい、と声をかけられても無視をしたりなどのトラブルが相次いでいる。

③禁止されているアダルトサイトを見ている人がたくさんいる。

④乱暴に扱ったり、食べ物・飲み物をこぼすなどをして壊してしまう（実際にもう壊れた）。

⑤危険なサイトにアクセスし、またそこで「荒らす」などの行為をしている人多数。

以上のことが改善されてない、と判断した場合は、パソコンを撤去します。

一人ひとりが気をつければ、きっと良くなるはずです。　　2004年5/17　交流センター

【資料６】

テレビゲーム機の設置について　2004年3月　七澤

青少年から「ゲーム機を設置してほしい」との要望は非常に高いです。また、開館して1年経ち、ハード・ソフトともに利用者も熟知しており、利用方法も恒常化し、ニーズに対応しきれてない状態といえます。

ニーズに応えるために、フリースペースへのテレビゲーム機を再び設置し、ゲームを一概に“悪影響を与えるもの”と考えるのではなく、「交流の手段」となるように、貸し出し方法を工夫し、設置を再開したいと考えています。

【昨年の様子】

★主に良い点

２月にテレビゲームを設置後、口コミで小中学生が多く来館するようになりました。

センターでの仲間づくりの手段として、レクホールでのスポーツが第一に考えられますが、青少年すべてが運動が好きで得意というわけではなく、実際に仲間に入れなかったり、レクホールそのものに遊びに行かない子も見られます。（現在も）

昨年のゲーム設置の際には、ゲームの得意な子の周りに人だかりができ、そこで他校の生徒との交流をかなり築くことができました。中には高学年が低学年を教えたり、大学生と小学生との交流のきっかけづくりの場となりました。

また、予想以上の反響を踏まえて、５月５日はテレビゲーム大会を開催し、大変もりあがりました。

★問題となった点

靴を脱いでのフラットな場所だったので、お菓子の食べこぼしやジュースなどのゴミのマナーの悪さが目立ちました。

また、接続が出来ない子が受付に助けを求めることが頻繁におこり、通常業務に支障をきたす場合もありました。（その件で、フリースペースにいる中学生以上が助けてくれ交流の場となった場合も多かったが）

交替の管理は青少年の自主性にまかせていた面もあり、１度トラブルで中高生がケンカになりました。

★なぜ置かなくなったか

８月から多くのボランティアが来ることになったので、双方向のコミュニケーションが取りづらいゲームより、ボランティアに接してほしいということで７月３１日に“一時的に”取り外しました。９月１日からは再開の予定でしたが、現在に至っています。

ねらい）①青少年の多様なニーズに対応するため　②新しい仲間づくりのきっかけとして　③ルールやマナーを勉強する手段として

貸し出し物品）

テレビ……1台　ゲーム（ハード）……2種（スーファミ・プレステ）　ソフト……10～15種程度（背ラベルをつけ、すぐにわかるようにする）

貸し出し方法）

◎　受付カウンターで貸し出す。（部屋利用者の貸し出しと同じと考える）

・　ハード2種はコード・コントローラーともにかごに入れておく。（貸し出す時は一式）

・　ソフトは、一覧表から（番号あり）選んでもらい、渡す。（1回につき2個まで）

→一覧表を作成し、窓口前、フリースペースに張り出す。（受付カウンターにも同じ物を作成）

貸し出し時間）

◎　1人1時間

・　受付票（ホワイトボード）に「開始時刻」「終了時刻」「代表者氏名」を記入してもらう。
終了時刻になったら（あくまでも自己申告）交替。

◎　終了時刻になったら、ゲーム機を必ず返却してもらう。（守られない場合はペナルティー【1週間貸し出し禁止】有）

【資料８】

ゲーム類（トランプなど）の利用について（アンケート） ０４0517

フリースペースには、ゲーム類が置いてあり自由に遊べるようになっていました。しかし、枚数がなくなったり、ゴミ箱に捨てられていたりなどがつづき、今は遊べない状態になっています。

どうすればまた遊べるようになると考えてますか？

１、おいてほしいゲーム

①将棋（しょうぎ）３　②囲碁（いご）２　③オセロ４　④トランプ６　⑤テレビゲーム９
⑥その他（中国ゴマ）

２、将棋のコマがなくなったり、トランプの枚数が足りなかったり、テレビゲームをそのままにしたり、ということが続きました。どうしたら、このようなことがなくなると思いますか？

① 受付で「かしだし票」に名前を書き、使用後はほかの人にわたさず、必ず受付へ返す。９
② 今までどおり、フリースペースに置いておき、自由に使えるようにするが、また、枚数が足りなくなったり、乱暴（らんぼう）にあつかわれていたりしたら、使用禁止になってもしかたない。３
③ 自分たちだけで遊びたいから、やりたいゲームは自分で持ってくる。１
④ ゲーム類は必要ない。　１　（　　）

３、もし、自分たちの責任でトランプやオセロのコマをなくしてしまったら、どうしますか？

・ スタッフに言うべき。モラルの問題
・ 探す　・弁償する　４
・ あやまる。これから気をつける　・あやまる　３　・その場で使用禁止

４、その他、自由に意見を書いてください。

・ジュースを安くしてほしい　・ネットができるパソコンを増やして　・風紀を改善してほしい
・我慢を味わってもらいたい　・休日は体育館を早く開けて欲しい　２　・バドミントン増やして
・ フリースペースに常時１人は必要
・ 「貸しだし票」を作ったとしても根本的な解決にならないと思います。正直言って最近の子どもたちはマナーモラル、社会のルールをあまり知らないと思います。やはり「ごみ箱に捨てる」「使ったあとはほったらかしにする」という行動をみたら、近くにいる大人、もしくは年上の人間がちゃんと注意し、ルールを教えるべきではないでしょうか？

答えてくれた人

・高校１年　・高校３年　・小６　３人　・小５　・中２　・小６　・高校生以上　・小３　・幼稚園
・ 高２

【資料９】

レクホールの利用ルールが変更になって約半年たちました。使い心地はいかがでしょうか？「使いづらい！」「ルールを守るから自由に…」など、たくさんの意見がみなさんから寄せられました。書いてくれた人、どうもありがとう！

今回のことで、センターの職員１１人もそれぞれ色々なことを考えました。みんなからの意見を一方的に聞くだけではなく、このことでどう考えたかをお伝えしたいと思います。

『昨年１０月にレクホールが閉まった時に思ったこと』

レクホールが閉まった時、レクホールがみんなにとってとても楽しく大切な遊び場だったのだと改めて感じました。けれど、物がこわれたり、ゴミが散らかっていたとしても、何の変化・改善（良くしようと思うこと）もないまま利用していけば、今回閉めた時以上に遊びや活動はしにくい場所になっていったと思います。（物が壊れることだけでなく、大きな事故やけがに結びついていたでしょう…）

レクホールを一旦閉めたことは、遊ぶ子どもだけでなく管理する大人側も利用方法や安全に遊ぶことを改めて考える良い機会だと思いました。

閉まっていたあいだ、遊べないでつまらなそうにしていたみんなの顔を見るのはとてもつらかったです。子どもたちが元気いっぱい遊べる環境を整えられるように大人も努力していきます。みんなも協力してください。　（ミヤサコ兄さんより）

『みんなに理解してもらいたいこと』

交流センターは「自由」に「好きなように」遊べる場所ですが、それは最低の条件（ルール）の範囲内でのことに限ります。それを超えてしまったら（人や物を傷つけることになったら）それはたちまち「自由」から「自分勝手」な行為となってしまいます。

センターにはほとんどルールがありません。私たちスタッフが呼びかけているルールや、マナーとは結局「社会全体のルール」でもあります。みんなが、センターの外でも「こんな風に行動できる人になってほしい」という願いをこめて、時にはうるさいほど声をかけているのを理解してもらいたいと思います。

また、「レクカード」や「施設利用票（受付で名前を書く）」などの「センター独自のルール」というのは、みんなが“安全に”“楽しく”遊べるためにはどうしたらよいか、ということをスタッフが考えた末にできたものです。「自分も他の人も」楽しく気持ちよく、そしてその中で「自由」に過ごすことができるようにするにはどうすればよいか、みなさんも考えてみてください。　（ナナコ姉さんより）

【資料10－1】

2004年度　第1回コーディネーター研修会　　040526Co 研修資料

202号室　13時30分～16時　　司会：森澤寛子コーディネーター

ねらい：①現在の青少年の姿を知り、今後の業務に生かす（自分の引出しをたくさんつくる）。
②自分の考えや相手の考えを知る。
③自分自身を振り返り、仲間を評価し、施設全体のレベルアップを目指す。

※　今回の研修は、新しいスタッフを迎え、第1回目ということもありもう一度「青少年育成とは」「ロビーワークを進めるうえで必要なことは」という基本を学びたいと思います。

1）横浜市青少年交流センターについて（15分）大槻館長

- 交流センター設立の経緯と役割について
- 交流センターのスタッフの役割について

2）**「現在の青少年をとりまく環境と、大人に求められる基本的対応の方向性について」**※別添資料
（10分）　七澤

①青少年健全育成に関する考え方
- 「青少年健全育成とは？」
- 「一人前の大人って？」

②学童期について
- 他者の認識と自己の形成時期

③思春期について
- 社会規範の習得

④基本的な対応の方向
- 青少年観の転換

⇒「参考資料」を元に、ポイントを説明した。

【資料10－2】

3）グループワーク（60分）　進行：七沢
A：村上、石井、中居、（七沢）
B：石上、川島、森澤
C：齋藤、松田、桜井、富岡

テーマ『キーワードを元に自分自身を分析してみよう！』　※別紙シート参照

ロビーワークにおいて重要なことのひとつとして、「自分自身のキャラクターを分析し、その役割に合った方法を探していく」ことがあげられます。キャラクターという言葉の中には「性格・人格・特性・性質・特徴・役割」という意味があります。　自分自身はどんな特性・役割を持つのかを分析し、今後の業務にいかしていきます。

◇ステップ1「自己分析（自分を知る）」→輪郭の形成　（10分）

項目ごとに自分自身で思っていること、青少年から見てどう思われているのか（あくまでも自己認識で可）を書き出す。※ここでは、対象を青少年と限定する

《ルール》
- 思いついたことを書く
- あくまで“自分が思うイメージ”でOK！

◇ステップ2「自分を知ってもらう、他人から見た客観的なイメージを知る」→肉付け（15分）

完成したシートをグループ内で発表。各自が作成したシートに対し、グループ内の人は意見を言う。（感想、同意、つけ加えなど）他の人から出た意見をシートに書き込む。

《ルール》
- 各自が出したイメージについて否定・批判はしない

★休憩（5分）

◇ステップ3　「自己分析から“自分のイメージ像”を考える」→主観と客観から出す“自分”（5分）

客観を付け加えたシートを元に、キーワードを抽出。その中から生まれた“自分像”を書き出す。

《ルール》
- 自己否定はしない
- ステップ1、2で出しだシートを元に客観的に出す

◇ステップ4　「青少年施設のスタッフとして照らしあわす」（10分）

「ステップ3」で出した自分像をもとに、
- 青少年に対して力を発揮できる（できそうな）こと
- 青少年に対して不得手（不向き、苦手）な（だと思う）こと　　をあげる。

◇発表（20分）

各自が出した「ステップ4」を発表しあい、仲間の考えを知る。

《ルール》

・ 出された意見に対して批判、非難はしない。

※ 各自が自分を認識することで自分の「得て不得手」を確認し、得意なことはさらに伸ばし、不得手なものは努力し改善できるようにする。

※ 仲間を知り、切磋琢磨しながらお互いをフォローしあい、施設スタッフとしてさらなるレベルアップを目指す。

★休憩（5分）

4）今後の青少年への対応について（40分） 大槻館長、富岡

ロビーワークの方法について

・ 要注意の子どもへの具体的な対応について

⇒対応ジャーナルの作成（交流センターに勤務するスタッフのみが閲覧できる）

・ 実名入りで具体的な対応を記入

・ それに基づき職員がその後の対応を記入

⇒会議で決まったことをログにして配布する

青少年の参画について

今日の研修について

・ 「自己分析」

※自分のことを知らないと、ボランティア（青少年）とはつきあえない。自分のことを認識するのはつらいことでもあるが、人はそう簡単に変われるものではないから「自分」を受け止めて、仲間と協力しながら仕事をしていくことが大切である。

6）その他

・ 前回のふりかえりメモまとめ

7）まとめ 森澤

第3回コーディネーター研修報告「課題に対するブレーンストーミング」 担当：村上

はじめる前にもう一度確認！

それぞれの課題に対してのイメージ・考え方・対応などについて意見を出し合う。（テーマを広くとらえること、色々な角度から意見を言うこと！）

◆ *ここでは、対象の青少年、そしてその行為について『良い』『悪い』ということを決めたり、あらかじめ問題視してから議論する場ではないことを確認する*

◆ *出された意見について、批判・非難・反対意見を出したりはしない*

【課題】

① 夜間フリースペースにたむろする中・高校生について

② ルールを無視する中・高校生について

③ ゴミを散らかしっぱなしにする子どもについて

【報告】上記①～③のテーマ全体を考え、円卓の順番に自由に意見を出し合った

※出された意見をもとにさらに意見を出し合い、グループごとにまとめた

・ルール違反をおかしたら、ペナルティーを与えたほうが良い
・ルールを明確にする必要がある
・大人のスタッフが出したものではなく、青少年委員からルールが出てくればよい
・子ども同士で注意しあったりできる場所になれると良い
・「受付で名前を書く」ことを最低限のルールとしたい
・注意をするのは、それぞれの尺度でよいのでは？
・「人に迷惑をかけない」ということだけ押えると、見えてくるものがあるのでは？
・社会のルールを理解してもらう場所
・センターは指導する場所ではない？
・しつけをするのは難しい。若いお母さんたちをみてもしつけができていると思えない。
・しつけは、最終的には家庭でするべき？
・マナーを「ふつうに」教えてあげればよい
・ゴミの散らかしっぱなしは、家で指導すべきでは？
・「構える」ことをせずに近所の「おばさん」として関わりたい
・スタッフのかかわりは中途半端
・「注意」はしているが「指導」はできていない
・「ふつう」に接している。よく話す子と話さない子がいて良い
・来るもの拒まず去るものは追わず
・来る子は、流動的である。来たければ来てよいし、来なければ来ないでよい。ただ、大人の責任として、やるべきことはやっていく。「淡々」と引き受ける。
・センターがファミリーのような場所になってくれれば良い
・良い（おとなしい）子が悪影響を与えられのはよくない。
・遊び道具が少ないので子どもが来なくなった
・家や学校とは違う場所になればよい

【資料11－2】

・子どもの社会が出来ている
・やっぱり「魅力」のあるセンターをめざしたい
・遊具は消耗品として考えたい
・女性スタッフばかりの時は、何か問題が起きないかヒヤヒヤしていることがある
・他の施設はどうなっているのか知りたい
・ＹＨＭＦのスタッフだってうるさいときもある。一概に一部の子だけ問題視するべきではない
・「悪がき」という意識はない
・センター外での喫煙はもう関われないのではないか
・「安全」と「盗難」さえ注意していれな、他は何をしても良いのでは？
・「盗難」の問題が一番大きいのでは？
・最近、来る子がおとなしくなった
・４～５月より来ている青少年の質が変わってきた
・大きな事件はないが、小さいルールを無視する子が多い
・最近来る子が劣化してきた
・ここが「第２のふるさと」であるような場所をめざしたい
・センターに来ていることを、まず受け入れる
・センターは一人前の大人になるためのサポートをするところ
・青少年のための施設、ということを認識
・「何もしなくてもよいところ」でもありたい

【まとめ】

・盗難をなくしたい。奇をてらわずに淡々と接するよう心がける
・魅力ある施設にしていきたい
・この地域の子どもは幸せである。「青少年の交流の場」であるという特色が出せればいいと思う。
・最近また盗難がありショックだったがめげずにがんばっていきたい。喫煙行為は許さない。言わないよりはどんどん言っていきたいと思う。「人に迷惑をかけない」というルールをもっと積極的にＰＲしていきたい。
・センターにだけ来るのではなく、ここを通過点としてもっと他に居場所を見つけてもらいたい。青少年が主体的となってかかわってもらえたらよい。
・信頼関係を築いていければよい。他のスタッフを参考にしていきたい。ルールはなぜ守らなければならないのかを示していかなくてはいけない。今すぐ結果を求めずに、何年かたって何かここ学んだことを思い出してくれればよい。Ｃｏ.はローテーション勤務なので毎日顔をあわすことができないので、その中でできることを考えていきたい。
・後でふりかえって、何かここで遊んだな、とか悪戯したな、とか思い出せる場所となってほしい。そのために、スタッフもできることをしていきたい。
・来る子がどんどん変わっている。盗難も来る子が入れ替わったから起こるのではないか。流動性がある。だからＣｏ.もそれに対処しなかれば。あと,施設の整備が必要だ。

【資料11－3】

・固定化しているのはよくない。来館者のなかで、リーダーが自然発生的に生まれれればよい。
・価値観が多様化している中で,魅力ある施設をつくっていくのは難しい。
・出された意見はすべて上向きのスパイラルになっているのはよいことだ。センターは場所ではなく、人であると思う。人のかかわりあいが大切だ。ルールは「守らせる」ものではなく、逆転の発送をもっていけばよいのではないか。

【資料12－1】

第4回コーディネーター研修資料 「交流センターの情報共有について」　担当：松田利恵（萩原先生招いて）

2004/12/01

・　現在の情報共有方法（形態、項目、利用頻度、共有度）

形　態	項　目	頻　度	性　　格	活用度
Co.会議	事務連絡（全体） ロビーワーク関連	月1回	決定する場 決定したことを伝える場 話し合う場	◎
業務日誌	利用受付申し送り事項 ロビーワーク等申し送り事項 職員連絡事項	毎日	1日の様子を伝える場 受付等の留意点や申し送り事項を伝達する場	○
ロビーワークノート	起こったこと 対応／職員の見解	課題があった日	大きな事件（対応が困難であった場合など）を伝え、今後の対応案を諮る場	×
職員会議	事務連絡（センター，協会全体） ロビーワークの様子 （主に職員間で決定し、スタッフに伝えていく）	週1回	協会全体の事務連絡 利用受付・ロビーワークを含めた対応の共通認識を決定する場 職員間のコミュニケーションの場	○
Co.研修	Co.が今知りたいこと、学びたいことを持ち寄る。	隔月	毎月担当者が変わるため題材が多岐にわたる。そのため自分が興味のない分野であると消化不良になることも。	○
その他	雑談		決定の場ではない。 実は一番大きなコミュニケーションの場、情報伝達の場、共有の場となっている。ただし、それらが他の『公的』な手段で語られることが少ないため、知っている人、知らない人とが出てきてしまう。	△ （◎）

□　活用度（共有されている度）は七澤が判断しています。

【あらためて上の形態を見て感じたこと】

・　意外と色々な形態を取っている。⇒そのわりに活用度がイマイチ

・　『会議』と名のつくものは、伝えるには良いがどうしても月に1回と間があいてしまうため、HOTな情報は伝えられていないと感じられる。また、発言者や内容もごくごく一部に限られてしまう感がある。

・　『日誌』に記入するのはほぼCo.であり、主に利用受付関連の申し送り事項である。職員は必要な時に記入するか（あくまで連絡事項だけど）、レスポンスを付けるかである。Co.のホンネが出ているが、（例えば、早く決めてほしい…早くやめてほしい…情報を教えてほしい…こうした方が良いのでは…これはダメだ…など）あくまで8人いれば人それぞれ、主観を交えて記入するものもあれば、あくまで客観的な事実のみを記入する場合もある。また、いわゆる“問題点”のみが記入されるのではなく“青少年の良い部分”“嬉しかったこと”なども記入されている。

・　職員間では、ほぼ毎日顔を合わせているので会議という形式を取らずとも『情報の共有』の面で限って言えば、日常の雑談で解消されている感がある。ただし、あくまで“決定された”ことではないため、職員と、その場に居合わせたCo.だけが「何となく」分かっていて、他の人は知らない・知らされないとしばしばトラブルの原因となるこ

【資料12－2】

とも。

・「夏ボラ」の日誌と一緒で、記入形式だと『項目』に左右されてしまう。また業務に追われると“書く”行為は、非常に面倒なものになりつい後回しになってしまうのではないか。また“書く”ことで満足してしまい、それらがどのように伝えられているのか、きちんと伝わっているのかが考えられていないのではないか。

・　会議形式では、時間／内容（優先順位）により、やはり内容が限られてしまう。また一部の人の意見や考え方ばかりが通ってしまう危険性もある。（主体的に参加している人と傍観している人とが出来てしまう）

☆　担当コーディネーターから　現状と課題

「以前（昨年度あたりまで）は、利用受付の対応やロビーワーク（個々の青少年への対応）についても、コーディネーター間、職員とコーディネーターで考え方・手法が異なると、不安に感じたり早くセンターの”共通認識“がほしいと焦りがあり、そのため会議などでもギクシャクしてしまう面もあった。

しかし、2年目になりスタッフ間でお互いを認め合い、理解できるようになると、それぞれの『やり方』を個性として受容できるようになり、現在は特に問題もなくスムーズにいっていると思われている。（暗黙の了解で認知しあっている？）

ただ、スタッフのほぼ全員が「創設メンバー」であり、あらゆる経験を積み、利用受付やロビーワークでのイレギュラーな事態にスタッフそれぞれが“勘”に頼って対応している部分が多く、あくまでの個々の裁量に大きく委ねられている部分が多い。

その“勘”を共通認識としてみんなで理解しあえれば良いと考えている。」

【今回の研修の目標】

①　萩原さんと話すこと（ぜひ他のスタッフにも萩原先生の人柄に触れさせたい！という館長の願い）

②　『スタッフが“勘”で動いている部分（日誌には残されず会議でも明らかにされない部分。成功したことも失敗だったことも含めて）を、全員が理解しあえるには』を、大きなテーマに、他施設の取り組みや、萩原さんが見てきたり研究してきたことをヒントに考えあう。

③　外部の講師を招くことで、新しい感性が芽生え、今後の業務に生かすことができる。

※萩原さんを中心に、あまり形式にとらわれずに全員が『語り合う』ことが目標です。全員が顔を揃えるのは月に1度しかないので…。

【資料12－3】

※参考

A：交流センターのスタッフ体制

《交流センター》 館長1人、職員男1人、女1人

《青少年活動課》ボランティア協会内の青少年を対象とした事業・研修を主に行っている。市から委託されている事業も多い。　課長1人、職員男2人、女1人（職員は交流センター職員と同世代）

《コーディネーター》会議室等の受付業務を中心に、ロビーワーク、青少年の相談業務などを行う。週2～4回の勤務。 男性（60歳台）4人、女性（40～60歳台）4人

B：今までのCo.研修　※今年2月から開催。毎回担当Co.がそれぞれ学びたいテーマを選び進行する。

※コーディネーター研修とは

開館し1年がたち、コーディネーターが様々なケースに直面していった。そのたびに個々で勉強したりしたなどしていたが、全員で学びあい、コーディネーター全体の質の向上を目指すため、研修会を行う。隔月でそれぞれ担当を持ち回りその時々の事例や、また知りたいこと・学びたいことを議題にあげ、担当者が資料を作成し進行する。

☆今までの研修

【2月】ロビーワーク（実際におこなったもの）の事例を元に、グループで「自分だったらどうするか」など自由にディスカッションし、相手（仲間）の考えを知る。（頭を柔らかくし、色々な青少年に対応できる力を養う）

【5月】「現在の青少年をとりまく環境と、大人に求められる基本的対応の方向性について」

※文科省がまとめた資料をもとに『知識のひとつ』として蓄える

「キーワードを元に自己分析をする」

※個々のキャラクターや個性が大いに活用されるロビーワークにおいて、あらためて自分自身を知り、また相手にはどう見られているのかを知る。

【7月】「ブレーンストーミング」 ※議題、問題のある青少年について（交流Cの事例に基づいて）

「アスペルガー症候群について」

【9月】 ※12月22日（水）へ

【11月】「子どもの社会現象について」 ※近年社会で話題となっている事例を元に意見を出し合う

「多様な子どもたちの様子」※自閉症、アスペルガー症候群などの特徴を知り、彼らへの接し方（基本的な対応）を、実際に活用されている資料を元に学ぶ。

【資料13】

２００４年度　第４回コーディネーター研修会　　０４１１２４

202号室　13時30分～16時　　司会：中居正威

ねらい：①多様な青少年の様子を知る
②子どもたちの社会現象を知る
①②を自分の知識として蓄え、今後のロビーワークに活かしていく。

１）子どもの社会現象について（５０分）　中居
※近年社会で話題となっている事例をもとに、意見を出し合う

～休憩（５分）

２）多様な子どもたちの様子（８０分）　中居
- 自閉症
- アスペルガー症候群

※それぞれの特徴・特性を知る。接し方（基本的な対応）を学ぶ。
それらについて意見を出し合う。

３）まとめ　中居

４）連絡事項

【 資料 14 】

青少年交流センターの可能性

―横浜市の青少年施設の歴史と協会の青少年育成事業の方向性―

横浜ボランティア協会　事務局長　山本一郎

2003 年 3 月　横浜ボランティア協会　職員研究発表

1　現代の青少年問題と青少年施設

2　横浜市における青少年施設の歴史と現状

3　子どもが主体的にかかわる活動をどう生み出していくか、また子どもの活動を支援する視点とは

4　青少年施設の意義・役割と限界、これからの方向性

5　青少年交流センターの位置付けとこれからの方向性

6　野島青少年研修センターの位置付けと方向性

7　これまでの横浜ボランティア協会の青少年事業の反省

8　横浜ボランティア協会の青少年事業の将来の拡大に向けた展望と協会内の青少年部門相互の連携

9　横浜市の青少年施策の歩みと反省、２００３年度以降の新たな取組み、そしてボランティア協会の取組み

1　現代の青少年問題と青少年施設

現代の小学生、中学生、高校生に見られるいじめ、自殺、不登校、中退、引きこもり、学級崩壊、器物損壊、暴力行為、非行行為などの事態が広がってから、一向に改善されない状況となっている。

これらの原因を子どもたちの内面に求めるとすれば、子どもたちが仲間をつくることが、上手でなくなってきていることが挙げられる。少子化、核家族化、地域社会の人間関係の希薄化などにより、学校以外の場での子どもの人間関係が少なくなったこと、地域の大人などから人間関係を通して学ぶことが少なくなったことに加え、学校に過度の期待が寄せられた結果、学校自体が多様な子どもたちの人間関係を調整しきれなくなったことがある。(久田邦明　論文「青少年施設の現状と可能性」を参照)

こうした問題を解決していくには、長い目で見れば疎遠となった人間関係や社会のあり方を変えていくことであるが、その一つとして学校教育以外の場における子どもの人間関係づくりを支援していく営みが大きな役割として期待される。

中教審答申などでは、地域社会の教育力の活性化がさけばれ、「学校・家庭・地域の連絡協議会」の結成など

が施策として挙げられているが、今日ほとんど地縁的コミュニティが崩壊している現実の中では旧来の地域社会像を追い求めるだけでは、根本的な解決にはならない。

一方、子どもの興味や関心に応えた形でのスポーツ、野外、文化、ボランティアなどの多様な体験活動の場の提供の必要性が言われているが、どういう方法で提供するのかがあいまいなため、一向に進まない。何かをすれば子どもたちから自然発生的な活動が生まれてくるわけではないだろうし、大人が何かを提供するにしても、子どもたちすべてがそれに飛びつくわけでもない。

そうした意味からは、学校教育以外の場で、青少年施設を整備拡充していくことは大事な課題ではある。

これまでの横浜市における青少年施設はどのような歴史をたどってきたのかを振り返ってみたい。

2　横浜市における青少年施設の歴史と現状

（1）高度経済成長期の青少年施設

右肩上がりの高度経済成長期にはベビーブームに伴う青少年人口の増大に対応するため全国的に青少年施設が建設された。1950 年代半ばからは勤労青少年ホーム、野外活動施設、国立青年の家、少年自然の家(1972～)と整備され、都道府県、市町村では公立の青少年施設が整備された。

都市化の影響を受けた横浜市では、「子どもを大切にする市政」のスローガンの飛鳥田市政の下で、子どもの遊び場の設置のほか青少年施設として次のものが整備された。

昭和 35～40 年代には児童館を小さくした青少年の家(56 か所)が、児童公園内などに整備された。横浜市では東京都、特別区のように児童福祉法に基づく児童館（小学校区に 1 か所）はなかった。青少年の家を補充するものとして、地域の町内会などが青少年のための施設を建設するときに建設費補助金（当時 30 万円)を交付する青少年施設整備補助事業があり、この補助を受けて建設された施設が 250 か所以上で、当時では小学校の数くらいあった。とは言うものの、これは事実上の町内会館であって、後年は町内会館整備補助事業に切り替えられるが、当時は「○○青少年会館」という看板が掛けられていた。

社会資本整備が遅れた横浜市では、とても公立の児童館を建設する余力がなかったのだと思う。

（2）飛鳥田市政時代の青少年施設

飛鳥田市政になってから青少年図書館(14 か所)が各区に整備された。(1972 年で完成)これは 18 歳以下という利用制限を設ける法定施設を敬遠した飛鳥田市長が独自の青少年施設条例に基づき建設した全国でもまれな市単独施設である。

施設の性格も、図書館法に定める図書館ではなく、都市化の中で居場所を失った青少年の学習室的な機能を果たす施設であり、今でいう大型の児童館で、ゆっくりくつろげる青少年の居場所であった。

当初は豊かな発想力のある学校長 OB の多くが館長となり、各区で行う児童文化教室の会場となって児童文化活動の推進にも貢献した。

そのほか飛鳥田市政時代に整備されたものは、勤労青少年センター(西区)、鶴見勤労青少年センター(鶴見区役所そば)、南区青少年会館(蒔田公園内)、保土ヶ谷区青少年会館(天王町)、青少年陶芸センター(中区本牧)、赤城山と道志の青少年野外活動センターがある。

そして飛鳥田市政から細郷市政への移行期に野島青少年研修センター（50 人規模）が建設された。

民間が整備した施設には桜木町駅前の県医師会館の一部に「働く青少年憩いの家」が（社）横浜勤労青少年福祉協会（理事長　深澤淑子）によって運営されていた。(後年、南区に横浜青年館として移転)留守家庭児童対策事業としての学童保育は、青少年の家で行う方式と、学校を利用する方式があった。これはその後青少年の家方式中心となるが、住民要求の高まりの中で、保護者などが民間借家を利用した方法が多く申請されるようになる。

なお当時は児童相談所とは別の性格をもつ青少年相談センターが青少年保護育成施策の中の施設として位置付けられており(中区翁町)、直営で大学の心理学専攻の社会福祉職員による非行相談、立ち直り指導などが行われていた。

（3）市民参加方式の運営

飛鳥田市政時代に特徴的だったのは、市民参加方式による青少年施設の運営である。直営の施設は西区の勤労青少年センターと青少年陶芸センターだけであった。(ただし、青少年陶芸センターの職員はすべて嘱託職員)あとは、地域の町内会や青少年団体などの大人による任意団体である運営委員会に、直接委託されていた。この考え方は全く正しかった。すなわち青少年の育成は本来、行政が直接、行うべきものではなく、市民（親や大人達）が中心になって行うのが本筋という原点に返り、市民による自主的な運営によって施設や事業を行うことを期待したのだった。

理想は良かったのだが、それを実現するには行政職員が何倍も努力して市民の自発性を育てるきっかけづくりやコーディネートを行うことが大事である。しかし、当時は今日のように子育ての自主的な市民活動団体やNPOなど活発な活動を展開している団体がなかったし、市民にも自分達で育成しようという意識はなく行政が整備して運営するのが社会教育だとの意識が強く、行政職員にもコーディネートするだけの力もなかった。

したがって、運営委員会のメンバー構成では、地縁的な団体に依拠するしかなかった。

そうした団体に名目上は委託料を支出し、職員採用の権限を与えたわけである。しかし実際には、行政が館長候補（学校長OBなど）を推薦していた。

当時の横浜市企画調整局長であった田村　明氏は、後年の書物で、市民参加は市民意識が十分に育っていない現状では、一挙に市民参加が進むのは難しく、市民側から見て９つの段階があるとし、それは関心　知識　意見提出　意見交換　審議　討議　市民立案　市民運営　市民実行があるとしている。審議までが市民参加、それ以降は市民参画、市民立案以降は市民主体であると述べている。(「現代都市読本」東洋経済新報社　参照)

施設職員の身分や給与水準も現在の嘱託職員レベルで、当事者能力のない運営委員会に不安をいだく者も多かった。

青少年の家は年間委託料は10万円だった。指導員は施設を管理する管理員や町内会長などが担当したが、ほとんどが野放し状態で、鍵の開け閉めの仕事が中心であった。当初は青少年の家巡回指導者協会の指導者が定期的に地域の青少年の遊び指導のため巡回していたが段々少なくなっていく。

青少年図書館には図書館司書の資格をもつ多くの新卒者が就職したが、学校長OBの館長のみの力では青少年教育指導技術を習得させることはできなかったし、身分の不安定な状況の中で将来を不安視する傾向が強くなり、労働組合を結成し、図書館法に根拠を置く図書館への転換と給与条件の改善運動へと広がっていった。飛鳥田市長はもともと青少年図書館を社会教育主事資格を持つ公務員を配置した直営施設とする考えはなかったのだから、議論は平行線だった。こうした運動も、その後横浜市が各区に公立図書館を整備し始めると下火になってゆく。

この点で違っているのが、当時、同じく革新自治体であった美濃部都政である。東京都は、地域に公立公営で運営する児童館を建設していった。(小学校区に１館）職員は、児童厚生員という専門職の公務員であった。現在では、財政状況の悪化の中で、職員の嘱託化や時給職員の導入などによる職員体制の見直しが多くの特別区などで進んでいるが、東京都政方式は、多くの青少年育成のノウハウの蓄積をもたらし、青少年の社会教育分野における有給職員の社会的地位の向上に寄与したと思う。

飛鳥田市長の発想が、現在、導入されていたら市民主体による青少年育成の横浜方式が実現できていたかもしれない。ただ早すぎたために、横浜市における青少年施設職員の青少年育成に対するノウハウが蓄積されない状況が続き、結局のところ、それがようやく実現される期待がもてる条件が整ったのは、横浜市野島青少年研修センターを建設し、青少年の健全育成を目的とする（社）横浜ボランティア協会にその運営が委託されてからとなるのである。(1978年　昭和53年)

学童保育は、留守家庭児童対策、いわゆる「かぎっ子」が社会問題となるにつれ、放課後の児童健全育成の一環として、小学校の教室を活用した学校方式と、青少年の家を活用した方式が基本の柱として、委託運営されたのが始まりであるが、その設置要望が多くなるに従い、親達が中心となって組織したグループが地域の借家を活用し、一定の条件を満たす学童保育クラブを設置し、市に委託料の申請を行うという方式が一般的となった。そして学校方式は縮小された。これも市民自身による運営という方式が中心とされた。東京都は児童館の中に学童保育クラブを公立公営で設置・運営していたから違うシステムであった。

当時は、子育ては、母親が家庭にいて行うのが望ましいという社会の風潮があった時期であり、その人がやりたいと思えば専業主婦もやれるし、仕事と主婦業を両立させたければそれもできるという社会が望ましい社会だという意識が定着していなかった。

放課後の児童の健全育成施策としては、当時から学校の校庭開放事業が実施されていたが、これは教育委員会が所管であった。学童保育を行っていたのは市民局であり、縦割り行政で相互の連携はなかった。

よく考えれば、これらの事業は１つの所管で行った方が効果的と考えるのだが、それが実現したのは、中田市政になって2003年度予算で、子育て事業本部の中に両方の事業を担当する放課後児童育成課が設けられることになってからであるから、いかに行政内部の中だけの努力ではできないのかが分かる。

（4）地区センターの開館

1972年には、新たな青少年施設として、青少年会館を旭区の希望が丘地区と戸塚の本郷地区に建設する施設計画が青少年課で進められていたが、突如として1973年に子どもからお年寄りまで誰もが利用できる地区センターとして整備する構想が決定された。ちょうどそれは、青少年課が民生局（現在の福祉局）から市民局へ機構改革されたときであり、それ以降はかなりの間、面白いことに市民局青少年部という組織が、地区センターをはじめとする市民利用施設の建設と管理運営を行う仕事を続けることになる。

そうして第１号の希望が丘地区センター、第２号の本郷地区センターがオープンし、以降は地区センターが人口３，４万人に１館の割合で、計画的に建設されてゆき、今日に至っている。

これを契機に青少年の交流施設が地域に計画的に建設されることはなかった。

全国的に青少年施設の建設が見直され、地区センターのような市民利用施設が建設されるようになるのは、もっと後であり、横浜はかなり早い時期に始められたことになる。

子どもが伸び伸びと生活できる環境条件を整備することが、市民誰もが豊かに生活できることになるということで始められた「子どもを大切にする市政」を掲げた飛鳥田市政が３期目を契機に「市民の市民による市政の実現」へと昇華した政策転換であった。当時は各区で「区民会議」の結成が始められていた時期でもあり、ステップアップを図ったわけである。当然に地区センターの運営は、運営委員会への委託であった。

この方式はかなり後まで続けられるし、指導員の賃金は今でいう嘱託職員レベルで抑えられるため、地域の中からの再就職者などによって占められ、趣味やﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ、町内会活動の場としての貸館機能が中心となり、趣味や教養講座が主で、生涯学習などが取り上げられることもまだなかった。

市民の生涯学習要求が高まる中で、各区に生涯学習支援センターを整備する構想が発表される一方、地区センターの人事労務事務が複雑かつ非効率で、運営委員会が採用する職員の事務を圧迫していたこともあり、区単位でこうした事務を集中して行うとともに、生涯学習支援と結びついた機能を果たすため各区に任意団体である区民利用施設協会が行政主導で設置されたのは、高秀市政になってからである。

（5）細郷市政の時代

細郷市政の時代は、福祉元年、行政の文化化、高度情報化、生涯学習、女性の時代、国際化などが叫ばれ、バブルの時代には、多くのハコものが建設された。（福祉施設、美術館、女性センター、国際会議場）この時期に、建設された青少年施設は、子ども科学館　青少年育成センター　子どもログハウスなどであるが、地域の子どもに身近な居場所となる青少年施設が建設されることはなかった。

地域での子どもの居場所は、やはり地区センターに期待された。ところがその多くは、子どもの居場所ではなくなり、子どもは注意されるか、敬遠される存在であった。

あるとき細郷市長が、お忍びで、ある地区センターを見にいった。

そのとき、子どもがロビーにあるソファーに上がって遊んでいた。ソファーはどこかのホテルにあるような立派なものであった。そこへ施設の職員が来て、「汚れるから遊んじゃいけません。」と注意した。

細郷市長は、唖然としたという。誰もが気軽に利用できる地区センターは、そうではなかったのである。

地区センターの常勤職員は指導員と呼ばれていたし、生涯学習支援センターの職員も社会教育指導員である。

ならば、青少年の社会教育事業を推進する役割もあるのだろうが、すべての施設でそういう取組がなされることはなかった。ごく一部の施設ではあっただろうが全市的に広がることはなかった。

結局は、地区センターのような子どもから大人まで誰もが利用できる地域施設は、放っておくと、大人中心のダンスやスポーツ・レクリエーション中心の施設にならざるを得ない。

「ワンパクサタディー」などという地区センターを利用した子ども向けの事業が展開されているが、要は、企画したり見守る大人の姿勢や視点がどういうものかで、「子どもに遊ばせてやる施設」か「子どもの人間性を

育てる施設」かが違ってくる。
子どもログハウスや学校開放（後にはまっこふれあいスクールとして全校展開）もあるが、何よりも運営面で理指向が強く、青少年育成の視点からのアプローチは少なかったように思う。
青少年育成センターは、馬車道の横浜市民ホールの建替により、市民文化会館関内ホールの整備に平行して、市内の青少年団体の強い要望により、青少年指導者、育成者や青少年の育成のための施設として整備された。
このとき、青少年団体の共同事務所と併せて、横浜ボランティア協会の本部事務所としての使用が承認され、同時にこの施設の管理運営が委託された。市民局青少年部への間借り、関内駅前第２ビル６階、文化体育館横の平沼記念レストハウス内と転々としていた横浜ボランティア協会が、市役所から近い都心部の１等地に事務所を構えることができたことは大きな意義がある。

（6）高秀市政の時代

高秀市政の時代は、バブルがはじけた後の「失われた 10 年」に当たる。
青少年の家は廃止の方向が出され、青少年図書館は市民利用施設へと転換される方針が決定された時期である。その理由は、多分、少子化により、青少年の利用が激減し、代わって市民利用が多くなるという現象が一般的になってきたからだと思う。
このとき、青少年図書館を、青少年文化センターとして転換整備し、当時、横浜ボランティア協会が中期活動計画指針（第１次は 1990 年～　第２次 1995 年～の５年計画）で打ち出していた、青少年のボランティア活動を推進する地域推進拠点構想、ボランティア育成基金構想とつなぎ合わせて横浜ボランティア協会に運営委託していこうとする案が市民局青少年部で検討されたことがある。
当時、協会では、戸塚西口に青少年ボランティアコーナーを設置し育成基金で運営していた。
この構想は、京都市などの青少年活動センターが類例である。しかし、これは実現しなかった。
おそらく、その頃から、地区センターの運営委託料を個々の運営委員会に支出していたことによる事務の非効率の問題が検討され区内の青少年施設を含む市民利用施設の人事労務などの事務を集中して処理するために、区民利用施設協会を設立することが検討され始めていたと思う。だから、青少年施設だけを取り上げて、横浜ボランティア協会に委託するというような案は、効率性の見地から取り上げられなかったのではないか。
今、西区の勤労青少年センターが青少年交流センターとして再整備されたのを思うと、あのとき、先見の明があり、14 区の青少年図書館が各区の青少年交流センターになっていたらと思うと、残念である。
当時のボランティア協会の事務局の体制からは、これら施設をいきなり受託するには厳しい状態であったとは　思うが、始めは大変でも横浜ボランティア協会が徐々に受託し、常勤職員の育成に力を入れていたら、随分と違う効果が得たのではないだろうか。
勤労青少年センターも、中田市政になり、補正予算で、青少年交流センターとして再整備されることが決定され、2002 年 12 月にオープンすることができた。

（7）職員の機能と能力

このように横浜市の青少年施設の歴史を見てくると、多くの青少年施設が市民利用施設へと転換されたのはなぜだろうかという疑問がわく。これは基本的には少子化の中で青少年の利用が減少し、市民利用が増えてきたことへの対応であり、何も横浜だけでなく、全国的な傾向であるのだが、ではなぜ、京都市の青少年活動センターや東京都の児童館のような施設が残って活動しているのに、横浜は残せなかったのか。
京都市も青少年施設の廃止の動きはあったのであるが、京都市ユースホステル協会の専門職員の努力によって青少年施設の意義や必要性が理論的に示され、時の首長の理解を得たからにほかならない。
すなわち横浜では青少年のためにユニークな事業が展開されていなかったからであろう。
だからといって優秀な職員がいればどこも青少年施設が存続できるかというとそうではない。神奈川県のように公立公営の青少年会館であっても財政危機の下に廃止されることもある。
だが、後に述べるように、青少年施設をうまく運営していけば、必ずや青少年の成長を助ける施設になり得るし、全く必要のない施設ではない。それを首長に理解してもらう原動力はやはり所管課の職員であり、施設の職員なのである。
では、横浜市の場合、青少年施設や行政施策に携わっていた職員の、青少年育成の機能とそれに応える能

力はどれほどのものだったのか。

昭和47年当時は、各区役所市民課社会教育係には青少年事業担当者(主に青少年施設、青少年事業)と社会教育主事資格をもつベテランの行政事務職員が必ず置かれていた。社会教育主事の主な仕事は青少年の社会教育であって、教育委員会の家庭教育学級・婦人学級・成人学級よりも大きなｳｪｲﾄが置かれていた。

まだ、生涯学習という言葉がない時代であった。

昭和43年青少年課が教育委員会から民生局(現在の福祉局)に移管されたとき、教育委員会時代に青少年の社会教育事業を専門的な見地から企画・指導するための指導主事(課長級の待遇)が置かれていたが、それが民生局にも副主幹(課長級)という形で配置されていた。この副主幹を中心に毎月１回、各区社会教育主事の学習会が開催され、青少年の社会教育事業などの進め方や検証がなされていた。

社会教育主事資格があるといっても、実際には、教員経験があるわけではなく、行政事務職なのであるが、当時は民生局副主幹の指導のもとで、活発な学習会が行われ、かなりやる気のある職員がいた。

ただしこの人達と他の青少年事業担当者との事務経験の格差が広がったりして、お互いの質を向上させる必要が生じ、各区の青少年事業担当者と民生局職員相互の「青少年育成研究会」を昭和47年から48年にかけて毎月１回、各区役所で持ちまわりで開催した。毎月、テーマを決めて、ジュニアリーダーの育成、勤労青年育成、青少年指導員、青少年施設、学童保育、青少年団体補助金などが話された。実際には、市の担当者が各区の実情を知る機会として意義があった。十分な事業の方針づくりや理論的な枠組までは至らなかったが、初めてやった意義は大きく、各区の担当者のやる気が出た効果があった。

残念ながら、指導主事あるいは副主幹の設置による青少年の社会教育を専門的に実施していこうという体制は、民生局から市民局に移行された後、継続されることはなかった。民生局では青少年課長とは別に１名の副主幹が配置されていたのだが、市民局に移管された後は、たまたま副主幹であった人が青少年課長になったので、そういう専門家はおかれず、その青少年課長が異動してしまった後には専門的な識見をもつ者が配置されることはなかった。

このときから横浜市の青少年の健全育成事業を実施していくのに必要な専門家による指導体制がなくなったことは、その後の青少年行政が全く素人集団（行政事務職）にのみによって実行されていったという意味で、大きな痛手となる。専門家といっても行政の中では、学校教育の経験者が指導主事として社会教育を担当するわけであるが、青少年教育に携わった経験があることは大きな力となる。教育委員会に青少年課が残っていれば、まだ違っていたかもしれない。

民生局に機構を移管した飛鳥田市長の考えは、反文部省（国が青少年教育を行うことへの反発）という姿勢であったと思う。その代わり、横浜市の青少年行政の指針は、文部省に追随することではなく、市民の専門家の力を借りることであった。当時は青少年問題協議会に市長のブレーンともいうべき大物がズラリと顔をそろえ、市長はこの人達に、横浜の青少年施策の指針と事業計画を委ねたのである。宮島　肇横浜国大名誉教授、富田富士雄関東学院大教授、越知　昇横浜市大教授、吉村　恭二横浜YMCA総主事などであった。だが、これらの人たちが徐々に退任し、飛鳥田市長から細郷市長に代わっていくにしたがって、大きな発言力をもたなくなり、行政は指針をもてなくなるのである。

青少年行政の仕事を希望する若手職員は多い。しかし、専門的な学習は本人の努力に期待されるのであるが、先輩や管理職がそうした研修や自己啓発を奨励しない雰囲気が行政の保守的な体質であるから、そうした若手職員は専門的な学習はしなくなるし、自分なりの考えで仕事をしてしまう。効率的に事務を処理したりする面などが評価されてしまう場合もある。

しかし過去の20年から30年を振り返ってみると行政職員の事業企画力やマネジメント力、そして行政職員の意識は以前と比べて、かなり向上してきていると思う。少年洋上セミナーの企画力やマネジメント力はたいしたものだし、行政は環境整備やコーディネートが役割だという意識は徹底しており、直接、青少年指導したりはしないという点は徹底してきている。

行政職員は環境整備やコーディネートが役割であり、直接、青少年指導を行う者ではないといっても、実際の新規事業などを企画する場合には、青少年の社会教育に対する理解や事業に必要やノウハウなどが必要とされる。しかし、最近のように3,4年で異動してしまうため、ノウハウが蓄積されないという問題が残る。

だからこそ、そうした専門的な識見やノウハウが常に継承されるようなしくみを作る必要がある。横浜ボランティア協会を設立した趣旨の一つには、そうした青少年教育の専門家を育て、人材の面で、横浜市の青少年行政に貢献することを目指すという考えがあった。横浜市が設置した外郭団体だから、あまり大きなことは言えないが長年青少年の仕事に携わることのメリットを生かせれば、行政のもつ限界性をカバーできるとは考え

ていた。
市民局の青少年部と横浜ボランティア協会職員が一緒になって、現在の青少年が求めるものや事業のあり方などを学習し合い、より良い施策へとつなげていくことができればと思うのだが、これまでの横浜市の姿勢はどうであったろうか。「横浜ボランティア協会は何をするところ？」とか、「横浜ボランティア協会は何をするために設立したの？」というふうになかなか理解されておらず相互の連携が十分できなかったのは残念である。
今日の横浜ボランティア協会の職員が行っている少年洋上セミナーなどの事業の企画やマネジメントを見ると30年前の青少年行政担当者の実力と比較するとかなりレベルは上がっていると思う。以前はジュニアリーダー研修会を市で主催してやっていたが、講師は青少年巡回指導者協会の指導者（主にはボーイスカウトの大人指導者など）に依頼して、国立中央青年の家などで、一方的な講義・実習などの内容で行い、ワークショップなどはゼロであった。青年自身の自主性を育てるために青年たちにやらせてみて指導するやり方ができるようになったのは大きな社会教育技術の進歩であろう。また、施設に青年のボランティアスタッフを募集・配置したり、中高生に施設の運営に参加するしくみをつくったりということができるようになったのも大きな変化である。
ただそれが定式化して毎年、継続されていくうちに、市民のニーズからかけ離れたものになってしまったり、仕事にのめりこんでしまってまわりの環境変化に気がつかないこともある。
青少年施設が市民利用施設に転換されたが、そうした市民利用施設を青少年が利用できなくなったわけではないのに、青少年がそうした施設から遠ざかったと思われる。確かに少子化により青少年の利用は減る傾向にはあるだろうが、誰もが使える施設だから青少年が来ればよいのに来ない。それは、多分に施設を管理運営する大人側の配慮が欠けているからである。やたらと禁止事項が多かったり、騒ぐ青少年に対して敬遠したりしてきた。市民利用施設を作るときそんなことになるくらいのことは分かっていた。
ならば、市民利用施設を運営する場合、青少年が利用しやすいような仕掛けをつくらなければいけなかった。これまでの歴史を踏まえ、これからはそうしたことを心掛けていかねばならない。

３　子どもが主体的にかかわる活動をどう生み出していくか、また子どもの活動を支援する視点とは

（1）主体的な活動の支援を

現代において子どもや若者が主体的に関わる活動が、どの程度、活発に展開されているのだろうか。
どの時代にも、子どもや若者が大人になるしくみとして、大人達から離れたところに独自に組織する空間や人間関係があった。それは学生寮であり、職人の徒弟集団であり、労働運動であり、学生運動であり、地域の習俗や伝統行事の中の活動であった。
今はそうした機会が極度に失われていることは確かである。学校教育に過度の期待が寄せられたが、今はそれも無理なことが分かっている。
そうした機会が失われているということが、大人になることが困難になっているというふうにとらえれば、そうした機会が、切実に必要とされているということでもある。
子どもや若者が大人になるために不可欠な場とか人間関係は、子どもたちが自力でつくるべきものだという考えもある。確かにどんな状況の中でも、子どもや若者は自分の力で大人になっていくであろう。
しかし、子どもが大人になるには、身近な人と共感したり、反発したりしながら、自分をつくっていくわけであり、そうした機会が失われているなら、大人の果たす役割は大きいと言わねばならない。
現在では地域における地縁的なコミュニティが崩壊しているから、昔に戻ることはできない。
だが、新たな視点で、「住み良い地域社会」をつくっていかねばならない。それは大人そのものの主体的なまちづくりの活動の中に、子どもや若者の「力」を置いてやるということである。
結局は、大人の生き方の問題なのである。
親でも教師でもない大人と子どもとの接点ができる場や情報を整備していくことが大事である。
現在、大人によるユニークな活動が展開されている。家庭を子どもたちに開放している大人の活動、小学生が出入りできる喫茶店を開店した例、商店街の空き店舗を利用して子どものたまり場にした例、障害をもつ若い世代の青年学級を開設した例、駄菓子屋を開店した例などの市民活動である。
従来、青少年の社会教育というと、学校教育を補完するものとして、行政が設置した青少年施設や公民館に社会教育主事資格を保有した有給職員が、講座や事業を行い、ファシリテートするといった、いわゆる公共事業体が行うものといったイメージが強かった。あるいは、青少年団体に加入を促進させるといったｲﾒｰｼﾞが強か

った。しかし、子どもの主体的な活動とは市民の活動と行政の行う活動とが連携して、効果があげられるものである。

青少年施設のあり方も新しい視点で、青少年の主体的な活動を支援できるものとして運営していかねばならないであろう。

（2）大人と行政の課題

昔と変わらず多いのが、大人が子どもの世話をやきすぎるということである。子どもが大好きという大人の中にも、自分でおせっかいをやいてしまう人が多い。やってあげるという姿勢である。

大人が企画したイベントに大勢の子ども達を集めようとしてもなかなか集まらないというのはこうしたケースである。横浜ボランティア協会が行う事業にはこういうものはないのであるが、地域にはまだ多い。

まずは大人がリーダーシップを取るやり方をやめることである。そして子どもや若者の力をうまく引き出していくことが必要である。

もう一つは就業支援の可能性を探ることである。昔の地域の教育力は子どもが地域の後継者として期待されていた中で発揮されていたのであった。これからは終身雇用制度がくずれつつある中で、青少年は様々な経験を積んで、自分らしい仕事をみつけようと努力していくであろう。現在、大学生のインターンシップや中高生の職業体験学習などが盛んに行われているのもそうした支援につなげたいという意図がある。

しかし、実際の職業選択や自分探しには、充分な効果があがっているとはいえない。

子どもや若者が将来の職業設計がしていけるような「世の中を見に行こう」といったような手助けをしていけたらよいと思う。

大人や行政はどういう姿勢や取組が必要であろうか。

行政と住民のパートナーシップというとこれまでは自治会・町内会と行政とのパートナーシップが中心であった。しかし今、地縁的コミュニティは弱体化している。一方でテーマ型の市民活動団体の活動が活発に行われている。これらのテーマ型の活動団体と自治会・町内会とはあまり交流や連携が少ないのが現状である。これからはこうした大人達の活動同士のパートナーシップが求められる。

行政はこれまで多くの市民利用施設を運営してきた。青少年施設も市民利用施設に転換されてきた。しかし、その施設を青少年が自由に利用できるような運営をしてこなかった。これからは地域のあらゆる施設に青少年が主体的に活動できる場を作っていく必要がある。それには、行政が地域住民に対してきっかけづくりやコーディネートしていく役割が大事である。

そうした意味から、市民利用施設や青少年施設などで働く有給職員の役割はきわめて重要な意味をもつ。

子どもや若者、そして住民が主体的な活動が展開できるような事業を企画したり、運営への市民参加を行うなどファシリテーターとしての専門的な知識や技術が必要となる。

特に学校はこれから、街の中の基幹施設として、誰もが自由に出入りできる施設とならねばならない。

住民にとってのコミュニティスクールとしての役割を果たしていくよう、行政は環境整備する必要がある。

阪神淡路大震災のときに住民がみんな学校に集まったように、普段から学校が住民のまちづくり活動の拠点とならねばならない。

4　青少年施設の意義・役割と限界、これからの方向性

（1）青少年施設を居心地の良い場所に

これまで各都市で整備されてきた青少年のための施設を整理すると次のようになる。

【図1】これまで各都市で整備された青少年施設

（対象）	小学生	中高生	青年	すべての住民
地域施設	児童館	大型児童館 （青少年交流ｾﾝﾀｰ）	青年館など （青少年交流ｾﾝﾀｰ）	地区ｾﾝﾀｰ　ｺﾐｭﾆﾃｨﾊｳｽなど

機能別の施設	野島青少年研修ｾﾝﾀｰ 青少年野外活動ｾﾝﾀｰ 子ども科学館	区ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰ

（注）青少年交流ｾﾝﾀｰは当面、中高生の利用促進に力を入れて事業展開していくが、一方、都市青年活動の拠点施設という大事な機能もある。今回の論文では、その辺はあまりふれていないが、それを忘れているわけではない。

地域の青少年施設は、青少年が大人へと成長する途上において、家庭や学校とは別に自分たちで過ごし、自分の力で人間関係を作っていける場を提供する一つとして効果的な施策である。それは、青少年の社会教育に熟知した有給職員がファシリテート役を担い、適切な支援が可能だからである。できればこうした青少年施設が各地域に整備されれば青少年の成長に大いに寄与する。

しかし今日の経済の右肩下がりの時代における財政事情の下では、単独の青少年施設を新たに整備していくことは不可能に近い。少子化で学校施設などで遊休施設が出れば、高齢者や市民が利用する施設に転換するということが検討されるのが時代をとらえた合理的な施策というものだし、今はそういう時代であるから、青少年施設を整備する場合は、既存施設の活用が主となるのはやむを得ない。

ましてや横浜の場合は、過去の青少年施設が市民利用施設として転換され、青少年は、大人たちにその場を奪われてきた。

ではどうするべきなのだろうか。

青少年が、ゆっくりくつろげて自由におしゃべりできる場所とは、何も青少年施設の中にのみあるのではない。繁華街、コンビニの前、公園、部活動、学習塾などでも可能であるし、公共施設でも青少年施設以外の地区センターやコミュニティハウスなどや、商店街の空き店舗、学校の空き教室などでも可能である。

要は、青少年がこうした施設を敬遠しているわけではなく、大人から必要以上に監視されたり、文句をいわれたりする気がして足が遠のいているだけなのある。

そうであれば、問題は、これまでの施設の運営方針や地域の大人たちが青少年にアプローチする仕方が間違っていたのであり、やり方次第によっては、青少年の居心地がよい場所をあちこちで作り出すことは可能である。現実にNPOや市民団体によって、公園での冒険遊び場や商店街の空き店舗を利用したたまり場づくりが実践されている。ならば、こうした施設が青少年にとって居心地の良い場所になるように、子どもの居場所を、取り戻していく運動や取組が必要である。

その意味では、青少年からその場を奪った市民利用施設において、青少年の場を作り出すようにしくみを変えていくことが重要で、きっかけづくりやコーディネート役を担う行政の役割は大きいのではないか。

（2）住民による運営を

しかし、もともとよく考えれば、青少年施設が多く存在し、多くの有給職員がファシリテーターとして青少年を支援できればこしたことはないが、社会の経済状況によってそれは常に保障されるわけではないのである。青少年施設があることは、地域の大人達が子どもの成長を行政や施設職員に託していることになってしまうし、それが当たり前だとすれば、地域の親や大人達が、青少年の教育に関心をもたなくなる可能性もあるのである。青少年施設は青少年にとって、大きな効果を発揮するけれども、学校教育のように子どもの学力向上を教師に期待するのと同じように、青少年施設職員にすべての青少年の育成を期待できないわけであるならば、基本的には青少年の社会教育の担い手は、地域の大人達でなければならないのである。

この点を青少年施設職員は意外と忘れがちである。

そうであれば、青少年施設は、子どもにとって居心地のよい場として機能はできても、本来的に親の教育力や地域の大人の教育力を直接的に向上させられないという点で限界性があるのである。こうしたことを意識して仕事をするかしないかは、青少年施設職員の構えとして大きく違ってくる。市民活動支援ｾﾝﾀｰと違うのはこの点である。

だからこれからの、地域の青少年施設は、子どもの親へのアプローチを可能な限り行っていくべきであろう。放課後の児童の健全育成施策としての、はまっ子ふれあいスクールや学童保育などをみても、母親の就業支援という要素が強調されているが、大人の教育力の向上へのアプローチが忘れられてはならない。

近隣に親がいれば、利用する青少年と親との交流や、親自身による子どもへの関わりを促すような働きかけを行うことで、大人や地域の教育力の向上に寄与すべきである。

また市域に１つしかない施設であれば、あちこちの地域で子どものための主体的な活動づくりに取組んでいる市民活動団体と連携して、そうした活動を普及啓発する活動を展開するとかして、本来的な青少年の育成の担い手である大人や親の市域全体の教育力の向上に寄与すべきであろう。

よく考えると地域の公共施設とはどうあるべきなのだろうか。

日本の歴史の中で、公共のことは役所がやるものという意識が強かった。だから青少年施設を作ればそれは、役所が運営するものという意識である。「施設」という字は、「ほどこしをもうける」と書く。すなわち、日本の場合、施設とは役所側からは住民の面倒をみるものという意識が強く、住民側も面倒をみてくれるものという意識が強かった。これが欧米では、違う。施設は自分たちのもの、自分たちで建設して運営するものだという歴史があった。

これからは、日本でも、公共施設は住民のためのものなのだから、自分達で大切に運営し利用していこうというふうになっていかなければならないし、そういう傾向は強くなっていくものと思う。

そうであるならば、住民が利用する地域施設は、住民自身の手によって運営されていくしくみがつくられなければならない。

運営経費の面でも住民が出し合って支えていく。そうしたときに、青少年施設も住民自身の手によって運営されれば、そこで、大人達が青少年の成長を助ける手助けを真剣に考えていくだろう。

これからの住民施設とはそういう方向で運営されていくべきであろう。

野外活動センターや野島青少年研修センターなどの機能別施設は、青少年の集団体験活動の支援など特定の目的をもった施設であり、青少年自身の成長を促すのに効果的な施設である。特に野外における宿泊を伴う集団体験が、青少年の仲間づくりにとって有効であることから、今後は積極的に利用が図られるようにしていかなければならない。

５　青少年交流センターの位置付けとこれからの方向性

（1）地域の資源の有効利用を

青少年交流センターは、中高生にとっては地域の日常的な交流施設であるから、横浜市の各方面別に、中高生が日常通いやすいターミナルの近くに設置されるのが望ましい。

しかし現在は、市に１館しかなく、今後も整備の計画はないのである。新たに青少年施設を建設し、運営していくだけの余力は横浜市にはない。東京都の各区の児童館のような施設を整備する財政状況にないのだから無理である。

こうした中で、もし公的な責任で中高生など青少年の居場所を整備していくことが必要だという首長の判断があった場合にはどういう方法で拡大していくことが可能であろうか。

第１の方法は、既存の地区センターや旧青少年図書館などの市民利用施設の一部の部屋を、青少年が気軽におしゃべりできたり、興味や関心のある音楽・スポーツなどの活動ができるように改造し、施設職員は、青少年を監視したり、施設から遠ざけたりしない方針で運営することである。

できるならば数多ある市民利用施設のうち中高生が立ち寄りやすい場所にある施設を、各区１か所ずつ選定し、青少年の利用を優先してできるようにするならば、なお良い。

第２の方法は、遊休化した学校施設を活用し、青少年が気軽に活動できるものとして整備することである。それは小中高校であるが、場所によっては青少年が立ち寄りにくい場合もあるので、施設職員の工夫が必要である。これには既存の学校に整備されているコミュニティハウスを青少年が利用しやすいものに整備し直していくといったことも含まれる。

実際の例として、横浜市の中学校区に一つの割合でコミュニティスクールを設置しているが、その中で中区の本牧中学校コミュニティスクールの場合、スタッフと住民が組織する運営委員会の努力と中学校側の理解によってスタッフが尽力した結果、中学生から 20 歳代までの世代の利用者の割合が 68%と高い割合を示している例が紹介されている。（久田邦明　「青少年施設の現状と可能性」を参照）

やればできるのである。こうしたことになぜ行政は気がつかないのだろうか。

結局は、青少年の育成とは場の整備だけではなく、むしろ人の整備につきてゆくのである。

中学生などが地区センターで騒いで迷惑しているという苦情が中学校に寄せられているという。そういう施設側(住民もいるかもしれない)の姿勢をそのままにしていいのか。

横浜ボランティア協会職員は、公共施設の再整備を企画する権限もないし、地区センター運営委員会に物申すこともできない。しかし、こういう現状と直すべき方法の提言は、嫌われるのは覚悟で行政担当部局に言っていかねばならないのではないか。

小学生のための場の整備としては、横浜市でも、はまっ子ふれあいスクールや学童保育のあり方の検討を含め、整備していく姿勢が出されており、これらの場で、子ども達の主体的な活動が展開できるように人の整備のし直しを土台に、施設の運営の仕方、事業のやり方、お金の使い方を見直していくべきである。

小学生のための地域での交流の場は、既に述べたように施設だけにとどまらない。地域の公園や遊び場での仲間作りの活動もあるし、商店街の空き店舗を活用した子どものたまり場づくりもある。その場合には、子どもの主体的な活動に関わる市民のエネルギーや民間施設などの資源の有効活用ということがどうしても必要になってくる。

2003 年度横浜市予算の中で新規に計画されている、子どもの遊びサポート事業（市内の公園などを活用し、地域の大人が自主的に取組む子どもの自由な遊びの活動を支援）や、まちの教育力の活用（土曜日に学校施設でボランティアにより、体験学習機会を提供する土曜塾を支援）などの事業は、その一例である。

今日のような非成長非拡大の時代だからこそ、なお一層、青少年の交流の場を広げていこうとしたら青少年交流施設という枠の中でのみ、青少年の育成の問題を考えるのではなく、市民という人材の活用と民間の遊休施設の活用といった「民」の力の活用の中で積極的に考えなければいけないのである。

いまさら言うまでもなく、これこそが本来的な市民の市民による青少年のための社会教育を目指す姿であろう。

（2）青少年の交流の場を拡充する

このように考えていけば、青少年交流センターの位置付けや今後の拡充整備の方向なども、単なる青少年施設の新規建設促進といった観点からでなく、「青少年の主体的な活動が可能となる交流の場の整備」という観点からの将来展望をすることになるし、またその場合、現在、横浜市に１つしかない青少年交流センターを運営する横浜ボランティア協会の今後、果たして行くべき役割というものも、おぼろげながら見えてくるのではないだろうか。

考えられるいくつかの青少年の交流の場の拡充計画は次のようなものが考えられる。

① 中高生の交流施設が市内の地区センター、コミュニティハウスなどの中に地域的バランスを考慮して整備されるケース

② 公立の児童館が横浜市にない中で、小学生を中心とした交流施設が、学校施設を活用した、はまっ子ふれあいスクールや学童保育、コミュニティハウスや地区センターの中に整備されるケース

③ 商店街の空き店舗や地域の町内会館などの民間施設を活用して、児童の交流の場が整備されるケース

④ 青少年にとって専用の建物の整備ではないが、「青少年の主体的な活動ができる場」づくりとして、地域の公園などの野外で、特に小学生などが遊びを通して日常的な仲間作り活動の場を地域の大人たち市民の力を得て、整備していくケース
これには何も公園などだけでなく、地区センター、コミュニティハウスなどの施設を活用するケースもある。

⑤ 家庭や地域における大人の教育力を将来的に高めていくことを念頭におきながら、地域で親や教師以外の大人が参加するしくみをつくり、「青少年にとって主体的で魅力ある活動」を支援していくケース（具体的には、横浜市の施策「土曜塾」のようなもの）

そうすると１館しかない青少年交流センターを運営する横浜ボランティア協会が今後、果たしていくべき役割としては、次のようなことが考えられる。

第１に、上記の①のケースを想定すると、交流センターは地域施設での青少年交流の場の運営に対して青少年の主体的活動が可能となるよう指導的な役割を果たす。これは東京都杉並区の「ゆう杉並」が区内の児童館の統括と連絡調整機能を果たしているのと類似した役割である。

第２に、上記の②のケースでは、2003 年度の予算や機構改革で区役所の機能強化の一つとして、「学校支援

連携担当課長」が配置され、土曜塾などまちの教育力の活用事業への人的資源の学校教育への活用の支援などを行って行くことが予想される。はまっ子ふれあいスクールなども支援していく区もあるかと思うので将来的には区役所と学校との連携もうまくいくであろう。

ただ区役所や学校の担当者の地域の青少年への育成機能が、どの程度高まるかは分からない。そこで、協会としては、これらの現状を把握し、本当にこれらが、青少年にとって主体的な活動の場となっているかどうかを検証し、そうでないならば、どうしたらそうなるかを外部から提言したり区役所にかかわっていき、横浜市全体として青少年の交流の場が活きるような役割を果たしていく。

第３に、上記の③や④や⑤は、実はこれから将来にかけて、一番、力を入れてやっていかなければならない。つまり、地域のあちこちに、「青少年の居場所づくり」をしかけていくことである。地域の親や大人や青年たちの力を生かして整備していくきっかけ作りや環境整備をしたり、頑張っている市民団体を応援したり、悩んでいることの相談に乗り、人材面、資金面などでコーディネートし、活動を支援していくことである。

既に述べたように、本来的に青少年の社会教育の担い手は、地域の大人たちである。そうした人達を支援することが、青少年交流センターが最終的にたどり着く、もう一つの目標ではないだろうか。

現在の青少年交流センターを当面は、青少年の利用で一杯にすることが、今、我々に課せられた一番の課題ではあるが、将来的には、それだけでなく、横浜市内のあちこちで頑張っている市民の「青少年のための居場所づくり活動」を支援したり、これからそういう「居場所作り活動」をしていきたいという大人達を支援する役割を果たしていくべきでないか。

そうであれば、ゆくゆくは、地域で青少年のために居場所作りをしようとしている市民団体の状況を調査・把握して、交流・連携したりする場、ネットワークの場を、交流センターの中に作ってやればよい。エネルギーのある大人が連携して、これから地域の中で居場所をつくろうとしている市民を応援していくであろう。そういう市民と市民のパートナーシップの場、市民によって市民の活動を支援するしくみができていくであろう。そういう大人と大人が連携して、横浜の家庭と地域の教育力を高めていける場づくりを協会が交流センターをきっかけにして、やっていけたら素晴らしいではないか。（青少年のじゃまにならない範囲であるが。）

先進都市の事例では、東京都の渋谷区で中高生の居場所づくりをしている「渋谷子どもの居場所づくり実行委員会　＝　愛称を「渋谷ファイン」と呼んでいる　」をイメージ してもらうと分かる。公共施設を借りて、区内７地区で大人が放課後週１回くらいから毎日のペースで行っている「たまり場」活動である。地域のイベントに参加する一方、学校週５日制を迎えて「土曜クラブ」も各地に生まれている。

1998 年に上原社会教育会館の講座「中高生倶楽部」がきっかけで、始まっている。翌年この講座に地域の有志が加わり、「地域で子どもを育てること」を目指して「上原ファンイン」が誕生した。いつでも気軽に立ち寄れる場なので不登校のこどもたちも参加するようになった。そして翌年、この活動が渋谷区内７地区に広がった。活動の内容は、①たまり場活動　②サークル活動（バンドなど）　③体験活動（地域のお祭りの参加、自然体験やボランティア活動など）である。地域の青年や大学生たちがユースパートナーとして、これらの活動を支えている。不登校や障害を持つ子も参加できるようサポーターとして、小児科医や心理学を学ぶ学生をピアサポーターとして、置き、学校や関係機関と連携しながら進めている。

「子ども達の成長に地域の大人が少しでもかかわっていきたい」「できることをあまり無理をしない範囲で」「できれば継続性の高い活動を」「子どもたちがゆったりでき、その後、元気を取り戻していけるような場所」という想いを抱いて活動してきた。

渋谷ファインに学ぶべきは「主な活動の場として、子どもが地域の公共施設を利用できるように、こころある大人が一緒に考えて、サポートしていくこと」「新たな施設をつくるのではなく、また既存のマンパワーを少し方向性を変えて活動の中心にし、あまり無理をしないで、可能な限り、対応していくこと」という基本方針である。通常のスタッフはスタッフと呼んでいる地域のおじさん、おばさんが全体で 80 名ほどで青少年委員、PTA 関係、主婦、企業 OB など多様な仲間だという。（　鈴木　仁「渋谷ファインの自己紹介」参照　「青少年」2002 年７月号　）

第４に、上記の⑤では、2003 年度の横浜市の新規事業としての「まちの教育力の活用―土曜塾の推進」を各区を中心に推進していくこととされている。渋谷ファンインのように、行政がうまくきっかけづくりや環境整備をしていければよいのだが、どうであろうか。また同様の新規事業として、「子どもの遊びサポート事業」は市民局青少年部が所管となる事業で、横浜ボランティア協会に協力依頼があるので、積極的に関わっていくべきである。

６　野島青少年研修センターの位置付けと方向性

野島青少年研修センターは、青少年自身の宿泊による体験学習・活動の場であり、青少年指導者・育成者のための宿泊研修である。ただ、野島という自然環境を生かした野外の体験活動を通じて青少年の交流を図り青少年育成の機能ももつ施設であることに着目すれば、青少年施設の中では、野外活動体験という機能をもった野外活動施設という位置付けができる。

その意味では、類似の機能をもった教育委員会所管の市内外の施設と同一線上に位置付けられる。（三ツ沢　、大池、くろがね、の市内野外活動センターと、南伊豆、赤城、の少年自然の家）ただし、主として学校教育の一環として行われる体験学習のための施設としてよりも、青少年と大人のための社会教育施設としての機能を積極的に展開することが必要である。

その場合、野外・自然体験活動、宿泊による集団活動ができる設備と環境を備えていることから、地域の施設では効果が期待できない体験が可能となったり、宿泊という共同生活体験を通して、より社会性を身につけるのに効果的な機能を有している。

青少年にとっての日常の居場所である地域の青少年施設などと、これらの野外活動施設とが相互にあいまって、青少年の成長を助ける効果をあげていく必要がある。

野外活動施設としての役割は、野島青少年研修センターの基本運営方針にもあるように、青少年の様々な集団による宿泊体験活動の場を提供する役割自然環境を生かした魅力ある体験事業の場を提供する役割のほか地域施設として、周辺のボランティア・市民活動団体と連携し交流する役割や施設の利用サービス等を、青少年やボランティア・地域と協力し運営する役割をも念頭において活動することで、より効果をあげることができるだろう。

特に市内の野外活動施設は、それぞれ置かれた環境や地域性も違う。これらが連携してそれぞれの特徴を生かして活動すればもっと良い効果が期待できる。その意味からすれば、横浜市のこうした野外活動施設の相互の連携体制を確立することができないだろか。野外活動施設の交流や研修を通して、横浜の青少年に対する野外教育や自然体験学習をより中身の濃いものにできると考える。

あえて言わせていただければ、横浜市が設置している市内外の青少年の野外活動施設の運営をすべて横浜ボランティア協会に任せてもらえると、青少年の成長にとってより良い効果が生まれると思うのだがどうだろうか。現在、野島青少年研修センター以外の施設は、教育委員会が所管する（財）横浜市スポーツ振興事業団が運営している。しかし事業団の団体としての性格が、青少年の育成ではないため、十分な専門的な対応や研究がなされているか疑問である。

ただし、単にそのまま移管するというだけでは、実現しない。移管する以上はこういう面で青少年にとって効果があるとか、また、移管することで執行体制がこれだけ省力化できるとかのメリットがないと、横浜市もそう簡単には、決断しないと思う。

そうした確実な実証が示せるようになるためには、まずは横浜ボランティア協会の側から他の野外活動施設と交流の機会を設け、どのような連携をとれば、どんな効果が生まれるのかということを調査したり、研究したりすることをはじめてはどうだろうか。

７　これまでの横浜ボランティア協会の青少年事業の反省

（1）体験活動のプログラムについて

これまで青少年交流セミナーの今後の方向性を考えてきたが、それと横浜ボランティア協会が行ってきた青少年対象の事業を振り返って、つけあわせてみると、いくつかの反省点が浮かんでくる。

第１には、青少年を対象とした体験活動の機会を提供する事業の呼びかけ方の問題である。

これまで横浜ボランティア協会では、横浜市域全体を対象にして青少年の参加者を募集してきた。例えば中高生のサマーアクトである。なぜ市域を対象に呼びかけるのかである。

その際に吟味しなければならない第１は、その事業の効果をどう考えるかである。中高生の職業体験学習の機会を提供する事業の例をあげると、金沢区並木中学校の２年生155人が２月の２日間、地元の病院、商店街、郵便局、八景島シーパラダイスでの飼育業務など34の店舗や事業所で、総合的学習の時間の一環として行ったことが新聞記事で取り上げられているように、どこでもやれるようになっている。

渋谷ファンインの一つ、せせらぎファンインでは、地域の高齢者施設での野外炊き出しと喫茶ボランティア、

バンドとヒップホップダンスを組合せた活動を、地域のユースパートナー、プレイリーダーが支援している。
原宿ファンインの土曜クラブでは、基礎から学ぶ英語、表参道元気祭ヨサコイ踊り参加、原宿の街の自然のウオッチングが大人のスタッフにより日常的に行われている。
これだけ地域で実施できている状況があるなかで、あえて市域でやるならば、よほど地域では体験できないものや青少年が飛びつきそうな魅力あるものでないと、やる価値がないというのが一つ。
もう一つは、こうした活動は、渋谷ファンインのように、日常的に継続できる方が青少年の成長を助けるのならば、地域で展開した方がよいこと。そしてさらに言うと、ボランティア協会の職員が企画するよりも、地域の大人のスタッフによる実行委員会で運営された方が、本来の社会教育の本質や親や地域の教育力の向上に適っているということが言える。
このように考えると、市域全体を対象に呼びかける意味がある事業とは、

① 地域やほかの場所ではなかなか得られない、相当魅力のある事業で、募集したらわんさと殺到するくらいの事業であること（そのため、相当の経費がかかっても効果が絶大ならやる価値がある）
② 同じく青少年を対象にするにしても、単なる参加者の募集ということでなく、リーダー養成とか、各地域同士の交流とか、ワンランクアップを目的とした事業であることでないと市域でやる意味は薄れると言える。

継続的な活動にならないとかいうことは今までも協会内部で議論されてきた。
そのとき、対抗して言われてきたことは、ボランティア協会が行うサマーアクトは、他の機関がやるのと違って、青年リーダースタッフを募集し、その青年たちに関わらせるところに特徴があるから続けるべきだという意見が多かった。それも今日では、各地域において大人や青年のスタッフによる継続した活動がいくつかの市民団体によって行われるようになってきているのである。

（2）事業の見直しを

第２には、先に上げたように市域で行っている事業が、青少年にとってワクワクするほど魅力ある事業となっているかという内容の問題である。
横浜市が行ってきた少年洋上セミナー事業は、単に異なる学校の中学生同士の交流というだけでなく、長期にわたって野外における集団宿泊体験という活動を通して社会性を身につける、野外体験事業としての魅力ある事業であったと思う。だから、何倍もの応募者があったし、役員を含めて 600 人が参加する
事業に 5000 万円をかける価値があった。1 人につき 8 万円である。
人件費を除きこれだけの経費を特定の人間に対してかけるのはそれだけの効果が得られるからとの判断があったと思う。（青少年交流センターの年間運営費は人件費を含め 8000 万円である。利用者が 3～5 万人だとしても比較にならない）
サンディエゴ青年国際交流事業なども、スタッフを含め 15 人で 300 万円の事業である。
少年洋上セミナーが始まった昭和 57 年頃は、国際化などの推進が言われ青年の海外派遣事業が盛んだった。その 4 年前の昭和 53 年(1977 年)頃にようやく日本人の海外旅行者が年間 100 万人を突破したと言われた。ところが 2003 年の海外旅行者は、この不況の折でさえ、年末年始だけで 140 万人を突破している時代である。高校生の海外留学制度はどこの私立高校でもやっている。飛行機で沖縄やｸﾞｱﾑ島などへの家族旅行は当たり前の時代である。
青年の国際交流事業も転機を迎えている。IT の進展により、海外の友人ともメール交換できる時代である。進んだ大学では、海外の大学生と交流を望む者に、必要なデータとメールアドレスを提供し、自由に論文交換をさせており、本当に会って交流したいと思った大学生同士で交流させている。
神奈川県の青年海外派遣も、集団で外国へ行って、ウエルカムパーティーとかお決まりの行事を行うのではなく、本人たちが本当に海外へ出て社会貢献したいテーマを自分でみつけて、自分一人で海外の受け入れ機関と交渉させて、それから一人で渡航し、その結果をレポートさせている。
そうしたときに、しかも、この不況のおり、あえて少年洋上セミナーをこれだけの経費をかけて実施するならば、相当の成果を上げなければいけないであろう。参加した中学生に将来の青年リーダーを期待してきた。サポーターの応募が、団員 10 人に対して 1～1.5 人で、サポーターとして乗船できるのが過去の団員 10 人に 1 人である。過去 1 万人の団員が経験して、そのうち 1000 人がリーダーを経験している。そのリーダーは今、どこで何をしているのか。

その効果は目にみえない形で、この横浜に根付いているとは思うが、一方で、親や大人はどれだけ変わったであろうか。横浜海洋少年団の鈴木団長（協会の理事）が少年洋上セミナーの保護者説明会にいつも出席してくださるが、そこで現代の親を嘆くのである。そのとき出される質問の内容が、子どもを過保護にしているような質問ばかりである。「こういう質問が出るようでは、子どもは変わらないね。」「どんな教育をしているか分かるね。」「恥ずかしくて目を覆いたくなるね。」といって苦笑いするのである。

少年洋上セミナーは、親の教育力を変えられなかった。それでは、少年洋上セミナーに参加した子どもたちが大人になり、親になり、自分の子どもをもったときに、子どもにする教育に期待するしかないではないか。

そうであれば、人間教育には、20年以上かかるのであろうか。

確かに少年洋上セミナーは横浜市内の少年５団体の指導者のチームワーク形成に大きな効果をあげた。そして確実に乗船団員の青少年に育成効果を与えてきた。だから、この事業への熱い思い入れがある人も多い。ただ、それだけに、横浜の少年団体の指導者の皆さんは、力が余っているということだろう。

自分の団体の構成員だけでなく、横浜の青少年育成に寄与したい、いやそうしなければいけないと危機意識を持っておられる方はたくさんいる。ならば、そうしたエネルギーを地域の青少年に生かせるように、横浜市やボランティア協会がほかの仕掛けをしなければ、もったいないのではないか。

青少年がワクワクするほどの野外活動体験事業を市域で行い、青少年を対象に募集することは必要である。横浜ボランティア協会でもキラリと光る事業を２年に１事業くらいという意気込みで、横須賀市の猿島に調査を行い、そこではなかったが行ったのが2001年度のヨコハマの海と子ども事業であった。

もっと冒険心に富んだもの、感動を呼ぶもの、みんなで助け合えるもの　他のどこでもできないものを企画していくことが青少年育成に携わるものに先鞭をつけることになる。

これまで横浜ボランティア協会の職員は、自分たち職員が青少年を直接対象にして育成していかなくてはならないと、意識しすぎてはいなかっただろうか。それが、市域を対象に青少年事業を企画・実施することに専念させてきた。ただ、今まではそれでよかったと思う。そういう事情もあった。

会員を増やさねばならないし、青年の登録ボランティアも増やさねばならない。そのためには事業を数多くやらねばならない。職員の人数も少なく、やりたいこともできなかった。

しかし、青少年交流センターという市域の施設も受託した。昔よりも少しはスタッフも増えて、相互の役割分担や事業についても考えられるようになった。

だから、ここで、原点に返って考えてみよう。青少年の主体的な活動とは何で、どこで展開されるべきか。青少年のための社会教育活動の担い手は誰か。青少年施設の役割は何か。横浜ボランティア協会の職員の役割は何かと。

（３）支援者の輪を広げる

でもこれから横浜ボランティア協会が、事業を実施していく上で、是非、やらなくてはならないことが３つある。協会の事務局職員を助けてもらうボランティアスタッフや専門指導者の講師陣を増やすことと、青少年行政担当者への積極的な働きかけを行うこと、協会の事業や活動を積極的なメディアの活用により、市民に公開し多くの市民や青少年に、横浜ボランティア協会をアピールし、共感と賛同を得、協会がなくてはならぬ存在であることを市民自身の口から、行政に対して言ってもらうことである。

これから協会が、青少年施設の運営を通じて、青少年の成長を助けたり、地域の様々な市民団体の活動を支援し、家庭や地域の教育力の向上に寄与していこうと、きっかけづくり、環境整備、コーディネートをしていく場合、すべてを職員のみで行うと広がっていかない。そこで、強力な協会への支援者の輪を広げていかねばならない。

また、今まで述べてきたような青少年施設の将来方向や、地域の主体的な青少年活動が広がるためにしなければいけないことを、協会だけで考え、動いていくのでなく、青少年行政担当部局などへ常に問題提起し、意識を喚起し、施策へとつなげていくような働きかけを粘り強くしていかねばならない。

そして、何よりも多くの市民や青少年を横浜ボランティア協会の味方につけることである。そのためには、できるだけ多くの青少年や地域の人々と協会職員が会い、話し合い、共感し合うことが必要である。可能な限り、街へ出よう。地域を見て歩こう。市民と交流しよう。

８　横浜ボランティア協会の青少年事業の将来の拡大に向けた展望と協会内の青少年部門相互の連携

今まで述べてきたこれからの事業の方向を実現するのは、青少年交流センターのスタッフだけで進めていくわけではない。協会内の野島青少年研修センター、青少年活動課、青少年交流センターが一体となって連携してできることである。そして、今までのことを振り返ると、３つの部門はバラバラに事業を展開する部門ではなく、実はきわめて、緊密に関連していることに気がつく。以下はいくつかの事業の展開と関連図である。

【図２】青少年交流ｾﾝﾀｰの目的である、地域の青少年の主体的な活動を支援する目的から考えられる施策の展望と青少年部門の連携図

（市域ﾚﾍﾞﾙ・地域ﾚﾍﾞﾙ）　　（区域ﾚﾍﾞﾙ）

青少年交流ｾﾝﾀｰ

○　中高生の交流施設の運営
○　都市の青年活動の拠点
○　周辺地域住民・青少年の運営参加
○　地域の居場所づくりを推進している団体などの交流と連携の場を提供
○　不登校・ひきこもり児童の活動の場を提供

地域の公共施設等を活用した居場所づくり→　地域の住民が担い手

地区ｾﾝﾀｰ　ｺﾐｭﾆﾃｨﾊｳｽ　はまっ子　学童保育
学校の遊休教室　商店街の空き店舗
遊び場における仲間づくり
（2003 年度施策名　まちの教育力の活用・土曜塾
子どもの遊びｻﾎﾟｰﾄ事業　はまっ子ふれあいｽｸｰﾙなど）
↑　支援

青少年活動課　←　連携　→　**学校や区役所の学校支援・連携担当**

地域の居場所づくりを支援
○　子供の遊びｻﾎﾟｰﾄ事業のﾈｯﾄﾜｰｸ
○　各地域における居場所づくり事業の現状と担い手の悩みの把握
○　各地域居場所づくりの担い手・ｻﾎﾟｰﾀｰ同士の交流の場、研修の場の提供
○　子供の主体的活動事例集の作成と啓発
○　居場所への専門指導者・講師の派遣・紹介・研修（少年団体の指導者などの力を活用）

区役所は地域の人材発掘面などで支援
学校や地域はﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ企画面で協力

教育委員会、子育て事業本部

本来的には左の青少年活動課に掲げた事項を実施する役割があるが、専門的にできない場合、協会が担う余地はある

市の不登校・引きこもり児童を支援する事業への協力
○　交流ｾﾝﾀｰにおける活動のﾌｫﾛｰｱｯﾌﾟ
○　青年ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱの拡大と研修協力（大学Ｖｾﾝﾀｰ連携など）
○　NPO 団体などの相互の場の提供

→　連携

教育委員会　教育総合相談ｾﾝﾀｰ

2003 年度ﾊｰﾄﾌﾙﾌﾚﾝﾄﾞ事業

【図３】野島青少年交流ｾﾝﾀｰの目的である青少年の体験学習・活動の場、また野外活動施設として魅力ある体験活動の場を提供する目的から考えられる施策の展望と青少年部門の連携図（市内外の野外活動施設の管理運営を横浜ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ協会に受託させてもらえた場合）

野島青少年研修ｾﾝﾀｰ　ｾﾝﾀｰの管理運営と自然環境を生かした体験事業の実施

青少年活動課　他の野外活動施設を含め、その統括管理事務を行うとともに横浜の青少年に対して魅力ある野外体験活動の場が提供できるよう、学校　地域の団体などに向けてﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑや人的な面での支援を行っていけるような役割を果たすことが考えられる

○　横浜市の青少年の主体的な活動を支援したり（市民による地域の居場所活動を支援する）、青少年にとって魅力ある野外活動をはじめとした様々な体験活動・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動を支援する目的を鮮明にする視点から

考えられる協会の展望

上記が名実ともに実現するには、そうした役割を横浜市から認知してもらい、市民に対して知らせていく必要がある。それには、どうしてもそれにふさわしい名称が必要である。協会の青少年活動課はこういう事をしていますというだけでは、市民や行政の各部局からは、問い合わせが来ないのである。

そこで、協会の青少年活動課の役割にふさわしい名称は、

横浜市青少年体験・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動支援ｾﾝﾀｰ　か　横浜市青少年活動支援ｾﾝﾀｰ

である。市民活動課は横浜市市民活動支援センターの管理運営を行っている。だから、最近は市民はもとより、行政の各部局から問い合わせや相談、協働事業の申し入れが多くなっている。

したがって、上記の看板を青少年交流センターの横に掲げさせてもらえるよう行政に働きかけていく必要がある。

９　横浜市の青少年施策の歩みと反省、2003 年度以降の新たな取組、そしてﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ協会の取組み

（1）１９７０年代初頭の青少年施策

昭和 47 年(1972 年)頃の青少年健全育成施策は、次のようなものであった。

青少年の場づくり　→　青少年施設の運営（青少年の家　青少年図書館　青少年会館　勤労青少年ｾﾝﾀｰ　青少年陶芸ｾﾝﾀｰ　青少年施設整備補助金）
子供の遊び場の設置・運営（ちびっこ広場　ちびっこﾌﾟｰﾙ　子供の遊び場　少年広場　ｽﾎﾟｰﾂ広場）
青少年の仲間づくり　→　ｼﾞｭﾆｱｸﾗﾌﾞ　ｼﾆｱｸﾗﾌﾞ　児童文化教室　児童文化ｸﾗﾌﾞ
青少年の指導者づくり　→　市・区ｼﾞｭﾆｱﾘｰﾀﾞｰ研修　市・区ｼﾆｱﾘｰﾀﾞｰ研修　青少年団体育成者ｾﾞﾐﾅｰﾙ　少年団体県外研修　青年国内研修
青少年指導者の派遣　→　青少年巡回指導者協会の運営
青少年の団体育成　→　市・区少年団体連絡会　青少年団体補助金(運営・事業費補助)　資金支援
青少年育成の組織づくり　→　市・区青少年指導員　母親クラブ
外国青少年との交流　→　日独青少年交歓
留守家庭児童対策　→　学童保育
青少年の保護育成　→　青少年相談ｾﾝﾀｰ　社会環境浄化活動　市保護司会助成　少年補導員助成
青少年問題の企画・調整　→　青少年問題協議会
青少年啓発広報誌の発行　→　「すくすく育て」の発行

この後、昭和 48 年から赤城山市民野外活動センターの運営が開始され、昭和 49 年に横浜ボランティア協会を外郭団体として設立し、その事務局が青少年課におかれ活動を開始し、昭和 53 年には野島青少年研修センターが野島公園にオープンする。これらの仕事を課長、副主幹　2 係長　職員 10 人でやっていた。子ども科学館が誕生するのも、昭和 50 年代である。

今日の市民局青少年部と比較して、変わっているのは、小学生の体験学習や国際交流などの必要性から横浜市少年洋上セミナー、YYCC が始められ、野島青少年研修センターが大型化された。また青少年団体育成の面では、青少年育成センターのオープンがある。

こうしてみると、少なくとも 30 年前の青少年施策の方が総合的である。

（2）横浜ボランティア協会に期待されたこと

ところが現在は柱はあまり変わっていないばかりか、むしろ、その機能が弱体化したような印象を受ける。

第１には施設面である。既に述べたように青少年の地域施設は市民利用施設に転換された。ただ問題なのは、

そうした施設の管理運営が地域振興部に移管されたことで、管理中心の事務となり、青少年育成の部局が青少年育成の視点から関与できなくなったことである。子どもログハウスを見てもわかる。

また、以前は赤城山野外活動センターが青少年課が所管だったのに、教育委員会に移管され、その後、市内には、くろがねや大池のセンターが、市外には南伊豆に臨海学園ができ野外活動施設にも関与できなくなった。

教育委員会では、それまでの校庭開放が、はまっ子ふれあいスクールとして全校展開されるなど、拡大され放課後児童健全育成のための施設整備がされてゆく。

青少年部がやっていた施策の中でニーズの高まりにより予算が拡大するのは、同じく放課後児童健全育成施策である学童保育である。予算額は、はまっ子で23億、学童保育で11億である。現在の青少年部の予算が全体で19億のうち学童保育11億、子ども科学館4.5億、ボランティア協会4億という状況である。野外活動施設や全市的な地域施設が、青少年部以外の部局で整備、運営されてきている現状が、青少年育成の施策を総合的に考えていけなくしているのである。

第２にはソフトの施策面である。この間、青少年団体へ加入する青少年は激減してきた。

高校や大学の進学率の上昇。豊かな社会の実現と塾や各種の教室の氾濫。学校へ過度の期待がよせられた結果、様々な諸問題の生起、そうした中での子どもたちの主体的な活動を支援する大人やNPOの活動が芽生えてきている。

30年前も子供たちの主体的な活動をどう支援するかの試みはされてきた。子供会などのジュニアリーダーとして大人たちに使われる前に、中学生や高校生の仲間同士の活動が前提にないといけないということから、そうした少年団体とは独立したジュニアクラブ、シニアクラブを各区できっかけづくりとして結成することが進められてきたし、児童文化教室もそうであった。

それが今日の一部の区でみられる「青少年チャレンジ事業」やかつてのボランティア協会の「高校生合宿研修会」そして、「中高生サマーアクト」につながってきたのだと思う。

そして、現在、地域のあちこちで、市民の活動が始まっている。こうしたことをなぜ、全市的に浸透させようとしてこなかったのだろうか。

横浜ボランティア協会という団体を設立した以降の、市と協会との施策面での連携や協働がなかった。指導者確保や育成の面で、なぜもっと市と協会との間で活用し合わなかったのだろうか。

横浜ボランティア協会が設立される前には、青少年巡回指導者協会という任意団体を行政主導でつくり、事務局員１人を置いて、青少年課で地域からの指導者派遣のコーディネートを行っていた。当初はこの団体は、青少年の家巡回指導者協会といって、青少年の家を定期的に巡回し、集まる子供たちにゲームや工作、レクリエーション指導を行っていた。この団体のあり方には問題もあった。私見でいうと次のようなことである。

第１には、派遣する指導者のあり方の問題。

地域の子どもたちの主体的な活動を支援するはずのものが、どうしても子供たちをゲームやレクリエーションで遊ばせてしまっていたこと。また派遣指導者が便利屋として、いつまでも頼られていたら地域の教育力は高まないので、派遣指導者がファシリテーターとしての役割が求められていたこと。派遣指導者が、レクリエーション協会　YMCA　ボーイスカウトといった団体の立派な大人の指導者で、えらすぎたことで、もう少し幅広く青年層のボランティアや専門的技術を有する講師団などを組織する必要があったこと。

第２には団体の性格の問題。

もう少し市民のエネルギーを発揮させるような開かれた組織にして、市民自身の運営によることが望ましかったこと。

そうした問題を解決することもボランティア協会設立の趣旨の一つにあった。それで、社団法人を設立したわけであり、ボランティアの登録制度や派遣制度とか、協会の会員の拡充ということを盛んに行っていったのであるが、その後の横浜市の施策の変化の中で、市と協会が全市的な視野にたって、指導者やボランティアの問題を協力し合ってきちんと考えていたら、もう少し良い案が出ていたのではないだろうか。

前からも、そして最近でも良く聞く話であるが、この前、市ヶ尾の市民活動支援センターのブランチで、コーディネーターとの話の中で出た問題がある。

ある学校のはまっ子ふれあいスクールでの地域の大人と指導員で出た話であるそうだが、はまっ子ふれあいスクールに青年のボランティアがかかわることができないだろうかという話をしたというのである。学校長のOBのように高齢者よりも、若い人の方が子どもの遊びを支援する上で、効果的なので、これからは、そういう青年を導入できたらいいねというのだそうである。市ヶ尾にそういう相談があったのだが何とか支援できたらいいんですがねということだった。

既に自主的に青年を探している学校もあるだろうし、協会にも紹介依頼はある。そういうことをどうしたら全市的に広げていけるかということを行政や協会が一緒に検討していたら、もっと早く進んでいたと思うのである。

（3）２００３年度の予算案と中期政策プラン

２００３年度の横浜市の予算案や中期政策プランをみると、今まで指摘してきた問題点を少しでも解決できそうな取り組みが随所にみられるのである。

第１には、効果的に施策を進める組織体制を整備したこと。

① 子育て支援施策を集中的に行うため子育て事業本部をつくり、各局から重要施策を集めて実施する
その中の一つに放課後児童健全育成施策のはまっ子ふれあいスクールと学童保育を担当する放課後児童育成課を設置した。これで教育委員会と市民局との縦割りがなくなるし、たくさんの事業を担当する市民局長などに任せるよりも、素早い判断ができる。

② 区役所に学校支援・連携担当課長を配置し、学校が行う体験学習などの事業への地域人材確保に協力したりすることで、学校の活動を地域の側から支援する態勢をつくる。
これで教育委員会と区役所との縦割りがなくなるし、青少年のための事業担当が身近な区役所におかれることで子供施策が区役所で推進される土台ができたことになる。

③ これから横浜市の各区役所では、区の独自の運営方針を区長が作成し、区民に公開していくようになる。区の機能が強化され、予算要求もできるようになる。区の実情にあった施策ができるようになる。
区長には、幹部職員のうち希望する者の中から配置されるようになるとのことである。

第２には、地域の子どもの主体的な活動を支援する環境整備の施策が打ち出されていること、そしてそれは、市民による「民」の力を活用して推進しようとしていること。

公園などで子どもの遊びをサポートする大人たちの活動を支援・推進する事業や、まちの教育力の活用として学校を活用して行う土曜塾の事業、そして不登校やひきこもりの児童を支援する青年ボランティアの育成（ハートフルフレンド事業）などが打ち出されている。

これは行政が直接、子どもの主体的な活動を支援するのではなく、その担い手は地域の大人たちであるという考えからのものであり、それが地域の教育力を育てることにもなり、正しい方向と言える。

また、青少年は地域で育つものであるという基本認識のもとで、施策の展開場所を地域に重点を置いていることである。

（4）横浜ボランティア協会への期待

横浜ボランティア協会は、２００３年度の横浜市予算の動きをどのように考え、どう対応していったらよいだろうか。

上記の施策の中で、横浜ボランティア協会に関わりを求めているのは、子どもの遊びサポート事業のみであり、そのほかへの事業の関わりは期待していない。だがそれでよいか。

今回、横浜市が重点をおこうとしているものは、これまで協会が何らかの形で取り組んできたものや今後、力を入れていこうとしてきたものばかりではなかったか。

はまっ子ふれあいスクールはこのままではいけないということは、前から言ってきた。

不登校などの青少年の教育相談を市ヶ尾プラザでやる中で、児童自身を支援できないか考えてきた。

学校の総合的学習や地域における青少年の主体的な活動のプログラム事例集を地域に提供しようと事業開発委員会で検討し、地域の学校に足場を築けないかと検討してきた。

また、地区センターやコミュニティハウスなどでの青少年の活動支援や相談支援などの足場を築けないかとも考えてきた。コーディネーターをたくさん養成して地域に派遣できないかとか。

青年のボランティアをたくさん確保して、小学校の体験学習や地域の活動に参加を促進できないか、そのために研修委員会で基礎研修を受けさせ、質的向上を目指そうとか。

多くの青年の参加を促すため、地域の大学を訪問したり、大学ボランティアセンターを支援したりしてはと考えてきた。

野島青少年研修センターでも自然環境を生かした魅力ある体験学習プログラムを実施して外部へ啓発するこ

とを考えてきたし、青少年交流センターも青少年の主体的な活動を支援していくことが目的であって、そうした活動が地域の大人たちの支援により、広がっていけることを願っているし、どこかで必ずつながっている。

今回の横浜市の青少年施策を進めていこうとしている方向は、基本的なところで、これまで横浜ボランティア協会が目指そうとしてきたことと、ようやく合致したと考えている。

横浜市全域に、多くの青年ボランティアをごっそり紹介派遣するなんていうことは、協会だけではできないし、そんなことを期待されても無理である。以前、職員会議で検討したように、それは各区ごとに青少年の体験・ボランティア支援センターができて、そこが地域の実情をつかんでやっていくべきである。

そのためのノウハウを持つボランティア協会が、どこかで関われるとよいのである。

ボランティア協会は、むしろ市内の大学と組んで、そこの大学ボランティアセンター間の連携づくりをし、そこに足場を築き、区役所などと連携するとか、やり方はいくらでもある。

むしろ、横浜ボランティア協会の取組みの方が、横浜市よりも進んでいるところがたくさんある。

各課長が、自ら「課の運営方針」や「施設の運営方針」を作成し、仕事を進めている部署なんて横浜市役所にはない。ようやく各区役所で、運営方針を作成することが2003年度から始まるのである。

こんなに一歩進んだ取り組みをしている横浜ボランティア協会が、評価されないなんていうのをだまって見ている手はないのである。

そうであれば、そうした横浜市の施策に対して貢献するため、担当部局に働きかけたり、積極的に協力して、協会の事業と連携させていく行動をとっていかねばならない。

どうも現在のところ、外郭団体というのは、その事業内容の正当な評価を行う前に、行政改革の対象としてしかみられないという辛さがある。外郭団体が行う事業は、行政の下請け、補完、代行としてしかみないのである。だから、見直しの対象になる。外郭団体が行う事業は、行政が直接、行っている事業と映るのであり、「民」の力の活用とはみられない。

だからこそ、これからは横浜ボランティア協会は、単に所管部局に利用されるだけであってはならない。独自の存在価値を示すプロモーション戦略が必要となる。

それは、既述したが３つである。

① 協会の事務局職員を助けてもらうボランティアスタッフや専門指導者の講師陣を増やし、味方を増やすこと

② 青少年行政担当者ほかの部局への積極的な働きかけを行うこと、

③ 協会の事業や活動を積極的なメディアの活用により、市民に公開し、多くの市民や青少年に、横浜ボランティア協会をアピールし、共感と賛同を得、協会がなくてはならぬ存在であることを市民自身の口から、行政に対して言ってもらうことである。

野島青少年研修センター　青少年交流センターの利用と青少年の活動を活発にし、メディアを使って「横浜ボランティア協会」の名前を市民にPRすることである

横浜市の市長や上層部の人たちはボランティア協会のやっていることを、ほとんど知らないと考えてよい。そのことを市民が正しく理解してくれ、その輪が広がればよい。横浜ボランティア協会が今後、目指そうとしていることは、正しいし、きっと青少年の成長に大いに寄与すると信じ自信をもって積極的に取り組んでいってもらうことを期待している。

■ 付記　執筆者の了解を得て、原資料の一部の項目を省略し、小項目を付けた。（編集部　２００８年３月）

ふりーふらっと 5
横浜市青少年交流センター開館 5 周年記念誌

発行日　2008 年 10 月 1 7 日
発行者　財団法人横浜市青少年育成協会
横浜市青少年交流センター
〒220-0032　横浜市西区老松町 25
印　刷　有限会社ワコー
〒241-0022　横浜市旭区鶴ヶ峰 2-20-8
藤巻ビル 102